

第五編
中島博士小傳

目 次

年 譜

第一章 略歴 (1)家系及近親等 (2)幼年時代 (3)青年時代 (4)帝國大學關係 (5)海外留學及出張 (6)東京市との關係 (7)内務省との關係 (8)公人としての博士 (9)家庭 (10)葬去及葬儀

第二章 功績 (1)我水道界の泰斗 (2)門下の薫育 (3)郷黨の斡旋 (4)性行一斑

第三章 感想 (1)須藤義衛門博士 (2)[ワッデル]博士(原文、譯文) (3)近藤仙太郎博士 (4)中山秀三郎博士 (5)木村匡君 (6)茂庭忠次郎博士 (7)龜井重慶君 (8)樺島正義君 (9)吉村長策博士 (10)志賀潔博士

第四章 逸話 (1)工學博士茂庭忠次郎君 (2)工學博士草間偉君 (3)工學士西大條覺君 (4)工學士中桐春太郎君 (5)醫學士氏家信君

附 錄 中島博士記念事業顛末

中 島 博 士 年 譜

(年 代)	(年齢)	事 歴	(年 代)	(年齢)	事 歴
安政 5 年	1 歳	10月12日仙臺市支倉通りに生る。	同 8 年	18 歳	外國語學校(後に宮城英語學校と改稱す)に入學す。
同 6 年	2 歳		同 9 年	19 歳	宮城英語學校在學。
萬延元年	3 歳	9月19日父君仲歿す。	同 10 年	20 歳	同上
文久元年	4 歳	4月25日一家を擧げて祖家の領地磐城國金山町に轉住す。	5 月上京大學豫備門の入學試験に合格し成績優良なるを以て特に第二級に入學を許さる。		
同 2 年	5 歳		同 11 年	21 歳	大學豫備門在學。
同 3 年	6 歳		同 12 年	22 歳	7月大學豫備門を卒業す。
元治元年	7 歳	始めて経書を儒醫高成田玄碩に學び書法を斎藤八十右衛門に受く。	同 13 年	23 歳	東京大學理學部土木工學科に入學す。
慶應元年	8 歳		同 14 年	24 歳	東京大學在學。
同 2 年	9 歳		同 15 年	25 歳	同上
同 3 年	10 歳		同 16 年	26 歳	7月東京大學理學部土木工學科を首席を以て卒業し直ちに東京大學御用掛申付られ、理學部助教授勤務申付らる。10月理學部諮詢部會の會員に選舉せらる、同月27日理學士の學位を受く。
明治元年	11 歳	11月20日仙臺に歸住し書を山岸八彌に讀書を自右良能、木村敏に學ぶ。	同 17 年	27 歳	7月京阪及び大和、伊勢、地方古代建築物取調を命ぜらる、8月大學豫備門生徒入學試験委員に任せらる。
明治 2 年	12 歳				
同 3 年	13 歳	藩校養賢堂に入學し経書及び皇漢書等を修む。			
同 4 年	14 歳	養賢堂在學。			
同 5 年	15 歳	同上			
同 6 年	16 歳	同上			
同 7 年	17 歳	4月初めて設置せる官立宮城			

同 18年 28歳 2月醫學博士田口和美氏の女
同 19年 29歳 仲子を娶る, 3月工科大學助
教授に任せらる, 同月第2回
中學校, 師範學校教員免許學
力試験委員仰付けらる, 4月
奏任官六等に叙せらる, 7月
正八位に叙せらる, 9月衛生
工學研究の爲め米國に留學
す。
同 20年 30歳 6月文部省より3箇年間海外
留學を命ぜらる, 初め1箇年
は米國に於て「ワッデル」博士
に就き橋梁學を修め, 次で衛
生工學專攻に轉じ學理, 實地
を兼修して英國に轉學す。
同 21年 31歳 12月留學中更に佛蘭西, 和蘭,
獨逸等の工事研究の爲め1箇
年間留學延期を命ぜらる, 1月
同 22年 32歳 東京帝國大學の命により羅馬
給水法の調査を遂げ報告す。
同 23年 33歳 11月留學期間1箇年を早め
て歸朝す, 之多年の懸案たる
東京市水道に一大改良を施さ
んとするの議熱し, 此大事業
を託するには博士を惜いて他
に人なしとせられ内命により
歸朝したるものなり。
同 24年 34歳 3月内務技師補を命ぜらる,
同月品海築港調査を囑託せら
る, 4月市區改正委員會の成
案たる淨水工場千駄ヶ谷町の
位置を, 渋橋町に變更するの
意見書を上申して採用せら
る。5月東京府四等技師に任せ
られ奏任官四等に叙せらる,
10月東京市水道技師を命ぜ
らる。
同 25年 35歳 5月渋橋町淨水場を起工す。
同 26年 36歳 2月東京市水道工務掛長を命
ぜらる, 3月本郷給水工場を
起工す。

同 27年 37歳
同 28年 38歳
同 29年 39歳 9月東京帝國大學工科大學教
授に任せられ高等官六等に叙
せらる, 同月土木工學第四講
座擔任を命ぜらる。
同 30年 40歳 7月内務技師を兼任し公許を
得て東京市囑託技師となる。
同 31年 41歳 6月本俸四級俸下賜(文部省)
10月高等官五等に叙せらる,
11月宮内省所屬水道鐵管敷
設工事監督を囑託せらる, 同
月叙高等官五等(内務省)12月
從六位に叙せらる, 同月東京
市技師長を命ぜらる。
同 32年 42歳 3月工學博士の學位を授けら
る, 7月東京市區改正臨時委
員被仰付, 同月中央衛生會委
員被仰付, 9月遞信省電氣事
業取締に關する事項の調査を
囑託せらる, 12月東京市水道
改良工事竣成を告げ其盡力を
賞する爲め特に市會の決議に
より感謝狀に金5千圓を贈與
せらる。
同 33年 43歳 6月東京市吏員證衛委員を命
ぜらる, 9月東京市勢調查委
員を命ぜらる, 11月高等官四
等に陞叙せらる。
同 34年 44歳 1月東宮御所御造營に付給水
並に排水工事の設計及び監督
を囑託せらる, 2月東京水道總
編纂委員を命ぜらる, 3月叙
正六位, 7月都市事業取調の
爲め歐米各國へ出張を命ぜら
る, 10月北米合衆國「ニール」
大學創立第200年祝典執行に
參列仰せ付けらる, 同月米國
水道協會名譽會員に推舉せら
る。

同 35年 45歳 7月歐米各國の都市事業視察
を了へて歸朝す, 8月日比谷
公園造營委員を命ぜらる, 11
月高等官三等に陞叙せらる。
同 36年 46歳 2月第5回内國勵業博覽會審
查委員を仰せ付けらる, 3月
叙從五位, 12月陸軍省より廣
島軍用水道機關並に鐵管檢查
事務を囑託せらる。

同 37年 47歳 1月東京帝國大學給水委員長
並に給水掛監督を命ぜらる,
2月東京市下水設計調査を一
任せらる。

同 38年 48歳 6月商業會議所法第15條第
2項により東京商業會議所特
別議員を命ぜらる, 同月陞叙
高等官二等, 7月御用有之韓
國へ被差遣, 8月叙正五位。
同 39年 49歳 4月製鐵所水道設計及び工事
の監督を囑託せらる, 5月御
用有之韓國へ被差遣, 6月叙
勳五等授瑞寶章, 10月東京市
技師長を辭す, 多年市諸般の
工事を統督し就中水道工事を
完成したる功を多とし市會の
議決を以て表彰せらる。

同 40年 50歳 4月高崎市水道顧問囑託, 同
月大韓帝國政府の囑託を受け
平櫻, 仁川, 釜山の水道工事
を監督す, 5月名古屋水道技
術顧問を囑託せらる, 9月日
本大博覽會工事計畫調査委員
を囑託せらる, 12月叙勳四等
授瑞寶章。

同 41年 51歳 6月東宮御所建築落成に付銀
製大鉢一個を下賜せらる。
同 42年 52歳 4月東京市水道擴張調査を囑
託せらる, 10月中央衛生會委
員被仰付, 12月東京市下水道
施設調査委員會顧問を囑託せ
らる。

らる。

同 43年 53歳 8月韓國勳二等に叙し大極章
を贈與せらる, 10月東京市區
改正委員會より地下埋設物に
關する調査委員に選定せら
る, 10月叙從四位。

同 44年 54歳 9月東京市下水改良工事に關
する顧問を囑託せらる, 12月
叙勳三等授瑞寶章。

同 45年 55歳
大正2年 56歳 6月陞叙高等官一等, 12月東
京市水道擴張工事に關する顧
問を囑託せらる。

同 3年 57歳 5月中央衛生會委員被仰付。
同 4年 58歳 7月帝國大學土木工學第四講
座擔任を免ぜられ同講座分擔
を命ぜらる, 10月鹿兒島市上
水道工事顧問を囑託せらる,
12月叙正四位。

同 5年 59歳 4月製鐵所水道設計及び工事
の監督を囑託せらる。

同 6年 60歳
同 7年 61歳 4月本俸二級俸下賜, 5月中
央衛生會委員被仰付, 6月東
京市水道應急施設調査を囑託
せらる, 同月都市計畫調査委
員被仰付, 10月東京市區改
正第二期速成事業完成に付記念
徽章を贈りる。

同 8年 62歳 2月叙勳二等授瑞寶章。
同 9年 63歳 3月都市計畫東京地方委員會
委員被仰付, 10月東京市區改
正に關し盡力尙からず仍て金
杯壹個を賜はる, 12月帝國大
學土木工學第四講座分擔を免
じ土木工學第四講座擔任を命
ぜらる, 賜本俸一級俸, 12月
叙從三位。

同 10年 64歳 1月東京府下澁谷町水道顧問
を囑託せらる, 2月依願免本
官並兼官, 同月特旨を以て位
を

一級被選叙正三位，4月東京府江戸川水道工事監督を嘱託せらる，5月福島市上水道建設工事顧問を嘱託せらる，8月製鐵所水道に關する調査を嘱託せらる，11月東京市臨時下水道調査委員長を嘱託せらる，12月帝國大學令第13條に依り勅旨を以て東京帝國大學名譽教授の名稱を授けらる。
同 11年 65歳 4月甲府市上水道擴張調査顧問を嘱託せらる。
同 12年 66歳 2月秋田市水道擴張工事顧問を嘱託せらる，4月東京市臨時下水道調査會事業終了に付

第一章 略歴

(1) 家系及近親等

我國水道界の偉人，正三位勳二等工學博士中島銳治君の先系は源氏に出づ，博士十世の祖を中島主馬信泰と云ひ磐城國金山の城主中島伊勢守宗求の三男なり。時は戦國時代の末期にして海内分裂し，諸將各地に據りて互に雄強を競ひ戦争相踵ぎて止まざりき。天正9年伊達性山公，相馬義胤を攻むるや，宗求父宗忠，子信泰等と共に軍に従つて奮闘し毎戦功あり，駒ヶ峯城を圍むに當り性山公輕装して形勢を巡視す城兵俄かに起りて公危地に陥る宗求即ち馳せ來たりて其難を救ひ因りて免るを得たり，小齊を守るや敵の夜襲を謀知し之を大内に要し，斬首80級を得て武名を揚げしことありき。斯く數度の戦功により恩賞群を抜きて金山，大内，伊手二千石の邑土を賜ふ。亂平らぐの後一族昇進して一門の榮を啓く。元和4年信泰分家して別に一家を創立し祿120俵を食み大藩組となる。

父母 中島家第9世康秀は博士の父君なり通稱仲と云ふ，母は同藩士中里軍記の次女名を里といふ，兄あり康庸と稱す博士に長すること2歳，今郷里仙臺市外大年寺山下に閑居せらる。祖父を寛和と云ふ通稱清兵衛と呼べり，文政7年5月定供役拜命以來江戸に勤番たること20有8年，恪勤精勵にして藩中驚歎せざるものな

委員併嘱尙ほ顧問は依然嘱託す，5月桐生市上水道設計を嘱託せらる，同月東京都市計畫區域内に於ける下水道計畫調査を嘱託せらる，8月長岡市臨時上下水道部顧問を嘱託せらる，11月東京市水道に關する顧問を嘱託せらる。
同 13年 67歳 5月多年水道事業に關する功勞に依り旭日章を授けらる。
同 14年 68歳 1月17日土木學會長に推選せらる。2月17日脳溢血症にて薨去せらる，21日湯島麟祥院にて葬儀同日音羽護國寺墓地に葬る。

し，主君特に一貫文を加増して其功を賞せらる。

(2) 幼年時代

博士は安政5年10月12日仙臺青葉城下支倉通りに生る，時に父君34歳にして母は28歳なりき。翌6年祖父江戸にありて突如中風症に罹り遂に起たず，父君仲急遽上京し病父を護して仙臺に歸り，只管孝養を盡しうに圖らざりき父君亦病を得て萬延元年9月遂に死去せらる，時に博士僅かに3歳の秋なりき。當時病蓐に父あり左右に幼兒を抱きて夫君の長逝に會へる母堂の哀傷如何ばかりなりけん，而かも溫良にして貞淑，内に毅然として侵すべからざる氣象を藏めたる母堂は，半身不隨の病父に對する看護と，遺兒康庸，銳治の兩君を鞠育すべき重任を擔ひて，住み馴れし仙臺の地を後にし祖家の領地たる磐城國金山に移りたるは，實に文久元年4月25日にして博士4歳の時なりしなり。

博士幼にして聰慧，體軀飽くまで強健にして剛直なる氣象あり，何事も人後に立つを屑しとせず，嬉遊常に群童の指揮者たり，幼時博士の爲めに痛き目を負されたるもの今猶ほ語り傳ふ。元治元年2月博士7歳にして始めて經書を儒醫高成田玄碩に學び，書法を齋藤八十右衛門に受く，金山に居ること7年明治元年11月20日一家再び仙臺に復り北五番丁に住居す。

博士又儒者白石良能，木村敏等の塾に入りて漢書を學び書法を山岸八彌に就きて修む，同3年18歳にして藩校養賢堂に入る。養賢堂は幕府時代有數の學校にして江戸の昌平校，水戸の弘道館と併び稱せらる，明治5年郭内に中學校を設け北校を英學塾とし，南校を漢學所とし諸生の入學を許したり。博士初め南校に入りて經書及び皇漢書等の講義を受け明治7年4月初めて官立宮城外國語學校（後に宮城英語學校と改稱す）の設置せらるゝや，進んで之に入學せられたり。

當時の仙臺市は教育文化の程度未だ進歩せず，語學を學ぶものをして蟹行の文字となし，其發音を聞きては之を冷笑嘲弄するものあるも博士は大に茲に見る所あり，語學を學ばざれば世界の大勢を知る能はずとなし，只管勉強に餘念なかりき，而して現東北大學附屬病院所在地は實に博士が幼年時代の學窓にして，門前通行の人々は夜間燈火の消滅せるを見たることなしとて其勉強に敬服せざるものなかりしと謂ふ。

英語學校在學中に於ける博士は，粗豪の性格一變して緻密なる勉強家となり，頭

髪鬚々常に梳らず、身には粗末なる綿袍を纏ひて一見奇人の觀あるを以て、外國教師等は奇異の思ひをなし之尋常の人に非ずと評せり、博士の最も得意とする學科は數學にして、其難解なる問題を解決するに方りて常に風呂敷を以て頭を被ひ静思默考するの習癖あり、即ち須臾にして風呂敷を取り去るとときは既に問題の答案は出來上り居れりと云ふ、博士の頭脳は幼年時代より如何に數理上に發達し居りしかを知るに足る。當時同校教師に米國「シカゴ」の人、「グールド」と云へるあり、語學教師として傭聘せられたりしも素と土木工學を修め殊に測量の術に堪能なりき、博士は同教師に景慕すること極めて深かりき、後年博士が土木工學の權威者として大成したる動機は實に此時に胚胎したるものにして、後來博士の事歷上最も注意すべき事なりとす。

博士の宮城英語學校を卒へ寃を負うて上京せられたるは、明治 10 年にして新綠滴らんとする 5 月の頃なりき、之より先き英語學校時代に於ける學友櫻田壽既に上京して神田駿河臺に在り、博士之に頼りて同宿せられ大學豫備門の入學準備に汲々たり、當時の大學生豫備門は現第一高等學校の前身にして、東京大學に進むべき唯一の登龍門と謂つべく青年子弟仰望の中心たり、博士入學試験に合格せられ、而かも優等の成績なるを以て特に第 2 級に入學を許さる。

(3) 青 年 時 代

明治 12 年 7 月大學豫備門を卒業したる博士は近藤仙太郎、大屋權平氏等と共に東京大學理學部土木工學科に入學せらる、當時青年時代の博士は身心飽くまで剛健にして、直情徑行他人の迷惑を顧ざる難あり、常に音讀をなし爲めに同室者の困惑一方ならざりきといふ、又居常邊幅を飾らず蓬髮垢面帽子を阿彌陀に被り身を反りて天を仰ぎ道路の凹凸、泥濘など頓著することなく一直線に歩行するを常とせり、友人之を見て希臘の哲學者の如しと云ふ。

在學 4 年天稟の英才に加ふるに驚嘆すべき博士の勉強は、異數の成績により明治 16 年 7 月首席を以て卒業せらる、而して同期の卒業者は工學博士近藤仙太郎、工學博士大屋權平、野口嘉茂氏の 4 名なり。

(4) 帝 國 大 學 關 係

博士は明治 16 年 7 月東京大學理學部土木工學科を卒業し、直ちに同大學御用掛

を仰付られ同 19 年 3 月同工科大學助教授に任せらる、同年 9 月海外遊學の爲め職を辭し明治 23 年 11 月歸朝し、東京市水道工事長を始め東京市區改正委員會等の重要樞機に參與したるも、明治 29 年 9 月再び帝國大學工科大學教授に任せられて土木工學第四講座を擔任す、又内務技師を兼任せらる、明治 32 年 3 月工學博士の學位を受く、大正 10 年 2 月大學を退くや同年 12 月帝國大學令第 13 條に依り勅旨を以て東京大學名譽教授の名稱を授けらる、博士が大學教授として在職せられたること實に 20 有 5 年其間教育上業績の偉大なるに、加ふるに德化の篤きを以てす、故に一と度び博士の講筵に侍するものは敬慕信賴の念を起さざるはなく其誘掖指導に依り博士たり學士たる秀才前後幾百人なるを知らず皆我が土木學界に於ける重要な地位を占む博士を以て現代土木界の慈母と稱するも誰か之を不可とするものあらんや。

(5) 海 外 留 學 及 出 張

博士は明治 19 年 9 月自費を以て米國に留學を企圖せらる、之より先き大學助教授時代主任教授「ツッデル」先生に師事し之を補佐して著書普通公道鐵橋計畫書の編纂に助力せられたる關係ありしを以て渡米先づ「ツッデル」先生の許に寄寓せらる、然るに翌 20 年 6 月文部省より在米中の博士に對し 3 箇年間歐米留學の官命あり仍つて初め橋梁學を修めたりしが後古市博士の勸誘により衛生工學專攻に轉じ學理實地を兼修して英國に轉學し次で佛蘭西、和蘭、獨逸に斯學の蘊奥を極む同 21 年 12 月更に 1 箇年間留學延期を命ぜられたるも、時恰も多年の懸案たる東京市水道に一大改良を施さんとする秋にして此大事業を託するには博士を指きて他に人なしとし時の内務省土木局長古市博士の内命を以て留學期間 1 箇年を早め明治 23 年 11 月歸朝す。

明治 34 年再び東京市より歐米各市に於ける都市計畫事業の視察を命ぜられ技師工學博士直木倫太郎氏と共に同年 8 月 10 日東京を出發し横濱より同日解纜の便船に乘じ布哇「ホノル」港を経て同月 26 日米國桑港に著し夫れより各著名都市の視察を遂げ同年 10 月「エール」大學創立 200 年祝典執行に參列し猶ほ米國水道協會名譽會員に推舉せらる、次で英國に航し倫敦に入りたるも、時恰も濃霧英京を覆ひ白晝尙ほ燈火を要するが如き有様なりしを以て直に大陸に渡り白耳義、和蘭、佛蘭西、瑞西、伊太利、羅馬、奧太利、匈牙利、獨逸等の都市を巡視して調査する處あり、

之より再び倫敦に歸りて英國の各市を巡り更に丁抹、瑞典を経て露國を視察し西伯利亞鐵道に依りて浦鹽斯德に至り、海路門司港に出で明治 35 年 7 月 26 日無事東京に歸着せられたり。今回の歐米視察は博士第 2 回目の洋行なり故に到る處舊知相識の士あり、諸般の調査上に便宜多かりしと雖も僅々 1 箇年の視察期間に各地を轉轉して都市計畫事業の全般を調査するは却つて不徹底に終るべきを慮り、直木技師をして専ら築港に關する調査に當らしめ、博士は親ら上下水道其他主要工事のみに對し出來得る限りの視察を遂げられたり。今其調査事項を擧ぐれば上水、下水、道路、市街鐵道、發電所、汚物處分法、屠獸場、電燈瓦斯設備、橋梁、公園、運河等にして何づれも都市計畫上重要の事項なりき。

博士今次の視察は期間短時日なりしと雖も該博なる智識と精透なる觀察力は能く事業の眞髓を會得せられ依つて以て大東京市の施設改善に盡瘁貢獻せられたるものありしは固より怪しむに足らず。

(6) 東京市との關係

博士と東京市との關係は明治 24 年 10 月東京市水道技師に任せられたるに起る。由來東京市は清淨なる飲料水に乏しく舊幕時代既に神田、玉川、千川、龜有、青山、三田等の水道あり之を市民の飲用に供したりしが、其工事不完全なるのみならず既に老朽腐蝕して水質を汚損し殆ど其効用を失はんとす加之年々惡疫流行等のことあり衛生上の必要に迫られ遂に明治 23 年東京市區改正委員會に於て之が一大改良を斷行するの議を決定するに至れり。

當時恰も博士は獨逸留學中なりしが、時の内務省土木局長古市公威氏より直に歸朝して此工事に從事すべきの内命を受け留學期限の満了を待たずして 23 年 11 月歸朝せられたり。然るに東京市に於ける財政上の調査未了の爲め直に著手の運に至る能はず、仍りて翌 24 年 3 月内務省技師補を命ぜられ職を市區改正掛に奉じ市區改正委員會に於て調査せられたる既往設計の精査に任す、市區改正委員會當初の設計は先づ其給水の根源たるべき淨水場を府下豊多摩郡千駄ヶ谷町に置き、又低地給水場を小石川區傳通院近傍及び麻布區今井町附近に設置するの計畫なりしが、博士は地勢其他諸種の状況を調査したる結果、淨水場を淀橋町に置くを最も適當なりとし詳細に研究せんとしたるも、當時市區改正掛には其測量調査等に要する費用の出所無く、種々苦心の結果漸く東京府廳の盡力にて測量を遂行することを得たり結果

は豫想以上にして總て博士の希望を満足せしむべき結論を得たり、仍て淀橋地内に淨水場を置き又低地給水場を本郷區元町及び芝區榮町に設くるを適當の位置なりとし水道事務所長古市公威氏の賛成を得て之が變更案を市參事會及び市區改正委員會に提出したり(東京市上水道參照)是に於て東京市區改正委員會は博士立案に係る新設計を慎重審議したる結果其便益頗る大なることを認め乃ち之を採用することを決議し内務大臣に變更の件を稟請して之が允許を得たり。斯くて古市博士の下に全般の設計及び工事施工を監督し古市氏退任後は工事長として其任に膺り明治 25 年 12 月工を起し 6 箇年の星霜を経て 31 年 11 月一部通水し 32 年 12 月工事完了を告ぐるに至れり。

本工事は實に本邦最初の大工事にして其施工に當り從事すべき經驗ある技術者は之を得るに途なく、起工に直面して是等職工を養成するの必要あり、其他諸種の困難名狀すべからざるものありしに拘らず博士は孜々として經營の任に當り斯を過らずして通水するを得たり、而かも竣工後 30 有餘年を経過せる今日に於て各部に大なる缺點の生ぜざるは其工事の堅實なるを證するものにして博士の功績寔に偉大なるものと謂はざる可からず。

明治 31 年 12 月東京市技師長に任せられ水道工事の外、市土木事業一般の經營及設計監督の任に就き又同年宮内省の命を受け宮城内の水道設備をなし全く市と獨立して給水し得らるゝ計畫を立て、工事施行に際しては其監督の任に當り大正 3 年 7 月竣工を見るに至る。

明治 34 年 2 月東京市水道誌編纂委員を命ぜられ同年 7 月市事業取調のため 1 箇年間歐米各國に出張を命ぜられ同年 8 月 10 日工學博士直木倫太郎氏と共に東京を出發し翌 35 年 7 月 26 日歸朝せられたり。之より先き東京市は下水道改良の議朝野の間に提唱せられ、明治 21 年市區改正委員會の成立は更に其機運を促進し爾來幾多の研究調査を遂げたるも完結を見るに至らず明治 37 年 2 月に至り其設計調査全部を擧げて博士に嘱託することとなれり。當時調査に要する諸種の資料充分ならず殊に市内土地の高低等既往の調査なきを以て約 1 箇年半の日數を實測に費し、且つ諸般の重要事項を詳査して設計圖を樹て 40 年 3 月漸く其計畫を完成して調査報告書を市區改正委員會に提出せり(東京市下水道參照)即ち東京市區改正委員會は之が設計に基き東京市下水施設調査會を組織し博士又其顧問に擧げられ明治 44 年 9 月工事を起し爾來 10 有餘年を経て大正 11 年其第 1 期工事竣工を告げ茲に本

邦最初の下水處分工場の完成を見るに至れり。本工事は實に規模の廣大なるのみならず、生活其他諸種の情況の異なる我國に始めて外例を應用せんとす、其苦心たるや尋常のものに非ざりしが博士の深刻なる學識と周到なる計畫は茲に其大成を見るに至らしめたるものにして獨り東京市民の慶福たるに止まらず亦以て範を全國に示すに足る其洪益蓋し卓異なるものなりと云ふ可きなり。

明治 39 年 10 月東京市技師長を辭せらる、任に在ること實に 10 箇年博士多年東京市諸般の工事を統督し、就中水道工事を完成したる功勞を多とし東京市會は決議を以て金 5,000 圓を贈り其勳功を表彰せり。

明治 42 年東京市水道擴張の必要起り市區改正委員會は其擴張計畫全部を又博士に囑託す、是に於て博士は諸種の材料を蒐集し慎重なる研究と周到なる推理の結果甲乙 2 指を得たり、即ち府下大久野村に貯水池を設け他日の補助水を秋川に取るものを甲指とし、村山に貯水池を設け他日の補助水を名栗川に取るもの乙指とす、市區改正委員會は此兩指に就き慎重審議の結果遂に乙指を採用することに決したり、然れども其設計の根本義は兩指同一にして只貯水池の位置、將來の水源、工費の多少、工事の難易及水質等に多少の差異あるのみ其水源を豊富にし給水を増加し水路を改良し且つ自然流下法を採用するに於ては兩指共に同一目的に外ならざるなり。斯くて計畫設計共に成り大正 2 年 12 月其工を起すや博士又工事顧問を囑託せられ爾來歐洲戰亂に因る財界の變動次で大正 12 年 9 月に於ける空前の大震災に遭遇せるも不撓の努力は博士の懇切なる指導と相俟つて大正 13 年 3 月第 1 期工事の竣工を見るに至れり、之によりて東京市は 1 日 500 萬立方尺の給水量を増加し從來の 900 萬立方尺と合して 1,400 萬立方尺の給水を爲すの實力を有す、今や滾々たる多摩の巨流を湛へたる村山貯水池は優に人口 300 萬以上の給水力を保ち東洋第一の名を擅まにするを得たるは眞に空前の盛事にして東京市民の幸福たる蓋し大なりと謂ふべし。

惟ふに都市の發展に伴ひ施設經營すべき事一にして足らずと雖も、就中水道事業の如きは市民幾百萬の賴りて以て生命を托するものにして衛生、保健、防火の上より見て寸時も忽諸に附すべからざる緊要事業たり、博士職を東京市に奉じて以來 10 有餘年主として上下水道に全力を傾注し、退職後と雖も或は顧問たり或は指導者たるを快諾せられ遂に市百年の長計たる上下水道の偉業を完成せらる、其赫々たる功績は永へに滅せず、吾人一滴の水を掬する時に於て博士に對する畏敬の念禁ずる能

はざるを覺ゆ。

(7) 内務省との關係

明治 30 年 7 月 博士内務技師を兼任し土木局勤務を命ぜられ、爾來在職 20 有 5 年其間全國各府縣は勿論殖民地等に出張し水道事業の普及獎勵に關し最も心血を濶ぎ常に政府當局と公共團體との折衝に斡旋し事業促進に努力せられたるのみならず、之が審査監督に當りては最も懇切周到を極む、今や全國 200 有餘の上下水道事業中其大半は殆ど博士の審査指導を経たるものなりと云ふ。

(8) 公人としての博士

公人として博士の關係せられたる事業は頗る多く枚舉に遑あらず、今其最も著しきものを擧げ以て博士の公生涯を偲ばんと欲す。

東京市區改正委員會と博士 明治 21 年 8 月勅令を以て東京市區改正條例制定せらる、由來同會の目的は其範圍頗る廣汎にして道路を新設又は改修し、河川を開鑿如くは改良し、橋梁を架し或は家屋の制を設け或は上水を改良し、下水を疏導し、大小遊園を設け、商法會議所及び共同取引所を置き魚鳥蔬菜市場及び屠畜場を作る等苟も東京市區の改良に係れる者は總て改正事業の一部たらざるはなし、明治 24 年 3 月博士内務技師補を命ぜられし時市區改正係となり品海築港調査囑託、同 32 年 7 月臨時委員となりて東京市下水道設計調査を一任せられ同 42 年 4 月東京市上水道の擴張調査同 10 月地下埋設物に關する調査等多年同會に在りて諸般の事業に參畫盡力せられたる功績偉大なるものあり大正 9 年 10 月賞勳局より金杯下賜の恩典に浴せり。

中央衛生會と博士 明治 28 年 4 月勅令を以て同會官制を施行せらるゝや博士又同會委員を仰付けらる、時恰も下水道法の立案當時にして同法律の成案に關しては博士専ら之に盡力せられ爾來同委員を繼續して仰付けらるゝこと 4 回大正 11 年 5 月まで委員たり、其間明治 44 年 3 月、大正 2 年 4 月及び大正 10 年 7 月の水道條例改正を審議せらるゝに際し一は監督上より一は事業者側より理論と實際とを基礎とする意見を發表せられ多大の貢獻を與へられたるは今尚ほ世人の普く知る所なり。

工學會と博士 博士は工學會員とし又評議員として多年會務に盡力せられたるのみならず嘗て上水協議會より水道鐵管標準型調査の依托を受け博士其蘊蓄を傾けて

之が指導に盡力せられ最近再び上水協議會の委嘱に依り更に水道鐵管異形管標準型調査並鐵管耐震試験等を行ふに當り博士は擧げられて委員長となり指導統率能く其當を得著々進行し今や其大半を終へ近く其結果を見んとする時博士の薨去せられたるは寔に遺憾なりと雖も、曩に博士の盡力に由りて水道鐵管基準の確立を得たるは本邦水道界の記録に最も特筆すべき恩恵なりと謂はざる可からず。

上水協議會と博士 上水協議會は改良水道を有する全國各所の當事者會同し上水道に關する諸種の事項を研究し且相互報告書を交換する目的を以て明治 37 年東京市の首唱に依り成立したるものにして爾來毎年 1 回各所輪番に開催し既に 22 回の會議を重ね會員は内地は勿論滿鮮臺灣を通じ 82 箇所を算するの盛況なり而して如斯本會の振興發展を見、今や斯道唯一の研究機關として前途に一大光明を與ふるに至りたるは實に博士の熱力なる勸説に基く所多大なるを認めざるべからず。

都市計畫委員會と博士 大正 7 年 5 月勅令を以て都市の衛生、交通、警察、經濟等を理正し安寧福利を増進すべき施設を確立せんが爲め都市計畫委員會を設けらるるや博士は大正 7 年 6 月を以て同會委員を仰付けらる同 9 年 3 月東京地方委員會委員を仰付らる、爾來都市計畫上重要機關に參畫し諸般の審議に公正なる意見を持し能く正當の歸趣を得せしめたる功績は極めて大なり。

其他遞信省電氣事業取締に關する調査を初めとし東京市勢調査委員、東京市水道誌編纂委員 第 5 回内國勸業博覽會審査委員、商業會議所特別議員、日本大博覽會工事計畫調査委員等殆ど算ふべからず、博士は如何に各種の方面より推重せられたるかを察するに足らん。大正 14 年 1 月土木學會々長に推薦せられたるも就任僅かに月餘にして薨去せらる寔に痛惜の至りに堪へざるなり。

(9) 家 庭

博士幼にして父君を喪ひ母堂鞠育の恩を受けしこと最も多し、素より孝心に篤き博士は母堂に對する奉養至らざるはなく人皆之を歎稱せざるなし（母堂は大正 4 年 1 月 15 日 87 歳の高齢にて逝去せらる）夫人は醫學博士田口和美氏の長女にして名を仲子と言ひ明治 19 年 3 月博士に嫁し 2 男 4 女を擧げらる、性溫順にして貞淑内助の功績著るし、長男は夭逝し次男清夫君嗣を繼ぎ目下東京帝國大學法科大學に在り、長女せん子は工學士森忠藏氏夫人となり次女かつ子は醫學士氏家信氏夫人たり三女やす子四女けい子今家に在り。

(10) 葬去及葬儀

博士攝生を重んずること深く平素の生活極めて整然たり往年腎臓を患ひ大手術後の經過頗る良好にして靜養數月に亘り全く平癒し爾來健康益々旺盛なりき大正 10 年 2 月凡ての官職を辭せられたりと雖も博士の關係せる事業は全國に及び其範圍非常に廣く且つ主義として偷安的生活を忌み東奔西走席喫まる遑なく爲めに多少老軀を過勞せられたる恨みなしとせず大正 14 年 2 月 16 日鶴見町水道調査を了へ歸宅せられ毫も平日と異なる所なかりしに同日午後八時脳溢血のため昏倒せられ主治醫學博士福島東作女婿氏家信兩氏の手當看護も其效無く翌 17 日午後 3 時に至り呼吸時々困難の發作を起し脈搏次第に微弱となり體溫愈上昇し同八時三十分に至り急性肺氣腫加はり強心剤の注射も其效なく遂に午後九時十分一大呼吸を最後として安らかに薨去せられたり享年六十八歳。

博士薨去の報天聽に達するや生前の勳功を

中島博士壙誌 中島博士諱銳治考仙臺藩士諱仲妣同藩中里氏君乃其次男也以安政五年十月生學於東京大學爲理學部助教授以命航子歐米專攻衛生工學歸朝遷內務省技師及東京市技師數年復住工科大學教授次爲工學博士教育英材榜督宮内省遞信省韓國度支部等工事其他中央衛生會委員都市計畫調查會委員等以委員廳託之名者十一東京市下水工事仙臺市上下水道名古屋市水道技術等以顧問之名者二十二儀博士之手而成世間厚生之計甚多官達高等官一等位至正三位勳二等退官後優遇爲大學名譽教授娶田口氏生二男四女長男天次男清夫繼家長女適森工學士次女適氏家醫學士大正十四年二月十七日以病薨

時、勅使として子爵安藤信昭氏參向せられ幣帛並に祭資料金 8 百圓を下賜せらる博士薨じて猶餘榮ありと云ふ可し。

葬儀は 3 日を越へて 21 日日本鄉區湯島なる麟祥院に於て行はれたり此日正午出棺途中正式の行列を廢し駒込林町より着町に出て帝國大學門前通行の際は博士の因縁深きを以て殊

に徐行し本郷三丁目を左折し麟祥院に著柩したるは午後零時 20 分なりき先づ靈柩を本堂に安置し銘旗を樹て勳二等旭日重光章、勳二等瑞寶章、勳二等大極章を斎壇に供へ左右に生花を配置し莊嚴なる讀經の式終了と共に告別式を擧げ更に讀經聲裡に會衆交々燒香禮拜して退出し午後 4 時頃式全く終れり。

博士の遺骸は式後小石川區音羽護國寺共葬墓地に埋藏せり壙誌は第一高等學校教授今井彦三郎君の選文にして 257 字より成る。

此くの如くして我が水道界の大偉人は永哉。

弔詞

東京帝國大學總長弔詞

東京帝國大學名譽教授正三位勳二等工學博士中島銳治君長逝せらる鳴呼哀しい哉君明治 16 年 7 月東京大學理學部土木工學科卒業し東京大學御用掛となり同 19 年 3 月帝國大學工科大學助教授に任せられ尋て衛生工學研究の爲歐米に留學し斯學の蘊奥を究め歸朝後内務技師試補東京府技師となり同 23 年 9 月工科大學教授に任せられ土木工學講座を擔任し内務技師を兼任し大正 10 年 2 月其職を辭し同年 12 月名譽教授の名稱を授けらる君本學教授として在職せらるゝこと 20 有 5 年其の間諱々として後進を教導し教々として學術を研究すると同時に之が應用を圖り功績勳からず東京市上水工事の如きは其最たるものにして其計及實施は實に本邦人の計畫に係る水道工事の嚆矢たり又本邦内地の都市の上水及下水道並に幹國水道局の水道工事等君の參畫せるもの無慮 10 有數箇所の多きに上れり尙ほ君は中央衛生會委員東京市區改正臨時委員都市計畫調查會委員等の要務に肩り盡瘁せること頗る大なり、君資性溫厚學識淵博後進を誘掖すること懇切にして斯學の權威として名聲一世に高く學會永久君の惠に頼らんことを期したるに不幸ニ暨の犯すところとなり溘焉として逝かる鳴呼哀しい哉然れ共君が遺せし功績は永く後世に垂れ英名は長に青史を照さん君以て瞑すべし謹みて茲に弔辭を呈す

大正 14 年 2 月 21 日

東京帝國大學總長 古 在 由 直

東京市長弔詞

正三位勳二等工學博士中島銳治君は明治 24 年 10 月本市水道技師となり同 39 年 10 月に至る迄水道工事長技師長等として本市水道其他一般技術上貢獻する所勳からず殊に本市水道の完成に付ては君の最も力を傾注せられたる所にして同事業の今日ある君が當時の苦心經營に負ふ所甚だ大なり、而して本市更に水道擴張の必要を認むるや亦之が調査に當り後本市の依嘱に依り上下水道工事の顧問として之等工事實施の指導に盡瘁せられ功績顯著なるものあり然るに今や逝去の訃に接し哀悼の情に堪えず茲に謹て弔辭を呈す

大正 14 年 2 月 21 日

東京市長 中 村 是 公

工學會理事長弔詞

本會贊助員工學博士中島銳治君薨去せらる君は我國水道工事の先覺者にして全國の水道多く君が手に成り殊に東京水道は最初より一に君の設計に依るものにして實に斯道の恩人たり又本會に在ては評議

員として多年會務に盡力せられたる上譽で本會が上水協議會の依頼を受け水道鐵管標準型調査の事に從ふや君は其蘊蓄を傾けて努力せられたり蓋し我國水道鐵管の基準は之に由て確立せり本會最近再び上水協議會の委嘱に依り更に水道鐵管異形管標準型調査並に鐵管耐震試験等を爲すに當りては君は擧げられて委員長となり指導統率能く其當を得著々進行し今は其大半を終へ近く其結果を見んとするの時に際し溘焉として薨去せらる實に遺憾に堪へざるなり茲に謹んで弔辭を呈して深甚なる哀悼の意を表す

大正 14 年 2 月 21 日

工學會理事長

從三位勳一等工學博士男爵 古 市 公 威

學士會弔詞

學士會は會員工學博士理學士中島銳治君の遠逝を哀悼し恭しく茲に弔辭を呈す

大正 14 年 2 月 21 日

學士會

土木學會弔詞

土木學會は會長正三位勳二等工學博士中島銳治君の薨去を哀悼し茲に恭しく弔詞を呈す。

大正 14 年 2 月 21 日

土木學會

仙臺市長弔詞

維時大正 14 年 2 月 21 日仙臺市長鹿又武三郎謹て故工學博士中島先生の英靈を弔ふ先生は我が仙臺出身の碩學にして夙に鄉黨の崇拜する所たり特に明治 30 年本市に上下水道施設の問題起るや先生は實に其顧問として此議を決し且つ百般の施設を指導助力せられ上水道は既に大正 12 年を以て完成し下水道亦成功に近からんとす先生の本市に與へられたる恩惠は精神界にも將た事業界にも甚大にして市民今猶ほ齊しく景仰して措くこと能はず而も不幸一朝にして斯の大恩人を亡ふ葛そ痛悼に堪へん不肖茲に恭しく追悼を靈前に供へ弔祭の誠を致す尙くば捷けよ。

大正 14 年 2 月 21 日

仙臺市長從四位勳四等 鹿 又 武 三 郎

其他荒玉水道町村組合、宇都宮市長、江戸川上水町村組合、工手學校長、瀧谷町長、工政會理事長、仙臺同鄉會、仙臺育英會、五十會、帝國鐵道協會長等の弔詞ありたれども省略す。

第二章 功績

(1) 我水道の泰斗

上下水道の事業たるや一國文化の要素にして、都市と言はず町村と言はず苟も國民の衛生上、治安上一日も缺くべからざるもの將來人文の發展に伴ひ益々發達を期すべき事業なりとす。博士米國に留學し次で歐洲に行き専ら衛生工學を攻究し斯學の蘊奥を極め歸朝後東京市上水道工事を擔當して之を完成せられしを嚆矢とし爾來直接關與して其設計、計畫及施工の監督に當られたるものに宮城内水道及東宮御所並に宮ノ下御用邸の水道、東京市上下水道及擴張工事、仙臺市上下水道、名古屋市上下水道、八幡製鐵所、高崎市、熱海町、宮城縣鹽釜町、山形縣谷地町、小樽市、室蘭製鐵所、松江市、高松市、鹿兒島市、東京府澁谷町、上田市、長崎市擴張工事、徳島市、江戸川上水町村組合、福島市、秋田市擴張工事、津市、長岡市、荒玉水道町村組合等の上下水道あり、設計のみ完了せるものに福島縣飯坂町、橘樹水道、明石市、甲府市擴張工事、前橋市、鶴見潮田組合、桐生市、松江市擴張工事、八王子市、及熱海町擴張工事等の上水道あり其他特殊のものを擧ぐれば東京帝國大學、日本銀行、東京驛構内、第一生命相互株式會社等の給水及排水工事、信州善光寺防火水道工事等あり、尙殖民地方面に於ては釜山水道、仁川水道、及平壤水道の工事に關與し其功に依り明治43年韓國勳二等に叙し大極章を贈與せられたるを初め南滿鐵道附屬撫順水道及支那營口並に漢口等の水道調査を囑與せらるゝ等本邦水道工事以外友邦に至る迄博士の指導監督を受けたるもの甚だ多し、宜なるかな大正13年博士の多年水道事業に盡瘁したる勳功を思召され、特に勳二等旭日章を授けらる博士の榮譽亦大なりと謂ふべし。

(2) 門下の薰育

博士は門下の薰育に當り常に實踐以て範を示し嚴肅の中寬弘の氣を含む。門下生を指導愛撫することは恰も骨肉を愛するが如く親切懇到盡さざる所なかりき、されば其薰陶に依り身を立て名を成したるもの渺からず、殊に門下の就職斡旋等に關しては最も然諾を重んじたる人格者にして假令請托を受くるも斡旋の方便なく確乎たる見込無き時には即座に之を断り其間何等の世辭も飾詞もなく一見冷淡の如くな

れども一旦肯諾を與へらるゝや、必ず之を實現せるのみならず將來に就きても全く痒き所に手の届く程入念に世話を盡されたりと云ふ(茂庭博士追憶參照)

(3) 鄉黨の斡旋

博士は在京學生の爲め直接間接に盡力せられたることは同鄉人の洽く認識する所なり、彼の故富田鐵之助翁其他在京先輩の主唱に由り同鄉秀才の學資を補給せんが爲め仙臺造士義會の設立せらるゝや、博士は卒先して金200圓を寄附して之を援助せられ、常に理事者の員に加はる。又五城義塾の維持經營に就きても多大の聲援を與へらる。五城義塾は元同鄉の東京帝國大學々生の有志により組織せられ共同自炊をして學資の節約を圖るの外、學生の風教を維持し、親睦を旨としたるものにして郷里の父兄をして安んじて子弟を遊學せしむるに於て最も意義ある事業なりき、博士は繁劇多忙の身をも顧みず専ら之が後援者として獸醫學博士須藤義衛門氏、文學博士大槻文彦氏、鈴木知雄氏、落合直文氏、齋藤秀三郎氏、等と協力して維持費の調達を助成し補助の方法を講ずる等斡旋盡力大に努められたる業績大に舉がり五城義會の名聲一時同鄉を壓倒するに至れり、當時同會より輩出したる名士頗る多く皆社會に樞要の地位を占め活躍しつゝあり、後年五城義會を閉鎖して五城寮成り更に仙臺造士義會及養賢義會等を併合し仙臺育英會と改稱し財團法人組織として經營するに當りても博士は亦資金を寄附して之を翼賛し同會の推選により常議員となり重要議事に參與し其發達に努められたるのみならず、同會出身者の就職等に就ては懇切に配慮斡旋せらる、今次博士の薨去は同會出身者に取りて甚大なる損失と謂ふべし。

(4) 性行一斑

莊重の態度 博士體軀雄偉にして儀容整秀、眼光炯々として人を射自から畏敬の念を生ぜしめたり所謂威ありて猛からずの語能く之を表し得べし。

沈著 常に真摯熱誠を以て一貫し未だ嘗て疾言遽色の跡を見ず、勿急の際と雖也能く沈著の態度を保持し泰然自若たり、固より故に矯飾して然りしに非ず、其天稟の美質に加ふるに修養の功を積まれたる結果に因る。

嚴正 博士最も嚴格方正にして正義を重んずること篤く苟も德儀に缺くる所あれば平素人に對する極めて寛厚なるに似ず之を假借せられざりき。

意志の強固 意志極めて強固にして其所言を斷行するに當りては貴權を憚らず威武に屈せず態度頗る堂々たるものなりき。

公明の心地 品性崇高にして氣格公明超然として群を抜くものあり、嘗て東京市に疑獄事件起り要路の議員檢舉せらるや博士歎じて曰く、市政に膺る者須らく廉潔公正ならざる可からずとて紐育市長當選の「シセル」卿の態度を引用し戒められたりと云ふ(龜井重慶氏追憶文に據る)博士は如何に世の背徳不正を忌まれたるかを知るべし。

用意周到 思慮慎密用意周到にして、算成り計熟したる後に非ざれば容易に事を擧げず所信を貫くに勇なれども決して成效を急がず努めて萬全を期するの風あり博士晩年に曰く、(壯年時の事業は假令多少の缺點ありと雖も之を發見する時に於て自ら改善修補をなし得るも、老後の事業は自ら之を改むる餘日なきを以て勉て缺點のながらしむることを期す)と訓言せられたりき。

温情 自ら持すること厳格なりと雖も人に接しては寛裕にして春風の溫和なるが如し亦極めて友情に厚く舊友にして偶々博士を訪へば欣然として之を迎へ優遇厚待至らざるなく常に消遣自適の場所たる上野精養軒等に相携へ食卓を闊んで歡談するを例とせり(須藤博士追憶參照)

談話 博士沈重寡默にして必要止むを得ざるの外は世の所謂演説等を試みらるゝことなかりき、然れども一旦口を開けば言々肺腑より出で莊重力あり簡潔にして含蓄深く聽者をして感激する所あらしむ、又時として抑喩諧謔を以てせらるゝことあれども其間教訓の意を寓し不知不識の間に何物かを得る處あらしめき。

(三瓶主事)

第三章 感 想

須藤義衛門博士

△ 腕白時代

君の幼年時代は非常に腕白で仙臺藩校養賢堂(江戸の昌平校、水戸の弘道館と併称せられた舊幕時代有数の學校)在學中の如きは屢々校友と争ひ、何時も腕力に訴へて勝を博した。其當時君の爲めに苦しめられたる記憶を抱くもの多く今尙ほ談奮の資料にして居る程である。

明治7年仙臺に官立宮城外國語學校(後宮城英語)が設立せられ、君も予も多少英語の素養があつたので俱に入學した。當時此學校と同様な學校が東京、名古屋、長崎、大阪、新潟、及び仙臺都合6校あつたと思ふ。

此學校には備付の英書が可なり澤山あつて「ウイグストル」の大辭典が25冊もあつた。これは福澤諭吉先生が仙臺藩の爲に米國より購入したものを藩から學校に移管された爲めである。

維新前仙臺藩の江戸留守居役に大童信太夫と言ふ人があつた。此人は仲々の卓見家で福澤先生の志を愛し、書籍購入費等を補助し善く世話をされたそうで、此事に就ては大童翁の直記もあり、又福澤先生の自叙傳中にも記述されて居る。前首相高橋是清子を推薦して仙臺藩から米國に留學せしめたのも大童翁であつた。

福澤先生が初めて渡米されたのは幕府より軍艦咸臨丸を米國に派遣した時で、時の艦長は木村攝津守(芥舟)航海長は勝海舟先生、機関長は肥田濱五郎氏であつた。福澤先生は木村攝津守に依頼し其從僕と云ふ名義で乗込まれたのである。當時天下の風雲甚だ急にして何時兵革の起るやも測りかたく、仙臺藩も亦兵制を改革し武器を充實するの必要ありし爲め、大童翁が福澤先生の旅費を補助すると共に之等の調査購入を依託されたのである。福澤先生は兵器も多少購入したが意外にも英書を澤山購入して來られた。

予等の見た大英辭典は則ち其一部である。尤も其當時予等は大辭典を用ふる程の學力なく、唯其浩瀚なると圖畫印刷の精巧なるとを驚嘆したに過ぎない。

語學校入學後の君は養賢堂に在りし時とは別人の如き温良の生徒となつて專心勉學せられたが、當時君の態度は所謂東洋的豪傑風にして常に頭髪を梳らず身には粗末な綿袍を纏ひ、一見奇人の觀があり外國教師連は奇異の思ひを爲し、之凡人に非

ずと評して居た程である。同校教師米國「シカゴ」市生れの「グウルド」氏は素と土木工學を修め殊に測量術に堪能であつたが、同教師は君を愛すること深く君も又一方ならず私淑されたのである。後年君が土木工學界の泰斗たりし動機は實に此時に胚胎したものと思はれる。數學は君の最も得意とする處で其難解な問題を解決するに方り、常に風呂敷を以て頭を覆ひ靜思默考須臾にして風呂敷を取り去る時は、必ず問題の答案が出來上つて居つた。同校では總ての學科は皆外國教師について英語を以て學んで居たが、或時百分比例の數學問題に「ライフ、インシュランス」又は「フハイア、インシュランス」云々と言ふことがあつて、今ならば誰れにも直ぐ生命保険又は火災保険と解釋が出来るが、此時代には其意味を了知するものなく、生命を確め又火を確める會社とは何であらう、「ライフ、インシュランス、コンパニー」とは醫者を抱へて置く會社で、「アフィア、インシュランス、コンパニー」とは消防夫を養つて置く會社であらう杯と臆測して其儘不得要領に終り、實に隔靴搔痒の感があつたのである。

△ 大 學 入 門

明治 10 年(西南戰争の年)君は志を立てゝ上京し大學豫備門(現第一高等學校の前身)の入學試験に首尾よく合格し第二級に入學した。宮城英語學校時代同級にして俱に上京した學生は三浦健、櫻田壽、多田銅廣、本間榮三郎、作間餘三郎、中原貞七、岩澤某及予の 8 人であつたが、今は作間、中原、予の 3 人を除き他は皆物故して仕舞つた。

君の大學生中は猛烈に勉強し常に盛んに音讀をなし同室者の迷惑など毫も意に介せず、平然として居た。此頃君は往來を行くに天を仰ぎて反り身となり、帽子を阿彌陀に被り、泥濘や凹凸に頓著なく道路を一直線に歩行するのが癖で多分數理を考へつゝ歩いた爲めであらう、希蠟の哲學者の様だと評したことがあつた。酒は小酌で煙草は絶対に嗜まなかつたが仲々の健啖家であつた。

△ 海 路 歸 省

上京後暫く君と予とは神田駿河臺に下宿して居たが、君は大學豫備門に入り予は駒場農學校の獸醫學本科に入學し全く別途の方向を取ることとなつた、駒場と神田(大學豫備門は今の商科大學の向)とは距離甚だ遠く交通亦不便であつた爲め、久しく相互の訪問を缺いて居たが、翌 11 年 7 月夏休前に君と中原貞七君(岩手縣の人にして予等と同じく宮城英語學校に學

び大學を卒業して文學士となり、曾て神田に共立學舎を起し子女の教育に従事し一時旺盛なりし)より書信が後故ありて之を閉ぢ、地方中學校長として多年教育界に貢献せられ今尚健全にして大阪にあり)あり。蒸汽船に乗り横濱から海路歸省する心算なるが、一所に歸へらぬかと誘ひ來つたので、是幸と同行を頼み新橋驛に待合せて 3 人連で汽車に乗つた。汽車の疾いのには全く驚くばかりで軌道に沿ふた電柱が汽車と反対の方向に飛ぶ様に動く激しい車體の動搖にするつかり心持を悪くした。横濱著と共に海岸の西村旅館に投じ晚餐の後舟を馳て汽船豊島丸に乗込んだ。途中舟が激浪に撲殺せられ本船に達する前に既に船暈を來し頻りに嘔氣を催した。本船に於ける下等の船室は船底の板敷で臭氣鼻を衝き不快であったので、甲板に出て指顧展望し雑談に耽つて居たが、常州鹿島洋に差かゝる頃海上漸く風波高くなり、船體が激しく動搖し、君も予も俱に高度の眩暈を起して數回嘔吐した。遂には腹中吐くべき何物も無く只黃色の苦汁のみを吐く様になつた。君は帶を以て帆柱に體を繫ぎ留め蹲踞して頭を垂れ、双手を後頭に當て顔面蒼白殆ど生色なく、呼べど答へず其苦悶の状よりも一層甚だしく誠に同情に堪へなかつた。翌朝寒澤に著船それより鹽釜に至り、更に人力車にて家に歸著した。此初航海の苦き經驗に懲り切つたる君と予とは他日志を得て上等船客として乗込むなら兎も角、海上の旅は終生再び試むべきものではないなどと弱音を吐くに至つた。當時君が甲板上帆柱に繫がれ苦悶困倒の状は今尙ほ髣髴として目に見える様である。目を閉ぢ沈黙して苦痛を忍ぶ敗け惜みの容體は全く君の本領を發揮して居たのである。

△ 赤 湯 溫 泉

明治 13 年の夏休には君と予と外に 2 人の同行者ありて赤湯の溫泉に健康保養旅行に出掛けた。同行の一人は春日肅君で(漢詩の大作家國分青崖翁及東京辯護士會長たりし飯田宏)、(作君と同じく司法省法律學校に學び卒業後法學士となり、檢事の職にあつた)他の 1 人は櫻田壽君(宮城英語學校卒業生にして)であつた。溫泉湯に於ては自炊し出来る限り滞在中の經費を節約することに申合せたが、其材料を携帶するは徒步旅行者には頗る困難苦痛である。故に米、味噌、醤油、鰆節、砂糖、茶等をば途中岩手山に於て晝飯休憩中に購入し、駄馬一匹を賃傭して之に搭載馬の前後を護り馬夫と雜談し種々珍談奇聞にまぎれ格別疲勞もなかつたが獨り君は脚氣の氣味ありて元氣較や振はなかつた。途中味噌の竹皮包が馬の背より滑り落て皮破れ、味噌四散し之を不潔なる馬夫の手を籍りて收拾した爲め、砂塵も少々混入したので溫泉場での味噌を用ひて搾へた汁は何となく氣味悪く不快であつたが我慢して喰盡して

仕舞つた。今から考へれば不衛生此上もない。道中慰安の料として岩手山に於て饅頭を1袋買求め此袋を4人交替に持ち、歩き乍ら袋より取出しては口に頬張り舌打をしたのだ。君は脚氣の氣味がある「饅頭は砂糖を含んで甘ひから脚氣によろしくない食はぬが良し」とて君が袋を持つことを禁ぜようとしたら「何餡は小豆で製し小豆は脚氣患者に必須の食料であるから饅頭を食したとて差支なし」とて負けずに袋より取出して食つた。

温泉場に於ても此理屈を主張して時々大福餅を買って食されたことがあつた。彼の袋の中の饅頭も漸次食い減らして殘餘の數個を馬夫に惠與せんとして春日君が大声で背後より「オイ遣ろふ」と馬夫を呼んだら、馬夫は後方を振り向きに「如何に馬方風情でも「野郎」と云はれては聞捨てならぬ」と眼を瞑らし腕を扼したので春日君呆氣にとられ、更に仙臺方言にて「ニサにクレベー」と云ひ直しやつと諒解を得たので互に大笑ひをしたことがあつた。此同行4人の中3人は今皆故人となり獨り予のみ生き残りて幽明所を異にして居るのは何となく心細く感ぜらるる。

△ 徒歩上京

明治14年の夏休に歸省した際は予は單獨で徒步旅行したが、八月下旬上京の際には君と共に滑稽な愉快な旅行をした。當時の感想は今でも時々思出しては獨り竊かに笑みに入ることがある。此上京の同行者は都合6人で君と予の外に中原貞七君(前出当事大學文學部學生)菅原傳君(當事大學豫備門生徒)石田文城君(石田武州君の令兄明治17年)及大立目重虎君(仙臺の辯護士大立目重成君の令息當年17歳にて逝去せり)の4君が一所であつた。出立前一日中原君が予の許を訪ふて歸京旅行の規約條件を提示し承認の上一行に加はる勇氣はないかと尋ねられた。其條件は甚だ單純で東京迄終始徒步で旅行をしよう、若し中途疲勞して車馬に乗る者があつたら落伍の罰として健脚の同行者に應分の御馳走をすると云ふのである。予は幼少より顏色蒼白軀體長瘦で友人からあだ名を葱(ねぎ)と呼ばれる程虛弱の質であると假定されて居つたので、結局予は此旅行の落伍者に豫選せられた様なものであつた。尤も此夏休中予は兩親の切なる勧誘に由り内密に妻を迎へた。それが爲め歸省中の學友と交遊する機會少く、兎角引込勝であつたから、君と中原君と申合せ予の此弱點に乗せんとした魂膽ではないかと邪推が出來ぬでもない。殊に妻は中原君と同縣人であつて其間の事情を中原君が詳かに承知して中島君や菅原君に之を傳へ、一つ須藤を困らせてやらう杯と面白半分に此旅行案を企て

たものである様にも推測された。愈出發の日君を初め中原君等は予の宅を訪ふて出發を促された。其旅装を見れば脚絆草鞋掛と云ふ實に堅固の旅装束で意氣已に斗牛を呑み、元氣横溢して居つたが菅原君と予のみは足駄ばき莫大小ヅポン下に裾を高くかゝげ、肩には2個の風呂敷包を振分け懸とし手に洋傘を杖とした富山の千金丹賣宜しくと云ふかつこうで、如何にも落伍を豫想せしむる風體であつた。道中は菅原君の放膽諧謔に一同抱腹絶倒しつゝ白河附近迄は各自元氣で競争上優劣を見なかつたが、唯石田、大立目の兩君のみは初登りであつて旅慣れない爲め、兎角行憎んで後れ勝であつた。大立目君は中原君が懇篤に保護し石田君をば中島君が親切にいたわつた。須賀川に宿泊した夜は一同皆連日の徒步で疲れ果て、就寝後按摩を招きて揉擦を命じた。然るに此按摩法師甚だ饒舌家で、手巧の短を口頭の浮世話で補ふと云ふ主義を執り嘔々雜談に耽つて居つたが、突然一聲「ヤー」と叫んだので何事が起つたかと一同驚異の耳を聾てた處、法師曰く「御一行中此御方ばかりは女子様で妙齡の嬢様かと思つて御擦りして居ましたに、話に浮かされ思はず或物に手が觸れ男子様であらせらるゝことを發見し、知らず識らず聲を立てました次第です、誠に相濟みません」と詫びたので一同腹を抱て大笑したと云ふ珍談があつた。尤も當時大立目君は17歳の纖麗なる美少年であつたのである。

白河宿より一つ手前の驛に達した頃は足駄履の菅原君と予は疲れて兎角後れ勝で動もすれば落伍者に成りそうなので、中島君と他の3人は炎天焼くが如き暑さに汗を拭き々々全速力を出して菅原君と予の足駄黨を跡に残して抜け駆けをした。後れた菅原君と予は他の4人が先方に於て偷かに人力車に乗る魂膽であるであらうから是非追付て見届けねばならぬ、規約條件を蹂躪無視されてたまるものかはと、勢込んで跡を追ふたが、何分にも暑さと疲れで足が進まない。2人相談の上路傍の居酒屋に飛込み、各自水呑コップ一杯の冷酒をあほり酒氣に乘じて早足で歩き始めた。此時の菅原君の風態が實に異様なもので頭髪は奇麗に剃り落して生々しき今道心、之に手拭にて捻り鉢巻を爲し片肌ねぎで隻手に傘を翳さし、高く裾をからげて俗謡を歌ひながら歩行をした。當時東京では萬吉の「ヘラヘラ」踊りなるものが盛に流行して居つた。白晝白河町の中程に於て傘を差上げ妙な身振りで高聲で呼はりつゝ「ヘラヘラ」踊りを演ぜられた時は、途上の人の注目を引くので予も實に閉口して暑中ながら冷汗背を霑した。此諧謔は一面には勇氣を鼓舞する爲め、又一面には或る意味から予を困らせる爲め、故さらに演ぜられたのである。予等2人は此處を少

し以前に車上4人連旅客が通過せなかつたかと行先々々に於て油断なく問合せつゝ偵察を遂げ、終に4人が予等2人を出抜て確かに車に乗りたることを探知した。然るに此夏の暑氣が如何にも酷烈で歩行が甚だ困難であり、又學校の始業前東京に於て充分休養する必要があるので途中徒步旅行を止め、阿久津より河舟に便乗し埼玉縣下境宿より夜船で江戸川を下り、翌朝行徳に於て朝飯を喫し東京の兩國橋畔に著船することに旅程を變更した。境宿より夜船に乘込む前旅宿に待合せ中菅原君と予と2人より中原、中島の兩君に契約履行を强硬に迫つた所が、石田、大立目の兩君が初登りで旅に慣れず足弱であるから此2人を保護指導する爲め不本意ながら據ろなく車に乗つたので決して疲勞した爲めではないと、遁辭を以て強辯したが結局契約履行と決し1樽の酒と數種の下物とを予等2人に提供して其専用に任せることになつた。予等2人は之を船中に携へ行き凱旋將軍でもあるかの様、意氣揚々として船中に坐を占め、獻酬に忙しかつた。抑も境の夜船たるや客室極めて狹隘で僅かに三疊許りの船底に15人乃至20人の船客を壽司詰めにして推込め無理に一夜を明かさせるのであるから、蒸熱惡臭耐へ難く、曲げ縮めたる足を夢中で張り伸ばし、他客の頭を蹴飛して喧嘩鬭争を惹き起すことが常である。此混雜の中にありて菅原君と予は樽中の酒を東京著前に片付始末しやうではないかと、手に酒盃を放たず痛飲放歌し菅原君は快極まつて踊出したり、船頭大に怒り「他の船客の迷惑になるから船を離れて河岸に上のべし」と威嚇せられ中島、中原兩君と予と3人にて船頭に謝罪し纔に事なきを得た。後年(大正10年)神田の中川牛肉店に五城義塾々友懇親會を開いた時中島君も予と共に其席に列し談偶々境夜船のこと及び、當時を回想して俱に大笑ひしたことがあつた。

△ 駒場來訪

君と春日肅、飯田宏作、及び多田鋼宏の4君より次の日曜日に駒場の予の官舎を遇訪する旨葉書で通知が來た。此4君は予より何れも年長者であるが未だ學生であつたので、日曜を利用して郊外散策がてら予が官舎に來遊する目的であつた。當時駒場は甚だ僻遠且不便で青山四丁目まで來なければ食事すべき店もなかつたのである。予も當時妻が病氣で郷里より呼迎へることが出來ないので50歳許りの老婆を雇ひ獨身生活を送つて居つた。僻遠の地であるから何か手料理を以て此珍客を饗應すべきであるが、何分にも老婆の手工では珍味も調理するに難かしい。鶏肉でも多

量に御馳走した方が却つて魚肉より客の嗜好に適するだらうと考へ、肥大なる家禽を一羽買求め羽毛を剥ぎ除て厨房に吊して來客を待つて居たが、生増其日急用出來して外出し意外に手間取つた、歸宅が後れ來客を空しく待せては誠に相濟まぬと非常に憂慮しながら急で歸つて見ると來客君はチャンと5人分の膳立をして酒を爛し鳥肉を加減良く料理して置て、いざこれから一杯飲もうと云ふ所であつた。此料理を擔當したのは春日君である。

君は炊事に長じて居つた人で往年仙北赤湯温泉滯在中にも炊事は主として此人に由て執行され、予等は其助手として却つて妨碍になつたままで過ぎなかつた。如何に遠來の客とは云ひながら主人の不在中無遠慮に上り込み、厨房に闖入して、吊し置いた鳥を下ろして割き始め、勝手に此所彼所を開けて酒樽を取り出し膳碗を出せの皿鉢を出せのと傍若無人に立振舞ふので留守居の老婆は其横暴さに呆れて腰を抜さん許りに驚き居つたとて、春日君始め皆大笑して居た。兎角主婦なき獨身生活は斯くの如く梁山泊流に陥り易き故、早く國元の妻君を呼び取り給ひ杯と皆に揶揄せられ恐縮したが、此來訪は予に取り非常に愉快で當時の光景は今尚歴然と脳裏に刻まれて忘れることが出来ぬ。此4君今や皆故人となり予獨り生存し何となく悲哀を感じざるを得ない。

其後神田一橋側の大學生に時々君を訪ね神田神保町の地久庵其他に於て食事を共にし歡談したが、明治16年秋君は大學を卒業し神田に下宿を取りたる旨通知あり、或日其下宿を尋ねた處木匡君と同宿して居られ非常に馳走を饗けて歸つたが、専門の違ひと住居の極端に懸け離れて居た爲め、偶々學會若しくは同郷人の集會に於て邂逅する位で其後は久しく相互の交通が疎隔してしまつた。

△ 海外留學

君は明治19年自費海外留學を志し、大學に暇を乞ひ6月渡米せられた。其送別會は6月某日麹町區富士見軒に於て同郷人の有志に由り開かれた。其前日自費留學告別の通知に接した時には、就職後日尚淺く自費を以て海外留學を爲し得る程の私財もなきに、如何にして此壯圖を企てたものかと其果斷決行の勇氣に一驚を吃せしめられた。留學の目的と方便とを尋ねたるに「ウォーターワーク」即ち我が國に必要な水道敷設事業を研究する心算である。又學資は勿論自辨の資力がないから出稼人同様彼地に渡り働きつゝ勉強する覺悟である。夫には常に大學在學中師事した「ワ

ツデル」博士が、彼の地に在りて助手に使つて呉れ月々 50 弗位の報酬を給與すると云ふ約束であるから學資には差支へないと云ふことであつた。送別會の座長即ち主人役は同郷人の長老富田鐵之助翁であつた。翁は維新前後に於ける我が仙臺藩の先輩で夙に洋學に志し、幕府の奇傑勝海舟先生の令息勝小六君の傳として會津藩の高木三郎氏と共に米國へ留學し、維新後領事、公使、大藏書記官等を歴任して後日本銀行總裁に任せられた人である。翁は君の此行を非常に賛成し其勇敢なる行爲を口を極めて賞賛して居られた。翁は宴半にして除ろに立ち送別の辭を述べ海上約 20 有餘日間四顧茫々一の島影だに見えぬ大海原の光景は、實に心細く寂寥を感じるから、之に届詫せぬ様又健康を害せぬ様深く注意すべしと、往年翁が渡米當時を回想して頗る感概深きものゝ如くであつた。後年君が學成り歸朝せられたる時に此送別會主人役なる翁が恰も東京府知事であり、又水道敷設委員長であつて君をしてその蘊蓄を傾け、其能力を充分に發揮せしめ東京市水道敷設なる此記念すべき大事業を遂行せしめたと云ふことは、實に深き縁縁自然の約束事であるかの様に思はるゝのである。當日後藤子爵も參會せられた。當時子爵は奏任官三等内務省技師で、衛生局に勤め上水道の敷設も必要だが満都の汚物を海中に排泄する下水道の設備も亦衛生上極めて必要である。東京市内の便所より上の總肥料代を見積るに年に 35 萬圓位の巨額に達し、今之を全部海中に打捨てると云ふことは附近の農業と都市經濟にも影響すること甚大であるから考物である杯と論ぜられた。最後に商業學校（商科大學の前身）の教師鈴木熊太郎君が起つて英語演説をされたが、其意は祝賀激勵の辭であつた様に記憶して居る。

予は他の諸君と共に杯を擧げ君の前途を祝福する爲め唱和乾杯した。要するに此送別會は君に取り眞情發露の光榮ある記念すべき嘉會であつた。

△ 學位受領

君の博士號受領は明治 32 年で同時に仙臺人で學位を受けた者は大槻文彦翁（文學博士）と予の 2 人であつた。當時博士と云へば世にも珍らしきものゝ様に持て囃され、或時は同郷の先輩に或時は同郷の在京學生により祝賀會を催され招待せられた。ところが君と予も演説が頗る不得手の方で祝賀會の挨拶を述ぶることを甚だ苦痛に感じた。幸に大槻文彦翁が年長者であり文學博士であつて辭令に富んで居るから答辭挨拶等一切を翁に一任し、兩人は沈黙陪宴して専ら御馳走を食ふことを竊かに相談

した。果して豫期の如く翁は毎會一同を代表して叮嚀に立派な挨拶の辭を述べられたが、此事を豫め翁に交渉しなかつて後に翁が「君等も何とか挨拶したら好いだらう僕にのみ挨拶させるのは甚だ遺憾である。」と稍々不満の意を洩らされたので兩人大いに恐縮し、是が所謂驥尾に附して伴食するものであると互に笑つたことがある。

△ 大學參觀

明治 36 年頃と記憶する。君は駒場農科大學を參觀に來られたので、予は残る隈なく案内して説明した。恰度研究の爲め鎖錠して置いた狂犬が獰猛なる相貌を呈し檻内に荒れ狂ふ有様を見て是が狂犬と云ふものが實に恐ろしいものであると、驚異の眼を以て凝視して居られた。其後間もなく予も工科大學を參觀し君の専門に関する種々の説明を受けて大いに啓發する處があつた。

△ 嶋 翁 幹 旋

君は歸朝後帝國大學教授兼東京府技師の榮職に就いた。當時富田鐵之助翁其他在京の仙臺人等發起して、同郷秀才の學資補助を目的とする仙臺造土義會を起した。君は卒先して多額の寄附をなせしのみならず、又帝國大學學生の同郷有志が五城義塾なる寄宿舎を設けた際にも君は良く世話をされた。其設立の趣旨は同郷人の親睦を保全し成るべく學資の節約を計り、風教を維持し、相援け相勵み合ふことであつた。予も此相談に預り之等の件に關し時々打寄り談合を遂げたのである。在學中此塾で育まれた人々は今何れも皆社會に権要の位置を占め知名の士となつて居る。此塾が閉鎖した後も塾友諸君は懇親其他送別歡迎或は祝賀の意味を以て必ず年 1,2 回晚餐會を催し、胸襟を開き眞情を吐露して懷舊談に耽るのが例である。君は其都度臨席し愉快に飲食を共にし予も其驥尾に附して陪宴し大盃を傾け放談するのを樂として居つた。大正 13 年の歲末に塾友松岡開君の送別會に出席したのを最後とし、15 年 2 月塾友金子魁一君賀が醫學博士の稱號を得た際、祝賀會を開いた時にはもう故人となつて仕舞つた。大抵同席した君の温容に最早接することが出來なくなり何となく孤獨の寂寥を感じ感慨無量であつた。君は同郷の在京學生の爲めに直接間接に善く世話をされた。前記五城塾の閉鎖と同時に五城寮が設立せられた時にも應分の寄附をし、五城寮が仙臺造土義會及び養賢義會と合同して仙臺育英會なる財團法人となつた時にも直に基金を寄附して常議員となり、同會出身の卒業生の就職其他

に就て懇切に配慮斡旋せられたのである。

君の逝去は同會に取り大なる損失であらう。君は言行一致の篤實家で然諾を重んずる人格者であつた。又君は深く骨肉を愛し故舊に厚く後進を憐まれた人であつた。予は親戚並に知人の身の上に就き君の斡旋を煩したこと一再でなく、何時も甘諾し出来る限りの世話をせられた。痛く感激する所以である。或時君の親戚の一身上に關して態々予が弊屋を訪はれ、辭を低ふし禮を厚ふして懇懃に予に斡旋を求められた時は却つて甚だ恐縮し、骨肉を愛するの厚きに深く感動せしめられた。其後進を扶掖し適材を適所に就かしめたる例に至りては枚舉に遑なく、工學界の大權威として到處に愛敬せられたるを見れば推知するに充分である。

△ 寡 默 謹 嚴

君は席上に於ては寡言穢默の方で絶て饒舌を弄することなく、端然正坐人に接するに口邊微笑を湛へ、蔚々たる溫容の中に眼光炯々冒すべからざる威嚴を持つて居られた。往年舊藩公薨去の際君と予は舊藩士の子弟として一夜靈柩を護り通夜宿直の奉仕をしたるに、予は君と反対に絶えず饒舌を弄して懷舊談に耽つた、鶴鳴曉を告ぐる頃に至り君は予に言ふて曰く「舊君の尊靈に對し誠に相濟まざる不調法なれ共君の御蔭にて眠氣を抑へ首尾能く御通夜の任を盡し得たり。深く好意を謝す」と翌朝盥漱齊戒柩前に俯伏敬拜して退邸せられた謹嚴の状居合はす人をして思はず畏敬せしめた。

△ 諧 謔 椰 摂

君は寡言沈黙の人であつたが時々奇警の言を以て友人を揶揄する性癖を有して居られた。前にも述べた如く君の幼少時代は仲々腕白で御山の大將我獨的の振舞をなし稀有の頑童として怖れられて居つたが、其本能が後に及んで諧謔的揶揄として發揮せられたものと解釋すべきである。岩手縣の人で宮城英語學同級の學友多田綱宏君は同校卒業後君と同時に大學豫備門の2級に入學し、大學に於ては地質學を修め卒業後理學士として岩手、新潟、岩城、平等の中學校長を勤め今は故人となつたが、此多田君は君と同級であつたが君よりも年長者で學績も稍々良く、自ら先輩を以て任じて居つた。然るに不幸にして大學在學中落第して進級出來ず君よりも1年卒業が後れた。君が卒業して大學に講師として留まりたる時には多田君は未だ學生

であつたので、君が動もすれば多田君の如き學生たるもののが云々と揶揄されるので多田君赧然として大に閉口して居つた。予も時々君の揶揄を受けたことがある。或時予に向つて曰く「君は博士には相違ないが獸醫博士なんて甚だ感服しない。夫れでも君の専間に面白い事があるかネ」と無遠慮に真向から揶揄された。

大抵予は笑つて相手にならなかつたが或時復た同様の揶揄を繰返されたから此時には予も黙して居らず反駁を試みた。「君は工學博士で水道が専門であるが、成程水は空氣と共に人間に瞬時も又1日も缺ぐ可らざる必須の物質であるが、人間は水許り飲んで居つたつて生きて行かれるものでない。世の文化が進むに従ひ衣食住が複雑になり、帽子洋服靴等頭の頂より足の尖に至る迄人體を被包する品物は皆動物即ち家畜の生産物で、其乳肉は公衆の衛生保健上必須の物であると云ふことが漸次世間の認むる所となり、殊に牛馬羊豚禽は軍事上兵器に次ぐ所の必需物であることを考ふる時は、未來の日本に於ては予輩獸醫學者の大手腕を要する時代が到來するに相違ない。予は此遠大なる希望を以て此専間に從事して居るのである。専門家と其學術との關係は恰も夫婦の配偶關係の如きものであつて、彼様な男子を何故夫として愛敬して居るか、又此様な女子を何故妻として愛憐して居るか否と傍評することが世間によくある例だが夫婦間相愛の眞因實相等の如きは到底側より窺ひ知ることの出来ぬもので、専門の學術もそれと同様に一旦其道に踏込んで見ると其妙味又面白味は忘れ難く、夫婦で言へば世間男子多けれ共男は私の夫に限り、世間女子多けれ共女は私の妻に限りますと云ふ様な執著の念を生ずるものである」と喋々論じ立てたところが君は呵々大笑され「眞に同感々々實は僕も洋食も牛鍋も大嗜好の方で家庭に於ては絶えず牛乳を用ひて居るが、どうか健全なる良乳を手に入るゝ様心配を頼む。聞く所に據れば宮内省御料の牛乳は乳牛の衛生狀態も乳汁の取扱方法も完全で世間類なき良乳であるそうだが、其御餘りを手に入るゝ様心配して呉れまいか」と懇々依頼されたので其筋に交渉して配達方を頼んだが、何分場所が不便で遂に君の希望に副ふことが出来なかつたのは甚だ遺憾であつた。

△ 趣 味 嗜 好

君は遊技音曲には趣味を以て居られなかつた様に思われるゝ。又曾て一同も寄席、劇場、圍碁、謡曲、書畫、骨董等の談をされたことがなかつた。予の記憶する處で甘ひ物を涉獵してあるく食道樂位が唯一の嗜好であつたかと推測される。殊に洋

食、牛鍋、及び天麩羅を尤も嗜好し時々牛丼店に邂逅しては飲食を俱にしたことがあつた。晩年に至り牛肉よりも天麩羅の方を嗜まれ屢々銀座の天金に會合し君は善く食し、予は善く飲み交歎するのが相互の娛樂であつた。予が獨り天麩羅屋に登り一杯沈吟して居る時遠方より「オーケー」と聲を掛ける者があるので首を擧げて凝視すると、君が起立して予を呼んで居ること等もあつた。

△ 君の晩年

君が晩年大學を辭して多少閑散になつた時東京府下澁谷町水道敷設の顧問を嘱託せられ、時々其事務所に出勤して居られた。予は駒場に通勤の途中省線電車内に於て邂逅し代々木澁谷間の短時間で夢中になつて談して行くので、澁谷停車場を乗越したことなどあつた。其時君の云ふには澁谷に水道を敷設することになつたので此邊の地價が非常に昂騰したが、君は駒場に學び駒場に勤め此邊と深き縁があるから屹度地所を買求めて置いたらうと聞かれたが曾て唯の一坪も求めたことなし、と答へたら夫れは餘り單純であり又殘念であると云はれた。君は品行方正で酒は少々飲まれたが量を過す様なことなく規則正しき生活を送られ、健康佳良の方であつたが曾て重症の腎臓病に罹り大手術を受けてやつと恢復され、爾來血氣も元氣も昔目の様に潤澤旺盛でなかつた様に見受けられ、日常深く健康に注意して居られた。元來君は健啖家で洋食、牛鍋、天麩羅の如き濃厚なる滋味を好んで食されたので、腎臓の負擔を重くした爲めに其疾病を釀したのであらう。

△ 極樂往生

成功遂名は人生の最大幸福であるが實に君は此幸福を受けた人である。又人生最後の希望は往生際の安樂と云ふことである。而して君は冥々の中に此希望を達成された人であると謂はねばならぬ。實に君の終焉は極樂往生であつた。病蓐に在ること僅か 24 時間に過ぎず、其間些の苦痛もなく静かに安らげく永眠に就かれた。君が瞑せられた時には親類其他恩顧を受けた人々が駆付けて居たが知己友人として最初に君の遺容を拜した人は古市公威男爵で其次は予であつた。圓滿なる溫容毫も生前と變りなく尚活けるが如く感ぜられた。佛家の所謂慈悲善根の應報とや謂ふべきものか。

ワツデル博士書簡譯文

紐育市プロードウェー 150番

ジエー、エー、ワツデル

大日本東京市麹町區丸ノ内仲通 14 號の 4

樺島正義殿

親愛なる樺島君、2月 15 日附の御手紙に對し御返事が遅れましたことを御容下さい、御手紙が著いてから、大方 10 日餘りも私の机上に其儘になって居ました。之と云ふのも、私が感冒の氣味で臥せつて居つたのと、事務所の仕事が非常に忙しかつた爲めです、私は此返事が餘り遅れずに貴方に到達せんことを希望致します。我々の敬愛すべき故中島博士の逸話を書いて呉れると云ふ君の請ひに應ずることは欣快とする所です。

夫れは屢々折に振れ話した物語です。君も御承知でせうが、私が 1886 年に日本を立つてから直ぐ、中島博士は實地の経験を得ん爲めに、私の迹を追ふて米國なる私の事務所や他の工務所で働くと、此國に渡つて來ました。中島君は 3 年の賜暇を得て、其 2 年を米國、残り 1 年を歐洲で費しました。同君は私の事務所で働いたのが抑も留學の發端でありまして、常に私が云付けた事を正しく實行されるやうな甚だ堪能なる人であります。併し一向創意的には行動されないと私は気が付きましたので、或る日私の室に中島君を呼びまして、「中島さん、今我々のして居ることは感服できんと思ふ、こゝで私は朝早くから夕遅くまで働いて居るが始終よくよ氣を揉んで居る、所が君は能く働いて居るが少しもくよくよしない誰れでも或る氣苦勞が無くては眞の技師になるのは難かしい。私の聞いて居ますのに、君に厄介を掛けるやうな仕事があるさうですが、私は其を君にして貰いたいのです。私の友人の「ワインキーブ・キャステッド」氏は「オマハ」市から程遠からぬ「ネブラスカ」州で小さな水道工事の技師をして居ますが、貯水池となるべき大きな煉瓦造の井戸を築造するのに、監督が要るさうです、君一つ其仕事をやつて呉れ給へ」と云ひましたら、中島君は大さう乘氣で應諾して呉れまして 2,3 日の中に「ネブラスカ」州に行きました、中島君がそこに著くと間もなく、私は斯う云ふ風な手紙を同君から受取ました、『どうぞ貴下、私は「カンサス」市に歸り度いのです、私はもう少しも此處に居たくありません』

此邊の人は私を呼んで「えい此外道のチャン，チャン野郎」と云ひます，夫は非常に不愉快で堪りません』私は答ました、「私は其人達が君をそう呼んで大そう君を悩まして居ることを喜んで居ります，これが丁度君が得やうとして居る経験の一つです，君は其處に踏留まつてよく御やりなさい」中島君は私の言葉を聽き入れて甚だ信頼すべき仕事を完成しました。

私の考では 其小さい経験が單純な理論家から實際的技師に中島君を變へたとでも申しませう。敬具

「ジエーエー，ワッデル」(自署)

150 Broadway

April 15, 1926.

M. Kabashima, Esq.,

New York

4 Marunouchi Central,
Tokio, Japan.

Dear Mr. Kabashima:

Please pardon delay in replying to your favor of the 15th of February. It has been lying on my desk for some ten days or more. The reason for the delay is that I have been laid up with the flu and have been exceedingly pressed with work in the office. I hope that this reply will not reach you too late.

I take pleasure in complying with your request to furnish you with an anecdote about our dear friend, Dr. Nakajima. It is a story that I have told on a number of occasions. You will remember that soon after I left Japan in '86 Dr. Nakajima followed me over to work in my office and in other engineering offices in the U. S. A., so as to obtain practical experience. He had leave of absence for three years, two of which he spent in the United States and one in Europe. He started in my office and proved himself to be a very capable man, doing always exactly what I told him; but I noticed he was not developing any initiative. One day I called him into my room and said, "Nakajima, this is not a square deal that we are having. Here I am working early and late and worrying all the time. You are working all right, but you have no worry and no man can become a real engineer unless he does some worrying. I have heard of a job that will give you some trouble to hold down, and I want you to take it. My friend, Mr. Wynkoop Kiersted, is engineer for a small system of waterworks in Nebraska not far from Omaha, and he needs a superintendent to put down a large brick well which is to serve as a reservoir, and I want you

to take the job." Nakajima very readily complied and in a few days he went to Nebraska. Soon after his arrival there I received a letter from him which read about thus: "Please, sir, I want to get back to Kansas City. I don't like it up here at all. They call me a 'dam heathen Chinee' and it is very disagreeable." I replied, "I am very glad that they are calling you a 'dam heathen Chinee' and giving you lots of worry. This is the kind of experience I want you to get. Stay where you are and make good." He did so and performed a very creditable piece of work. In my opinion that little experience changed Nakajima from a mere theorist to a practical engineer.

With kindest regards and best wishes, I am

Yours very sincerely,

J. A. L. WADDELL.

JALW-KEP

同窓の博士を懐ぶ

近藤仙太郎博士

大正 15 年 3 月 3 日，中島博士記念事業たる日本水道史編纂主事三瓶泰造氏來宅せられ，昨年來從事の水道史編纂事業は將に終局に近づき目下同史中に掲載すべき博士の傳記を編纂中なるを以て，同期生の殘者たる余に博士に關する感想を書くべく依頼せられ，所感の一端を述ぶる機會を與へられたることは，余の欣幸とする所なり。

中島博士は明治 16 年 7 月東京大學法理文三學部に於て，土木學科を首席にて卒業せられ，直ちに同大學助教授として主任教授「ワッデル」先生を補佐せられしのみならず，同先生の著書たる普通公道鐵橋計畫書の編纂に際し，大いに助力されたることは同書の序文に明かなる處なり。

博士は其後 3,4 年にして米國に留學し，次で歐洲に渡り，上水下水に關する工學を專攻し，明治 23 年歸朝し直に東京市の水道事業を擔任し，同時に帝國大學教授に任せられ我帝都たる東京市の上水工事を完成せるのみならず，其擴張工事及び下水事業の計畫及び之が實施を主宰せられ，且全國各地の水道事業にして博士の手を煩はさざるもの殆ど尠き程，斯業の爲めに盡瘁せられたり。

抑々上水下水の事業は一國文化の要素にして，今や都市の衛生上必要缺くべからざる事業たり，此後に於ても益々發展すべきや論なく早くも之に著眼し其權威とな

られしは先見の明あるものと言はざるべからず、而して博士は多くの事業を成し、多くの子弟を薫育し、尙後進を教導し愛撫扶掖至らざるなし、從て自ら産をなし高齢 68 に達せり、是れ福祿壽の三つを得たりと言ふべし。

博士は身心剛健爽直にして、至極勉強家なりき、即ち夕食後約 1 時間の睡眠を爲したる後、再び執務に從事し、深更に及ぶを常習とせり。博士は又健啖家にして、嗜好は支那料理の如き脂肪多きものにありて胃腸の盛強を表せり。

昨年 2 月 15 日熱海「ホテル」より廣田理太郎氏と連名自署を以て余に送られたる葉書は余に對する絶筆となれり。

博士を始めて知れるは明治 12 年にして、其間 40 有 7 年に亘り、會へば必ず「ドーダ」の語を以て迎へらる、博士逝きてより日を経ること既に 2 年餘、追慕の情轉切なり、今や博士の偉大なる功績を永久に物語る水道史編纂の終局を悦び一層敬慕の誠意を表す、冀くは享けよ。

中島先生を憶ふ

中山秀三郎博士

中島先生の擔任されました衛生工學が東京帝國大學の一課目となりましたのは、明治 20 年に「ダブリュー, ケー, パルトン」講師が來朝の時から始まつたので、其頃は土木工學と謂ふ課目で鐵道も道路も河川も運河も港灣も授けられて居たのでありました。即ち古市先生は河川、運河、港灣を白石先生は鐵道、橋梁を受持たれました。又其頃新式の水道は我邦に於て如何なる有様であつたかと考へ見ますれば横濱の水道は竣工し長崎は工事中東京は計畫中であります。先生が海外から歸朝されました時は大學の方には「パルトン」講師が居りましたので、先生は東京市の水道の方に全力を注がれました。明治 29 年に「パルトン」講師が大學を退かれたので、先生は教授として大學に來られ、大學の講義を擔任されると共に、東京市の水道の完成に力を盡されたのであります。私は其當時大學に助教授をして居りましたから、其時以來親しく先生の知己を得たのであります。間もなく私は海外に留學を命ぜられました故、出發に際し先生の御宅に伺ひました處、彼地の事を懇切に御話し下され且巴里の「ポンシェン」技師に紹介狀を下されました。同技師は先生が大學教授となり且帝都の水道工事を擔任さることを聞き大に喜ばれ、從つて私迄非常に克く世話をせられました。佛國留學中多大なる便宜を得ましたのは全く先生の御人格が「ポン

シェン」氏を感動せしめたる賜でありました。私が歸朝後より先生御逝去の時迄此如く恰も長兄が末弟を導く如く終始懇切に世話をして戴きました。之は私一人のではありません。先生の御性質で一旦引受られましたからには終り迄克く世話をなさるのでありました。私が遞信省に於て水力調査に關係した時に先生より知己の方を紹介下さつた時にも此懇切なる御性質が窺はれました。此御性質は獨り人事關係のみではなく事業上にも學問上は申すに及ばず同様であります。大學教授と東京市技師長とを兼ね頗る多忙を極められたる時に於ても專攻の衛生工學の事項ならば百方縁合せ實地に就き視察研究を遂げられました。然し專攻以外の事項にも卓越せる見識を有し乍ら笑つて僕の専門の事でないと謙遜され決して御引受にならなかつたのであります。此如く先生は徹頭徹尾衛生工學に終始され學問の爲め事業の爲め且又之を施工する技術者の推選に至る迄力を盡されたのであります。茲に此御性質に反し先生を煩したことがあります。夫は河海工學の講義は河川、運河、港灣、灌漑、排水、水力等にて範圍頗る廣く一講座では纏り兼ね合併授業を行つたが不便多い故分割のことを上申しました。然し實現容易でなかつた爲めに土木教室の相談の結果灌漑、排水、水力を先生に受持を願ふことになりました。先生は大學の爲めに忍んで之を御承諾になつたのであります。御性質上此事は如何に御迷惑でありましたか今も猶先生に對し申譯ないことゝ思出の種として恐縮して居る次第であります。

思出を辿りて

木村匡君

中島博士の幼き頃僕の亡き兄木村敏が、仙臺市北六番丁（後東二番丁に移る）に住んで漢學の塾を開いて居た、博士も其弟子の一人で句讀を習ふ爲め時々通れたが此時代から沈著寡默の勉強家であつた。其後仙臺に出來た官立英語學校（縣立中學校の前身）に學れたが、何時も教科書の暗誦に夢中で獨語しながら通學するので可なり評判が立つた。博士の令兄は警察官吏を勤めながら令弟に通學の資を貢がれた様に記憶する、從つて博士の學資も餘り豊裕ではなかつた筈だが非常な恭儉な心掛のよい人で懷中には何時でも 1 圓なり 2 圓なりは必ず用意して居られた。後年博士の令兄に酬ゆる處頗る多かりしと聞くは、寧ろ當然の事である。博士は友情に極めて厚い人であつた。學友櫻田壽、佐藤約氏等死亡の節の如きは、非常に世話を焼いて呉れたと云ふことである。博士が業を卒へて大學の助教授となり月俸 40 圓を受くるや僕は美士代町の三河屋で西洋料理を饗せられた事を記憶して居る、之は僕

が定食を食つた始であつた。又其當時と思ふ、僕は博士から縞の夏羽織を貰つた、今から 23 年前博士が京都に来て僕の寓居^を訪れた時、一夕の歓談を交へ乍ら、其羽織を出して御互に舊を偲んだことがあつた、其後も時々逢ふたがゆつくり話し合つたのは此時が最後なのである。

追憶

茂庭忠次郎博士

私は中島先生とは同郷の好みもあり、門下生中では最もお世話を受けた一人である。私の始めて先生を知つたのは、明治 34 年 9 月、上京して東京帝國大學に入學した後のこと、生來不精な私は先輩の門を潜らうともしなかつたし、實際其當時の先生は餘り同郷の後輩などを世話しないと言ふ評判が専らだつた爲め、好んで近くに付く氣にもならなかつたのである、從つて學生の折は唯教室で一般並に御示教を得たのと、當時同郷の先輩に依つて創立された五城義塾の厄介になり、他の塾友と共に自炊生活をやつて居た關係上、塾の會などでたまさか御目に懸ると隨分突飛な質問などを申し上げて先生を困らせた（此事は克く覚えて居られて最近迄時々口にせられた）こと位を記憶するに過ぎない程で、深い御親しみは未だなかつたのである。

明治 37 年 7 月には愈卒業と言ふ段取りとなつたが、時恰も日露戰爭の最中で土木の卒業生などは甚だ賣れ口がよくない。7 月 10 日の卒業式も旬日に迫つたが、就職先は更に見付からない。無理算段して漸く通學し得た貧乏書生に取つて此位心細いことはなかつたのである。忘れもしない確か 7 月 6 日の朝と思ふ。西片町の中島だが話したいことがある故直ぐ来て呉れとの電話が掛つた、先生御自身の聲である。何事かと早速伺ふと就職先が決つたかとの仰せ、鐵道の方を聞合せて居りますが當にならんので困つております、と申し上げると暫く考へて居られた先生は、イキナリ履歴書を持つて居るかとの御尋ね、唯今持參して居りませんが直ぐ書いて差出します、適當な御心當りでもと伺ふと、否や何もないが兎も角今日の夕刻までに履歴書を持つて来る様に、との御話し故、折角呼び付け乍ら何もないとは可笑しなことゝ變に思つたが、其晩履歴書を御届した。然し生意氣にも實は餘り當にはして居なかつたのである。

7 月 10 日の卒業式は、明治天皇の行幸の下に目出度く済んだ、其日は「クラス」會等の爲め夜遅く下宿に歸つたが、此日東京市區改正委員會から明日午前中に私に出頭する様電話があつた由を聞いた。當時の私は（今もだが）非常な野暮で、

東京市區改正委員會の存在を知らなかつた、多分東京市役所の間違ひだらう、東京市の技師長は中島博士である、先達の履歴書が物になるのだろうと、早合點して翌日早々東京市役所に先生を御訪ねしたが未だ御出勤がない爲め、一面識ある西尾虎太郎氏を訪ね事情を聞き合せた處、氏は單に新工學士の採用を要求して居るがとのみで詳しくは何事も知らない様子であつた、西尾氏は當時市區改正委員會の屬託技師で中島博士の下東京市下水道を計畫して居られた人である。其内先生が出勤せられたので伺ふと夫れは此處ではない内務省の市區改正委員會である萬事は話してある故、中山幹事に會へば直ぐ分ると内務省内の室の位置迄叮嚀に教へられたのであつた。斯くして即日辭令を頂戴し 1 日も遊ばずに卒業の翌日から「サラリーマン」となり西尾氏の配下として下水計畫に從事することゝなつたのである。

須藤博士の御話しの通り先生は克く後進を指導し、且つ斡旋せられた。唯先生は極めて言行一致主義の御方で思ふ通り其儘世辭も飾りもなく、常に直言せられた、御氣象を知らない者から甚だ冷淡に見える場合も多かつた事と思はれる。假令郷黨緣故の者でも假借はなかつた様である、後輩を世話せぬなどの評判も恐らく之等の誤傳と思ふ。當時私共は先生に履歴書を提出すればもう大丈夫と評した程である。蓋し先生は的がなければ決して履歴書を受領せられないが、受けられた以上は必ず斡旋せられたからである。明治 36, 7, 8 年は日露戰爭の最中で卒業生の就職難も其極に達した。當時東京市の技師長を兼ねて居られた先生は一方ならぬ斡旋で、野口廣衛、大谷重次、米元晋一、山田博愛、村島謹一郎、黒須七郎、西大條覺の諸君が東京市に就職したのは其御蔭である。事業の一段落を告げた場合の如き部下の轉勤等に對する御配慮は一通りでなく、其爲めには往々御自分の用件を犠牲として各方面に御百韙を踏むことなどは珍しくなかつた、部下の先生を徳とし安心して懸命に働いたのも此御親切が確かに一因をなしたと考へる。

先生は非常な自信を以て萬事に處された、事に當つて動ぜられず弱音などは絶えて聞いた事がない、氣の弱い私は克く先生から叱られたものである、私の初めて就職した年即ち 37 年 12 月に主任西尾氏は卒然大病に罹られ職を辭された、私は最も敬服せし溫厚にして勤勉なる此先輩を俄かに失つて茫然自失した。1 日先生は私を呼び寄せ西尾氏の後任を物色したが適任者が容易に見当らない、一層君がやつてはどうかと話された、私は何等の経験も持たない若輩の故を以て御断り申した處御機嫌頗る斜めでそんなに意氣地がなくてどうする奮發して見よとの御言葉で、遂に

懸命になり兎に角も東京市下水道の基本計畫を主宰して完成した。調査費僅か3萬圓 3箇年足らずの事業としては決して尋常の仕事でなかつた、此爲め最終の1年間は殆ど日曜祭日を全廢し夜も大抵8時過に歸つた、今から考へると全て夢の様だが、此時代位愉快に仕事をしたことは少ない其後大抵の仕事を平氣で處理し得る様になつたのは全く此奮勵の賜だと信ずる次第である。

名古屋時代にも克く叱られた、或日工事上の事で技師長上田敏郎氏と意見合はず、上京して顧問であつた先生に事情を訴へ辭職を申出でた處お前は名古屋市の奉公人ではないか、職務上相當の責任があるべき筈である出世の爲めには苦勞せねばならぬ、そんな事位で辭職するとは意氣地がなさ過ぎる早速歸つて「ベスト」を盡して働け、と叱り飛ばされて歸つたこともある、兎に角満10箇年も名古屋に辛棒して幸に大過なく其上下水道工事を完成するを得しは、畢竟此時の御教訓が齋した結果だと思ふ。

先生は非常に廉潔な御方であつた、常に嘗て東京市に起つた鐵管疑獄事件當時の事を例に引き我々を戒しめられた、事件の當時先生は東京市水道の工事長として最も重職に居られた、然るに少しも此疑獄に關係がなかつた是當時の東京市長松田秀雄氏の信任を博せし所以で他日大に名を成すに至られたのも此時に崩した世間の信用の結果だと思ふ。

廉潔なる先生は不正を忌むことも一通りでなかつた、嘗て東京市の某技師が或事件に觸れて辭職した事がある、慣例に依つて記念品を贈與す可く基金を廳中に募集する事となり米元晋一君だつたかと思ふ、世話役として先生に據金を求めた先生大喝あんな奴に記念品など贈る必要はないと遂に一金も出されなかつた様に聞く、之等の企てには何時も多大の贅意を表された先生には蓋し異例である。

先生は工事設計等には毫も假借することなく非常に綿密に監査せられた、経験に乏しかつた私は克く御小言を頂戴したものである、殊更御機嫌の悪い時などに出喰はすと雷が恐ろしかつた、遂には卑怯にも先生の顔色を窺ふことを覺え成る丈け叱られぬ工夫をしたものである、昨年の暮かと思ふ何かの序に此事を小野基樹君に話した處、何時の間にか先生の御耳に入つたと見え此正月開かれた五城義塾の集会の席上で茂庭はおれの様な好々爺をつかまいて雷だなどゝひどい虚言を言ひふらして困る、近頃は君にこそ雷の評判だがと大いに笑はれた。

大正8年7月私は論文を提出して學位を得た此時など先生の御親切は身に餘る

程で其御欣びも非常であつた。

私は永く田舎廻りをして居た爲めに、屢々洋行の機會を逸した。先生は非常に之を氣の毒に思つて居られた様である。其後内務技師に任せられた私は、遂に目的を達し大正12年2月萬國道路會議に參列の爲め満1箇年間歐米に出張することとなつた、先生は一方ならぬ御欣びで莫大の餞別と舊師「ツッデル」博士に宛てた紹介狀を賜つた、之は餘分の話であるが容易くM. Am. So. C. E. となり米國各地の上下水道工事を充分に視察し得たのは其御蔭であつた。出發の際など品川驛迄見送られ、更に前後して長崎に往かれし先生は特に馬關に滯在して著船を待ち合せ、再び町重なる送別と懇篤なる教訓とを與へられた、昨年2月歸朝の際も態々横濱迄出迎ひて無事を祝された。私は御土産として西班牙から持參した美麗な「モザイク」の机を贈呈した、無論つまらぬ品ではあるが日本では珍らしいものだからである。持參の苦心談を申上げると御自身の洋行當時を懷舊の餘り、非常に御欣びで應接室に据え置かるゝ事となつた光榮の極である。

私は先生を最も敬慕す可き典型的技術者だと思ふ、酒も煙草も嗜まれず格別の道樂もなかつた様であるが否先生の道樂は「仕事する事」であつた、先生は全く努力の人である。不言實行寸時も懈怠なき其活動振は誠に花々しいものであつた、一面には我邦水道界に於ける先覺者として將又權威者として久しく教壇に後進を薰陶せられ、他面には東京市を始め全國各市の上下水道の計畫施工に參與し其大半を直接若くは間接に大成せられたのである、社會に貢獻せられた功績は實に宏大であると想ふ晩年高齢の爲め教鞭を棄てられたが、其後の奮勵は一層めざましいもので日夜東奔西走席の暖る暇もなく天職の爲めに逝去の前日迄、活躍を續けられた、斯の如きは常人に類例を求める難き神事とも申す可く、眞に模範となすべき活きた教訓である。

先生の愛婿氏家醫學士は昨年末先生の血壓甚だ高く尋常ならざるを認め頻りに靜養を薦めたが「死すとも仕事を廢てぬ」と頑強に應ぜられなかつた由である。

1月18日に本郷三丁目の角で御別れしたが、之が悲しむべき最後の御別れとなつた、無論2月17日御危篤の報に接するや直ちに驅け付けたが、此時は既に御正氣を失つて居られたから私には1月18日を最後と思ふの外はない。歸朝間もなく復興局に轉任した私は區劃整理と云ふ忙しい仕事を擔當した爲め、申譯がない程御無沙汰勝となつた、1月18日の日曜日午前10時頃久しう振りで先生を御見舞した御來客中であつたが非常な御機嫌で、色々と座談の末先生の最終の膏血とも申すべ

き荒玉水道の設計圖を示され、君の意見を聞きたいなど、折入つた御話も承つた、御來客も歸つたので例の通り御一所に散歩し赤門前の佛蘭西料亭で晝食の御馳走を饗け、午後3時頃本郷三丁目の角で御別れする時何となく名残り惜しく、先生も同様だつたと見え共に上野迄との御言葉であつたが他に約束した用事もあつた爲め、思切つて御別れした、上野に向われた先生は電車に乗らんとする私を二、三度振り返へられた今でも目に見える様な御懐しき温容にて。

嗚呼之が夢想だにせざりし永久の御別であつた。今や大恩ある先生は薨かれたのである、私の何等報ゆることなき中に……………」

(大正14年3月中島博士葬儀録の奥に謹んで記す)

先生の高徳を偲んで

龜井重麿君

僕は始めて中島先生にお目に懸つたのは、明治26年8月、故山崎簾次郎博士の御推薦に依り東京市水道技手を拜命し、水道改良事務所工務掛勤務を命ぜられた時である。當時先生は此事業の技術全般を主宰して居られたので、内業外業共非常に繁忙を極め堀越十東、山上清、梶山由良の3氏が先生の手許で秘書役を勤めて居たが、1日先生が僕を其私邸に招き君は山崎博士より成るべく實地監督の方面に用ひ呉れよ、との注文もあり、誠に氣の毒ではあるが、實地に出るのを止めて内部にあって、余の仕事を手傳ひ呉れぬか、との御言葉なりし故、僕は何れの方面にても差支なければ、先生の適當と思召す處にお使ひ下さい、と答へしに非常に満足せられ、君が余の望む如く勤務して呉れるならば非常に仕合せである。と申され其翌日より前記3氏に代つて僕は常に先生の左右に侍し、諸般の整理及び秘書の役目をも承ることになりました。各方面の技師技手諸氏が、夫々分擔の工事を計畫し、先生の閱覽を経て確定し、之を實施するに當り、其工費豫算を作製して差出すると、先生は一通り目を通されただけで、直ちに違算の點を見出し、其主任者に再調を命ぜらるゝこと屢々あります。僕は先生がどうして斯くも迅速に、計算の相違を見出さるゝか、と唯々驚くの外なかつたが、畢竟先生の頭が數理的に非常に能く發達し居られた爲めか、其當時を追憶し不思議に思ふ次第であります。

又先生が斯く繁劇なる職務を鞅掌せられし際でも、各地の水道工事に從事せらるる技師の方々より、種々なる質問の手紙が隨分澤山參りましたが、先生は一々懇切

に返書を送られ又時としては複雑な計算などを記載して送らるゝこともありました。僕は先生の斯道に忠實に且つ御親切なやり方をツクツク感心したのであります。其後何時でしたか東京市に汚物掃除か何かのことで、疑獄事件が起り時の市參事會員や市會議員が多數檢舉された事がありました、其時先生は歎息して言はるゝに日本の自治體も困つたものだ、今少し人格の高い立派な人が出て、眞に市の爲めに盡す様にならなくては駄目だ、嘗て余の米國留學中に紐育市長の改選が行はれて有名な「シセル」卿が當選せられたことがある。其當時同地の新聞紙の報する處に依れば、同卿が市長就任を承諾さるゝと同時に、關係ある諸會社の所有株券等を悉く賣却し、且つ會社の重役なども皆辭職して直接會社等には何等の引掛りなき身分となり、始めて市役所に出勤し市政を見られたと言ふことであつた。斯る廉潔公正な心の持主でなければ到底公平無私に市政を料理して行くことは望めないと思ふ。我國に於ても此邊の心持は、市政に參與する人々に少し學んで貰ひたいものだ。と話された事があります。

先生は人も知る如く、至つて寡言謹嚴なお方で、少しでも曲つた事が御嫌であつたが、又非常に親切なお方で、隨分よく人の世話をされたのであります。誰でも始て先生にお目に懸つた際には、非常に厳格な親しみ悪い怖ろしい方の様に思ふが、半年なり1年なり先生に接近して居る中に次第に御氣質も解り、非常に親切な人格者であることが知れ、長く先生の配下として勤めたいと言ふ考を抱く人が多かつた様に思ふのであります。

然し横着者や不正直な者などは、如何なる人が取成しても決してお許しがなかつた。僕が先生の秘書役を勤めて居た時分に同僚中に仕事も隨分出來、才もあり又何かに就て非常に器用な重寶な人があつた、然るに此人兎角役所勤めの傍ら種々なる方面のことに手を出す癖あり、先生からも度々叱られ懇々と忠告も受けたが、ドーも此癖が直らず、動もすれば公私を混肴する様のこともあつて、遂に職を去らねばならぬ羽目になつた。其當時僕も此人の才智と働きとを惜しみ、先生に頻りに取成し且辯解をして見たが、先生の言はるゝには、成る程君が言ふ如く彼は重寶な男ではあるが逆も我々と一所に働くことは出來ぬ、我々官公吏に當然守るべき職務規律がある、此規律を守れないものは、官公吏たる資格のないものであるから、殘念ながら諦むるの外はないとして、遂に其人を免職されたことがある。之に反し眞面目に正直に所謂小心翼々として精勤するものは、少々其技倆が劣り將又老年の者でも、

彼は正直者故能く教へて使つてやれよと申され、非常に懃れみを掛けられたものである。此邊の處は誠に能く先生の御氣質が表れて居るかと思ふ。

故博士に對して

樺島正義君

恩師中島博士は既に白玉樓中の人となられて1年有半、其突發的の御病氣で逝かれました所爲か、未だ私は先生が此世に居られるやうな氣がしてならぬ、彼の眞摯なそして温情に富まれた先生、其聲咳に接することが今も出来るものゝやうに思ひ乍らも、善く考えると、最早先生と我々とは幽明其界を異にして居る、其度毎に私は云ひ知れぬ寂しさを感じます。學校で御恩になつた計りでなく、世間に出てからも、何かの機會に絶えず指導せられた先生、其方が最早呼べど叫べど御目に掛れないと思ふと、顧みて孤影蕭然の感に堪えぬのであります。今回故博士の記念事として先生が生前からの御希望であつて果されなかつた日本水道史の編纂、それが實現さるゝやうになつたと共に、博士の傳記と逸話とが載せらるゝことになりました。

博士の逸話其他に就ては交友や門下の極めて廣い先生の事にはあり、他に澤山なる可き人がありませうが、編纂委員の方からの御勧誘もあり、此際甚だ取留めのない詰らぬ話ですが、私が故先生に對する感想とでも申ませうか云はして戴くことが出来るなら多少でも私の寂味も取れるかも知れぬと、勝手乍ら次に2, 3 申述べて見たいのであります。

私が初めて故博士の御薰陶を受けたのは大學で水道の講義を聽いたのが抑の初であつたやうに記憶します、彼の謹厳な態度デップリと肥えられた體格、私は何となく外國の大學生でも來たやうな氣分がしました、併し先生は餘り教壇では學生に無駄口を叩かれなかつたので、其時漸やく二十歳を少し越した若造の私は、何だか先生には近付き難いやうな氣がして詳しく其人格を知る機會に接しませんでした。處が私が學校を卒業した時、同窓の連中が寄つて、上野の三宜亭と云ふ貸席で惜別會を開いたことがありました、其席へ先生も御出でになつて種々御話があつた、教壇で見た先生とは變つて、謹厳な中にも極めて碎けた處があり、其少し前、彼の星亨氏が東京市參事會室で暗殺された話なども出ました、先生は當時市の技師長をされて居つたので星氏とも熟知の間柄でありました。君等は星氏と謂えば怖い人のやうに思ふが、怖い計りでなく中々物の解つた人であつたなどゝ云はれた。星氏が群

議を排して東京築港に巨腕を振はんとして、其結果市の委託で先生は、其當時部下であつた築港の擔任技師直木博士を伴つて歐米へ視察旅行をせらるゝ矢先であつた。先生は尋りに我々卒業生に米國行を勧められた。學問は日本でも出来るが、實地の仕事に乏しい日本では練習をやるにも場所が少ないので、米國は其點に於ては恰好な練習場で殊に其國の人々の働き工合など觀て來たら、將來技師としても非常に参考になるなどと云はれた。博士が單純なる一學究に非ずして、若冠身自ら其境地に踏まれた體驗より割り出された言々句々、非常に私の心を惹く魅力があつたので、私は近親とも相談して、程なく渡米の決心を固め、先生に其趣を述べましたら、先生は非常に悦ばれ、今度僕の旅行で、米國の「ワッデル」博士を訪問する筈になつて居るから、其時に君を紹介しやう、一寸君の年齢を書いて呉れ給へと無難作に承諾せられた、其後間もなく先生は洋行の途に上られた、明治34年12月10日は私が横濱港頭米國指して故國を去る日がありました。其は先生の紹介で「ワッデル」博士から私に來てもよいとの通知があつたからでした。後で思ひはこれぞ私が實社會へ出る一大岐路でありました。太平洋を渡り「ロツキー」の峯を越へ、「ミシシッピイ」の大原野を經て、ワ博士の「カンサス」市に入つたのは、忘れもせぬ翌年1月1日「ニュー、イヤースデー」でありました。ワ氏の事務所に入つた當時は青寫真取りや手紙便ばかりさせられた、之では話しが違ふやうで實は不平であつたが、折角此處まで來て歸りやうもないで、云ひ付けられた仕事はどんなに詰らぬ事でも完全にすべしなど云ふ格言などで自らを勵まし不平を押えて青寫真使番何んでも來いと専念從事した甲斐があつて、其中「トレーシング」より「データーリング」而して設計、計算、照査と段々後廻りがよくなつて來ました、今度來ました「ワッデル」博士の書いた博士の逸話にて居ますか、人生氣苦勞なる可からずと云ふワ博士の主義から出たことでは無かつたかと思ふと、其時中島先生に不平を書かなくてよいことをしたと、ヒヤリとしました。然し幸ひ事務所の同僚は殆ど米國の大學生で極めて紳士的であったので、先生が昔仲間の米人に悪罵されたやうな事が無かつたのは、今にして思えば勿怪の幸でした。「ワッデル」博士は屢々中島先生の消息を私に尋ねました。中島博士も嘗てワ博士の許に在つて極めて好成績を擧げたと暗に先生に倣へと云はん計りの口吻で其度毎に私は非常に激励されたのでした。足掛6年の米國生活は斯學上の研究よりは寧ろ私の精神陶冶の上に著しき影響を與へたやうでした。あの偏狭なそしてエキセントリックな私、外國人を見れば逃げ廻るやう

な私も、此體験を経てどうやら並の人間らしくなつたのも、實は故博士一タの御話が其基であり、ワ氏を通じて先生の面影が日タチラツイて居た爲めかと思へば、實に故博士の高徳を偲ばずに居られません。

ワ博士と先生との關係と云えれば、私は又次の話を思出しました、大正8年の春でした「ワッデル」博士の夫人が令嬢令孫を伴はれて來朝されました。夫から2年計りして大正10年ワ博士は夫人同伴、支那黃河鐵橋懸賞論文の審査員として北京へ行かるゝ途次、前後2回我に立寄られました。其度毎に故博士は舊師に對して、非常に歡迎の斡旋をなされまして、其御多忙な身で或は横濱に、或は市内案内に、實に目まぐるしい様な歡迎振りには、私如きは激勵されずには居られませんでした。其時のエピソードとでも申ませうか、ワ博士の船が横濱の岸壁に著いたので、先生は私等と直にワ博士夫妻を訪ひました。ワ博士は久潤の挨拶が済むか済まぬに、「君は何か本を書いて居ますか」と先生に問はれました。其當時ワ博士は「橋梁工學」と題する極めて浩瀚なる書籍を著はされ、續いて「橋梁工事の經濟」と云ふ骨の折れる著述をされた折でもありました。ワ博士の態度は矢張其昔「カンサス」市の事務所で、ミストル中島に對するやうな、親が子にでも對する様な風でした。ワ博士が絶えず先生の事を思つて居らるゝことが傍目からもそうと頷かれました。今や先生が巨大なる手腕にて地上に描かれた幾多の活文字は、先生が生前の御希望通り日本水道史となり、ワ博士の前に展開さるゝ日の近いのを知つたならば、先生地下の御悦びは勿論、遠き波を隔てゝ瞿鑠たるワ老博士の感慨と喜悦はどの位であらふと察せらるゝのであります。

私は歸朝後先生の御紹介で東京市役所に入つたり、江戸川上水町村組合の事業に關係したりしましたが、私は博士とは専問が違ひ且つ同一の場所で働いたのは、極めて短期間であります。私は東京市役所に入つてから間もなく先生は同市技師長を辭せられましたが、私の市役所生活約15年の間、折に振れ時に振れ、先生から經世の道を暗示せられたことは、一再に留まりません。彼の大橋の難工事に最も理解を持つて下さつた有力な一人でした。彼の世間を聳動させた例の獄事件、私の位置として最も疑惑のかゝり易い位置でありましたが、先生は徹頭徹尾私を信頼されましたのは、今もあり難く感じて忘れぬ所です、夫れと云ふのも多少理由がありました、同事件の起る少し前であつた、市役所内の空氣が自己に取つて甚だ面白からぬ事ばかり、或有力なる方面から、絶えず敬遠される様な傾が見えたので、何となく

鞅掌事務に熱が薄れて行くやうな氣がしました、之では悪いと幾度か振ひ起して見ても、熱は冷める一方でした、之では戴いて居る月給に對して申譯が立たぬ、此際私の取るべき道は唯辭職の外はないと、市長まで辭表を提出しました、すると此時先生は我事のやうに心配され、極めて御多忙の身であり乍ら時の市長田尻子爵とも交渉せられ、恰も親が子に對する様な温情を以て懇々留任すべきを説かれました。誰が來やうと辭表を撤回しないと力んだ私も、恩師の温かきそして理りある訓戒に抗す可くもなく、終に私は踏留りました。そうする中に例の不祥事件が勃發しました。或人は私に對して、何んと云ふ迂闊な奴だらふ、大事件の勃發も知らずに留任したのであらふと、併し一面には却つて此一事が事件とは全く無關係の位置に立つて居たと云ふことを證據立てたので迂闊が却つて役に立ちました。之も先生の徳が偶然に然らしめたものとつくづく今も思つて居ります。斯ふ云ふ風に先生は非常の同情を絶えず私に向けられ、彼の權威ある位置にあり、且つ極めて御多忙な方にしては甚だ平民的で、見る影もなき拙宅に來られたり、又私が事務所を開いてからも屢々來れられましたのは、畢竟門下を思ふ眞情の發露としての外私は思はれません。之と同時に私の專攻する橋梁に對しても御造詣淺からず、時々私の持出す橋の設計に對して鋭き質問を出される度に、實に先生は其専門以外にも造詣深く實に技師として、其人格に於て、其學に於て、其實際に於て、稀れに見る立派な方がありました。斯く先生は我邦技術の權威として、殊に其上下水道に於ては海内並ぶ者なき方が一面私如きやくざ者を誘導して「ワッデル」事務所、東京市役所、更に自己の事務所、橋へ、橋へと導かれたのは先生が局部に偏せざる一大技術家であつたことを物語るものと私は思ふのであります。

水道工事史の半面觀

吉村長策博士

編者記す

吉村先生は大正15年2月以来病床に臥せられて、自ら執筆するの自由を有せられず、本編は先生が、横臥しつゝなせる思ひ出話を孫娘の筆記し給ひしものを、更に委員の手にて整理し、尙親しく聞ける事共を補充して取り纏めたるものなれば、或は先生の記憶に残らざりし事もあるらん、又筆記の間に誤りを傳へし點も絶無とは言ひ難けれども、以て我國、水道事業の發達の状況を想見するに足るものあり、活ける歴史として尊重すべき記録なりと信ず。

私は明治10年に郷里河内國、國分村を出て東京に参り、12年3月に工部大學

校に入學しました、之は工部省直轄の公學校で工科大學の前身に當る所であります。其年に第1回卒業生が出られましたから我國の技術界は先づ12年頃より始まつたものと見て大差ないでせう。學則は大體「グラスゴー」大學に範を取つたものらしく、普通科が2年、専門科が2年、實地科が2年、合計6年の課程になつてをりました。

其當時文部省管轄の一つ橋外に3學部(法、文、理)といふがあり、後に開成學校となつたものですが、米國人「ワッドル」先生が橋梁の講義をせられ、其聽講を許されましたから、其講義をききました、其講義は工部大學校の英國風の基礎的學問とは大に違ひ、實際的智識を與へられました。

故中島君は其3學部の一なる理學部の土木を卒業せられたので、理學士の稱號を持つてをられたのですが、「ワッドル」先生の助手を勤められてゐましたが、古市先生の勧めにより未だ我國に「サニタリー、エンヂニア」が無いから其方面を開拓するがよいと洋行せられたのであります。

私は18年に工部大學校を卒業して1年間助教授をつとめましたが、19年に友人牧野實氏の勧めにより長崎縣五等技師として赴任し、當時起りつゝあつた水道の設計に從事致しました。

其當時長崎市の人口は4萬2,3千で御座いましたから、先づ6萬人に供給する計畫を立て、最初に36萬の豫算となりました。之は當時の長崎市としては一大事業にして、時恰も市町村制實施の準備中に遭遇して、市民中に反対意見を持つ者が起り、且中央政府でも多少の議論が起りまして容易に起工の運びには至りませんでした。然るに此時長崎縣の御用掛牧野實氏は他に轉任せられましたので、同氏の擔當せられた港灣改良工事とでも申しませうか、長崎港に注入する各河川の砂防工事、長崎市内の下水改良工事中島川の變流工事を私が引受け擔當する事になりました。其工事の模様は水道には關係しませぬから、茲には略します。

儲て水道工事は前述の通り反對論が起り、可なりの騒動を起しまして、其舉句知事の日下義雄氏、區長の金井氏共に非職となり、技術家たる私だけ獨り残りまして愈工事に著手することになりました、夫は明治22年の頃と思ひます。

設計の大要

設計から申しますと、人口は6萬人とし、給水は平均1人1日20「ガロン」と決めました。水源は中島川の上流本河谷(ホンゴオチダニ)に貯水池を設け水源

とするのでした、御承知の如く貯水池の計畫は流域面積と雨量とに基くものですが、今日の如く2萬分1の陸圖と申す様な便利なものもなく特に測量せねばならぬのですが、夫には相當の日數と費用と技術家とを要するのですが、此の三ツ共意の如くならず、前土木學會長石黒五十二氏の甥、石黒弘毅と云ふ方が長崎縣の唯一の測量師とでも申す様な人でした、外の土木課員は何れも舊式屬官で正式の測量も六ヶ敷い様な人ばかりでしたから、石黒弘毅氏に頼み分水嶺の要所、要所に測點を設け其位置を測定して大體の流域面積を測りました。雨量は長崎測候所にあつた雨量表に據りまして、最小雨量により計算致しました。貯水池の堰堤は高さ約60尺の土壤堤と致しまして内斜面3割5分、外斜面2割5分の普通の工法によりまして堤心防水壁は「クレーパツトルウォール」即ち練粘土壁と致しました。其他は普通の工法の物で御座います。濾過池は周圍傾斜面及び底に練粘土を敷き斜面張石其他普通工法の物がありました。淨水池は煉瓦造土中敷のもので御座います。

此工事に就て當時の状況を少し申上げますと、長崎市に取りてのみならず日本に於ても、先づ初めての工事と申して宜しき次第で、横濱では御承知の通り例の「バーマー」氏が少數の日本技術家と共に水道工事を施工中で御座いましたが、他に水道に経験ある技術家とても御座いませんので、所謂盲蛇とも申ませうか、私が御山の大將となり小學校の先生や、巡査等の内から少しでも數學の心得ある青年を4,5人集めまして測量と製圖等を教えまして、其人等を助手として共に工事の監督に當りました、尤も中島四方三郎と云ふ實地経験のある土木家が1人居りました、此人は工部省工作分局出で立神と申す所(今の三菱造船所)に佛蘭西技師が「ドック」を作る時助手として働いた人で御座いましたので、大に力を得まして共々工事を擔當したので御座います。

工事材料としては石材に乏しき地方でしたから主として煉瓦石を使用する事となり、監獄内に煉瓦窯を築き囚徒をして煉瓦を製作せしめました。「セメント」は今様に澤山御座いませんで英國製の「ピラミット」印又は獨逸製の「アルゼン、セメント」等が良質の物でして値段は高く豫算が十分でないので充分使用する事も出来ません、僅か石灰「モルタル」に少量の「セメント」を交ぜる位の程度でございました。

「セメント」で思ひ出しますが、「セメント」検査の機械は木材で作り砂を重りとして「ブリケット」を切つて見る位で満足致して居りました、鐵管は未だ日本では出

來ませんでしたから「グラスゴー」の DY 「ステューワート」會社製の物を輸入して使つたので御座います。落成したのは明治 24 年頃と思ひます、僥倖にして可成りの成績を擧げまして、落成早々に市内に火災がありました時、防水栓より噴出する水の勢い凄まじく火事も忽ちに消えてしましました、水道工事に反対の市民も其效果著しきを見て昔の反対も忽ちに火事と共に消えてしまふのは、何より愉快に存じた次第でございました。

私に取りまして處女工事であります此水道工事に就て忘れてならぬ事がございます、夫は設計の事で御座いますが、前にも申しました如く、工部大學校にて基礎學を學びたる一青年が大工事を設計致すのですが、我國に於ける實例としては横濱水道工事でございますが、之は外國技師の設計で圖面等も貰へなかつたと思ひます、ですから工部大學校で參考書と致して居りました「ハンバー」氏の「ウォーターサップライ」と云ふ本が御座いました、夫を専ら参考として下手な設計を致しまして豫算も充分切り詰めて 30 萬圓と致しました、實施するに先立ち工科大學教師英國人「バルトン」氏及び内務省三等技師石黒五十二氏の調査を受け夫で初めて安心して實地に手を著ける勇氣が出て参りました。兩先生共早や故人となられましたが、こゝで兩先生に感謝の意を表して置きます。工事の實費は約 26 萬圓であつたと記憶いたします、是で長崎に於ける私の任務も結了致しましたので、……大阪市に水道工事の計畫あるので其方に轉任致しました。時の工事長は理學士野尻武助氏でございましたが、起工前に死去せられましたので、工學博士沖野忠雄氏を工事長に仰ぎ、私は副工事長として工學博士佐野藤次郎氏と工學士瀧川鉄二氏と共に實務に當りましたのでした、此工事は其後數回擴張せられて今日では昔の古跡となりましたので詳しく述べませんが、矢張り長崎と同じく今日より見れば極めて幼稚な物で御座いました、水源は淀川の水を「ポンプ」で汲み揚げ、沈澱及び濾過して大阪城内に設けたる淨水池に更に唧筒で送水して、夫より自然流下により市内に給水するものでした、工事の規模は約人口 45 萬人に給水し一部の擴張を以て 60 萬人まで給水する計畫であつたと思ひます。

工事材料は矢張り池は煉瓦を主要材料と致しました、其時は専ら日本製「セメント」を使ふ計畫で御座いました、忘れも致しません「セメント」鐵管が水道工事に一番やかましい材料でございました、「セメント」は日本に於て相當出來ましたが製造の技術が未だ未熟と申す外ございませんので、御承知の如く「セメント」の品質

不良の物は使用後膨脹龜裂して折角出来た工事を無駄にする様な恐ろしき品物でございますので、技術家としては品質の良否を判定するに少なからぬ苦心を要するのでございます。夫で止むを得ず六ヶ敷き検査規則を組み立てたのですが僅か 4 週間の検査を以て良否を決定し其後の變化は分からぬのでございますから、技術家としては充分安心か出來ず大變心配したものでした。鐵管はたしか東京市水道で有名な鐵管騒動があつた後と思ひますが、此品物も中々心配な物でしたから一部分は大阪砲兵工廠に鑄造を頼み、一部分は例の「グラスゴー」の DY 「ステュワート」會社に製造を頼み、検査は砲兵工廠の分は私自身其衝に當り、外國の分は佐野藤次郎氏出張検査せられたのでした。外國の分は経験ある製造所ですから餘り面倒はございませんが、大阪砲兵工廠は初めて鑄造するもので鐵管其物は御承知の如く極めて單純な製作品ですから正確な製品を得るには湯加減、鑄型の製作及び乾燥程度等色々の困難がありまして、實用に適する品を作るには隨分苦心したもので御座いました。

大阪水道を終りまして、廣島軍用水道に陸軍技師として轉任致しました、夫は宇品港に集まる陸軍御用船の給水及び廣島所在陸軍官衙、兵營に供給する目的でございました。之も大阪水道と同じく河水を水源とし唧筒で汲揚げ沈澱濾過をして附近の山上に設けたる淨水池に汲み揚げ、夫より自然流下して目的の地に給水するものでございました、此水道は一部廣島市民に分與することなし今の廣島水道の前身であったと思ひます、此水道も委しく申上る程のことも御座いませぬが、矢張り鐵管と「セメント」が六ヶ敷き材料でしたので鐵管は外國に注文し、工學士吉原重長氏が製品検査に出張せられました、異形管は同市の瀬良嘉助氏と云ふ舊家の鑄物師に託し鑄造したのでありました。「セメント」は矢張り心配な品物でしたから其時は水道に使ふ「セメント」は隨意契約を以て購入出来る勅令を出して頂いたと思ひます。そして内國製「セメント」を使用したと存じて居ります。之と殆ど同時期に、

神戸市に水道計畫がございまして私は兼勤致すこととなり、佐野藤次郎氏實務に當られ共に同市の水道を計畫實施致したので御座います、夫は明治 30 年から 32 年頃と思ひます。此水道は水源を布引川と湊川と 2 箇所に「コンクリート」堰堤を設け貯水池を作り給水を高部と低部と 2 分し 2 箇所に濾過池及び淨水池を設け自然流下法により給水するもので、人口は 25 萬人を目的としたと覺えて居ります。此水道の時即ち明治 30 年頃内地の「セメント」製造技術も稍熟して參り、價格も相當

低下して参りましたから、初めて主要材料を「コンクリート」と致す事が出来たと思ひます。即ち布引堰堤及び湊川堰堤共「コンクリート」で作られたので御座います。私は布引堰堤が落成して市内に假給水を致したのを一段落として、明治 32 年末に佐世保鎮守府に轉任して海軍技師となりました、尤も之より先、石黒五十二氏が陸軍と海軍との技師を兼任せられてゐましたが、私は舞鶴鎮守府の開設當時に其水道調査に嘱託された關係があつたものですから、此度も石黒氏の紹介で佐世保に参つたのです。

尙廣島の時代に岡山の水道の調査を頼まれて設計を致しましたが、工事の方は佐野藤次郎君がなされたのです。

海軍に入りてからは海軍一般の土木建築工事、即ち「ドック」、船臺、岸壁、海岸石垣、海面埋築、海底浚渫等、又特殊な工事は鐵製及び「コンクリート」製重油槽、木製、鐵製、「コンクリート」製の無線電信柱其他種々な陸上工作物にして、其種類極めて多く、殆ど土木建築に屬する、あらゆる工事を擔當したので御座いました。其間佐世保海軍建築科長在勤中には自然、九州附近の水道工事に關係する機会が多く、小倉水道の設計及び施工をなし、門司水道は瀧川鉄二君の設計を了り特に實行に著手せんとするとき病死せられたれば、私が之を引継ぎ、鈴木久夫氏をして實務に當らしめました。

又福岡水道の設計、大牟田及び佐賀水道の調査を致しましたが、之は後佐野君が完成されました。

長崎水道の擴張工事の設計及び施工も佐世保時代に致しましたが、明治 44 年に海軍本省に轉勤致しました爲め、任地から遠い事と又他の事情のため、第 3 回擴張工事は、中島君がなされたのであります。

佐世保水道は明治 33 — 4 年の頃が偶私が市參事會員を致してより之に關與しましたが、我國に於て始めて「メーターサップライ」を斷行しましたので、共同栓に對しても悉く「メーター」を附し共用栓使用組合を作らしめ使用水量を割賦したのです。凡ての水が「メーター」を通じて流れ出たと申しても差支がないのです、之は一は海軍水道の餘水を供給する關係から、かく嚴重に制限する事が出來たのです。

明治 44 年海軍工務監を勤めてから海軍一般の工事に關與しましたが、水道は職務上工事の主要なるものは横須賀軍港水道と吳軍港水道とであります。其詳細は軍

機の許す限り記載されるでせうから、こゝには申しませぬ。

又故近藤虎五郎君から懇望せられて 45 年の頃、長野市水道に關與したことがあります。斯くて大正 12 年 3 月末に海軍建築局長を退官致しまして、私の技術生活を終りましたが、明治 18 年 4 月以来茲に 40 年間、1 日も休む事なく工事に關與致したことは甚だ幸福なことゝ存じております。只だ遺憾なのは大正 12 年 9 月の大震火災に麹町に於て火難に遭ひ、あらゆる記録を焼失しまして、其上今病床に日を送つて居ります爲めに、充分正確な記録を差出すことが出来ない點であります、それにつけても、今回中島博士記念事業として我國水道史編纂の舉は甚だ有意義の事と考え感謝致しをる所であります。

志賀博士著「旅の提燈」より

『醫學博士志賀潔氏は我細菌學界の泰斗、現に朝鮮總督府醫院長にして京城醫專校長を兼ね令名嗟々たり、中島博士とは郷里を同ふするを以て多年の親交あり、博士の記念事業として日本水道史編纂の舉あるを傳ふるや自著「旅の提燈」を寄贈せらる、蓋し「旅の提燈」は大正 13 年瑞西セネバ開催世界血病會議に日本代表として志賀博士第 3 回目洋行の觀想を詳述したる者趣味實に津々を極む、編中水道に關する記事も亦尠からず、何れも金玉の名論斯界絶好の大忠言なり、依て茲に其一端を抜萃して史上に清香を添へ讀者の参考に供せんとす。……………』

(茂庭委員)

(1) 米國に於ける衛生の進歩

20 年前に見た米國は危険な所であつた。「ベデカー」の旅行案内にも歐州より米國に旅行する人は「チフス」の豫防注射を受くべし。

米國に上陸したなら水は一切飲むなと書いてあつた位實際ホテルの食堂に入つて見ると「テーブル」の上に出である水入の底面には眞黒い沈澱があつた。これを米國人は平氣でガブ々々飲んで居つた。或る日「ニューヨーク」の中央公園に行つた時、隅の方で人のガヤ々々話す聲がするから覗いて見ると長い腰掛様の板に 5,6 人の労働者風の男がゾロリと並んで大便をして居るのを見て假令労働者とは謂へ餘りの亂暴な風に大いに驚いた。「ニューヨーク」から首府「ワシントン」に行つて停車場に著いた時便所に行つて見たら其不潔に驚いて飛び出したことがあつた。(當時中央「ステーション」が出来て居らず「ニューヨーク」、「ワシントン」を走る數條の私線が各々小さな「ステーション」を有つて居つた) 其當時又結核豫防の宣傳が行はれて居つて往來や電車内で咯痰をすると拘留され 50 錢の罰金を科せらるゝので

あつた。咯痰禁止の宣傳ビラが到る處に帖り付けられて居つた。それにも係らず電車に乗つて居る人は朝刊新聞を読む風をして顔を隠してソフト痰を吐く。警察署の拘留場は満員で押すな押すなの盛況を呈した爲め、遂に2,3日で此罰金制は廢されて仕舞つたと言ふ。今は到る處の都市には、「クロール」消毒を施した水道で安全なる飲料水が供給せられ、ホテルの便所及び浴室の設備は世界第一と誇つて居り、電車には咯痰禁止の掲示をする必要なきまで衛生思想が進歩して居るのを見て流石は米國人である。やうと決心すると如何に困難な事でも仕遂げねば止まぬ所に米人の強みがあり誇りがあると感心した。

「ニューヨーク」市の水道は數十哩距てたる谿流を堰止めた處より水を引いて居る。「クロール」消毒を行ふて以來「チフス」患者が減少したと市の衛生課では説明して居つた。之に反して猩紅熱は年々流行し殊に2,3月頃に多いと言ふ。市衛生課の試験室に居る女醫「ドクトル、シローダー」は連鎖球菌培養を以て「テスト」を行ふて居つた。

(2) 「コーベンハーゲン」の水道

市水道「Kobenhavns Vandvork」の課長「ゼオーレンゼン」氏が水道施設に就て詳細に説明して呉れた。

「コ」市の地下水は硬度が高い。之が住民に「ギヒト」や關節變形の多き原因と云ふ人がある。又「デンマーク」には一般に野菜が欠乏して居るからだと云ふ人もある。從來「デンマーク」にては牛肉と牛乳とが常食とされて居つたが近來は盛に茶食を宣傳して居る。元來「デンマーク」の國は彼の大氷海時代に其冰が解けて流れ「アルプス」山邊から押し出せし土砂が海岸に積みて出來た處である。即ち水成層であつて一面平坦な廣野である。故に山より流れる河水を取りて水道の水源地とする譯には行かない。「コ」市を中心とし半径10「キロ」の圓を書き此圈内に數10箇所の鑿井を試み其湧出量を測りて之を1箇所に集めて直ちに全市に供給して居る。されば濾過装置の必要がなく至極簡単である。唯此井水が鐵分を含有するが故に、水を高き處より雨下して空氣中に鐵分を酸化せしめ、之を砂にて濾過して鐵分を除いて居る。

斯く其施設簡単なれば1箇年の経費百萬「クローネ」に過ぎずと言ふ。

(3) 「ハンブルグ」の水道と「コレラ」の流行

7月5日(土)「ハンブルグ」大學衛生教室に「ノイマン」教授を訪ぶ。氏は曩に「クルーゼ」の後任として「ボン」大學に教授たりしが、2年前當大學に榮轉せりと言ふ。衛生の専門なれば「ハンブルグ」の「コレラ」流行に就て質問を試みた。私は彼の有名なる1882年の「コレラ」流行に就て講壇に立ち講義を爲すこと幾回、而かも不明の點ありて今に至るも解けない。幸に教を乞はんと懇懃に話した。當時「アルトーナ」には「ハンブルグ」と關係なき獨立の水道を有して居つた爲め「ハンブルグ」の「コレラ」流行は「アルトーナ」には浸入せざりしと謂ふも其水源地は果して何處にありしか?

「ノイマン」の説明に據れば「アルトーナ」の水道の水源地は矢張り「エルベ」河で「ハンブルグ」水道の下流より水を引き入れて居つたと言ふ。然らば「ハンブルグ」市にのみ「コレラ」の流行せしは説明し得ざるに非ずやと反問すれば「ノイマン」の答は稍々窮したる様子であつた。

「ノイマン」説明して謂ふには、然り、斯るが故に「ペッテンコーフエル」の説或は眞理ならんと思ふ。「ペ」氏は「コレラ」流行にXとYとの必要を論じた。Xを「コレラ」菌として更にある要約に由りて流行を來すものと考へたい。

當時の流行に際し「コレラ」菌は「エルベ」河の水流に入りしや、或は「ハンブルグ」側の濾過池にのみ浸入せしや明確ならざれども、兎に角に多量の「コレラ」菌が水道に浸入したるは想像に難くない。而して「アルトーナ」側にも又同一構造の濾過池ありて「エルベ」河水を入れしは「ハンブルグ」と同様であるとすると「ペッテンコーフエル」の學説に依りて解説するのは止むを得ざる處である。

余問ふて曰く、或は然らん。然れども今日の吾人の智識より見れば「ハンブルグ」の水源濾過池に働きつゝありし人の中に保菌者ありて、「コレラ」菌は遂に其水道内に浸入せしものと考ふるを至當と思ふ。

「ノイマン」も勿論此説に賛成せざるを得なかつた。但し「ハンブルグ」と「アルトーナ」とは其地層に於て異つて居る。甲は昔時海底に沈める地で其地層は藻より成り、乙は舊時より海岸地にして其地層は粘土より成る。此差違のあるのが「ペッテンコーフエル」の學説ある所以と附け加へた。

然し私は此以上追及することを敢て爲なかつた。而して當時の事情を明かにし得

たるを喜んだ。

(4) 水道論、水道の革命

「ノイマン」との談は一轉して水道論に入った。私は問ふた。「ハングルグ」の水道は今猶「エルベ」河水を使用するや、或は「クロール」消毒法を施行せずや。「ノイマン」謂ふ。「クロール」消毒法は現に使用して居る。余の實驗に依るに「クロール」は 10 萬分の 6 を加ふれば「エルベ」河水を全く無菌とすることが出来る。そして河水を濾過地に引く前に「クロール」を加へて居るが、濾過層の所謂生物的濾膜の成生を破壊せぬ様に河水を貯水池に引入れた所に於て「クロール」を加ふることとした。斯くすれば「クロール」は濾過池に入る前に稀釋になるから濾過池の妨害とはならぬ。

私は東京の水道も北里博士の考に依りて多摩川の水を入れ貯水池にて「クロール」を加へ、それから濾過池に導くことは君の説と同一なりと説明し更に「ハングルグ」の水源改良に就て意見を聞かんと切出した。

「ノイマン」は説明して謂ふ。今日の進歩に於て河水を濾過して無害と爲さんとするは元より時勢に添はず、甚だしき危険と多大の経費が伴ふからである。「ハングルグ」にては十數年前より市の東南地方數十哩に亘りて鑿井を企て地下水を得んと計画を進めて居るが、地下水は鐵分を含みて良水を得ざるに苦んで居る。私は「コーベンハーゲン」の除鐵装置に就て話すと「ノイマン」も亦其方法を採用する必要あり。然し近年獨逸の財政窮乏の爲め此計画を一時中止するの已むなきに至つたと歎く。私は朝鮮平壤市に於て河中の一小島に鑿井して、自然濾過の河水を水源と爲さんと欲して居る。「ハングルグ」にても「エルベ」河の上流にある島に鑿井しては如何にやと謂へば「ノイマン」そは大に可ならんと賛成した。

(5) 「ジルベルシミット」教授と語る

談は研究室に移つた。瑞西の「ストルーマ」(甲狀線腫)は各所に存在する。(ミュンヘンにも多し)其原因を從來の研究者は飲料水に求めんとしたが今は直接水に關係ないと言ふ結論に達した。例へば無病地の獨逸より「ラッテ」を取寄せて瑞西の有病地及び無病地の水を與へて飼ふに 2~3 月にして共に甲狀線腫を起す。然らば獨り水にのみ由るに非ずして瑞西の山國の食料(水も野菜も)は總て沃度缺乏である

と言ふべきで、僅量の沃度を食料に加へて與ふると「ストルーマ」は發生しない。そこで目今人體には 0.1 「ミリグラム」の沃度加量を一日量として與へ試験しつゝある。但し多量に與ふると沃度「バゼドー」を發生する。

瑞西國內にて食物中に沃度含有量を調査するに、無病地のは有病地よりも 2~3 倍多い。思ふに山鹽は沃度を缺くので矢張り海鹽が良き道理である。そこで私は提案した。海苔や昆布の如きものを日本より輸入して常食となれば必ずや「ストルーマ」を消滅させることが出來よう。「ジルベルシミット」はそれは面白い思ひ付きである是非試験して見たいと謂ふ。

「チューリッヒ」市の下水處分法を尋ねると、それは廣き面積の地に導き、日光と好氣性菌との作用にて清澄ならしめ之を川に放流して居る。沈澱物は乾燥して肥料に賣却する。近時嫌氣性的處置には反對説が起つて居る。

「ウルトラロート」(赤外線)にて兎の角膜を照すと「カタラクト」が發生する面白いではないか。

談は何時までも盡きない。午後又授業ありと聞いたので辭し去つた。

(6) 「バーゼル」市の水道

「バーゼル」市の水道は 1860—80 年に亘り英國人の設計に係るもので「ユーラ」湖より水を引いた。然るに「バーゼル」市中に年々「チフス」流行絶えざる爲め、1892 年水道改革の説興り、「ウイーゼル」川(市の西南より流れて「ライン」河に注ぐ)に沿ひ 10 個の井を穿ち地下水を得んとする設計を立てた。其深さ 10 「メートル」で極めて良水である。年々井の數を増し擴張を圖つて居る。近年「チフス」の發生大に減少した。

(7) 「モンス」の衛生博物館

「ブリュセル」より南方 1 時間許りに「モンス」と言ふ市がある。此市に「ベルゲン」州立の衛生博物館がある。Dr. Herman が設計したもので今は所長となって居る。二階は研究室にして「ワッセルマン」反應検査などを行ひ收入として居る。階下には上水、下水より井水、地層、撒水酸化式下水處分等を巧みに標型で示して居る。食物の分析、眼の調節等の説明は感心せしむる。

其陳列の方法等は一見の價値があると思ふ。

第四章 逸話

逸事

茂庭忠次郎博士

大正元年の秋かと記憶する、大暴風雨の爲め被害激甚を極めた名古屋築港の實況視察として、東京から滝々廣井、中島、中山の3先生御揃ひで見えたので、竿田縣土木課長及び私は東道役を務め、同港の棧橋から「ランチ」に乗り限なく港内を御案内したのであつた。折しも天高く馬肥ゆるの好季節で、天氣も快晴であつたが風は相當に強かつた様に想ふ、突堤の燈臺附近に差掛ると故障の爲め、運轉の自由を失つた傳馬船の船頭が頻りに合図して救援を求めた、然し「ランチ」の船長は縣廳の御役人丈けに、高貴の特別御案内と云ふ自己の職責を重んじて振向もしなかつた、船頭は悲しげな聲を張擧げて益々頼んだ。此時中島先生だつたかと想ふ「可愛さうに曳てやつたら」と呟かれた、鶴の一聲傳馬船は直に「ランチ」から投げられた綱で曳かることとなつた、船頭は例へ様のない程の欣び方で頻りに低頭して謝意を表した。

先生等は船橋に立ちながら熱心に四圍の實況を視察せられた、偶々一陣の怪風吹き來つたと思ふや、電光石火「アツ」と云ふ暇もなく、中島先生の禿頭が晴天の下に輝いた、遙か向ふの海上には浮きつ沈みつ中折帽の漂ふ姿が認めらるゝのである、流石の中島先生も之には閉口して、禿頭を抱へながら恨めし相に、流れ行く帽子を凝視せらるゝのみであつた、廣井先生からかつて曰く、「中島君其頭で熱田の町を通れるかね……」。

恰もよし曳かれ船の船頭御恩に報ふるは此時とばかり、狙を定めて一竿に帽子を引揚げた、船頭の得意、中島先生の喜び、船中の歓聲、聞くならく其昔、那須野與市が扇の的を見事に射落せし瞬間も、斯程迄とはと思ふばかりであつた。間もなく「ランチ」及び曳かれ船は棧橋に着いた、身投を救われた中折は再び中島先生の手元に戻つたが、不思議にも帽子は少しも濡れて居ない、唯油ぎつた内面の黒光りを示すのみであつた、廣井先生又曰く、

「君のは防水帽か中々重寶だね」

中島先生得意氣に、

「之は倫敦で買つた上等品だ」

廣井先生、

「君の洋行は何年前だつたかね」

中島先生苦笑せらるゝのみ。

蓋し中島先生の年譜を拜見すると、明治35年7月再度の洋行を了へて歸朝せられた由を記載して居る、尙先生の名譽の爲めに申述ぶるが、翌年名古屋に見えた節には、丸善で購はれたと云ふ、新調の中折を自慢されたのであつた。



名古屋在住の頃、先生の歸京せらるゝのを送りがてら、豊川稻荷參詣をして先生及び新井榮吉君と3人で、可なり夜更けて豊橋停車場前の某旅館に宿したことがあつた。宿の番頭どう勘違ひしたのか階下の薄暗い8疊の間に3人を案内して頗る冷遇を極めた。こんなことには案外平氣な先生も、此時ばかりは餘程癪にさはられたと見え、交渉に立たんとする僕等を止めて御自分で女中を呼び、例になく肩書附の名刺を渡された。

東京帝國大學教授工學博士中島銳治、暫くすると美人の名高き宿の女将、眞白な顔から汗を拭きつゝ低頭平身、親ら階上最上の間に案内して歓待する、僕等も亦御相伴に郡内か何かの軟かい蒲團の中で安眠することが出来た。



先生の來名の折は何時も志那忠本店に宿泊せられた、蓋し同旅館は場所柄もよく静かな實直な點を御気に召したのである、旅館でも先生を最も欣んで歓待した、當時同旅館の最上客は花井卓藏博士と先生を第一に推した様である、先生は酒も呑まず小言も少なく面倒のない靜かな、しかも茶代や御手當は充分に張込む上々客だからである。



先生は何時も腰の「ポケット」に數百枚の紙幣を紙にも包まず無造作に挿し込んで居られた、買物の度毎に夫を驚撫みにして勘定せらるゝので命よりも金を大事と心得る名古屋邊の番頭等は目を「バチクリ」と驚いて居た。何年の夏だつたか忘れたが、志那忠に先生を訪ねると側に50餘反の鳴海絞が積んであつた、おや吳服屋でも御初めですかと伺ふと、何昨夜退屈凌ぎに本町通を散歩しながら素見すと、餘り廉かつたから買つたとの仰せ、然しこんなに澤山どうなさるかと聞けば、誰にやつても欣ぶだらうと平氣で居られた。



故名古屋市水道技師長上田敏郎氏は多趣味の人で、芝居、音楽、相撲、書画骨董何でもござれと云ふ風流人であつた、一日大阪から來た名題役者が面白い芝居を見せる云ふので無理に先生を誘ひ出しが、先生は欠伸を連發するのみで少しも妙味を感じぬらしかつた。之ではならぬと兩三日後更に浪花節を聞きに誘うた、浪花節は丁度雲右衛門の赤垣源藏だつたかと想ふ、之は直ぐ理解つて面白いと非常に御氣に召して、翌晩も聞きに行かれた。其後東京でも時々は浪花節を聞かれたらしく、當時來名毎に浪花節丈は先生の方から、誘ひ出さるゝを例とする程であつた。



故岡崎芳樹博士は有名な潔癖家で公開の席以外、人と共に酒食せらるゝ様のことは非常に珍らしかつた由である、或日我々4、5人先生の宿を訪れ、牛鍋の御馳走を突つき合つて居る最中岡崎博士が訪ねて見えた、同博士の潔癖を極端迄御承知の先生何と思つたか「岡崎君一つどうだね、こんな甘味いものはないよ」と笑ひながら箸をすゝめられた。岡崎博士は苦笑して箸を取つたが、生先の云ふ通り甘味かつた爲めか、又は後難を恐れての敗惜みか、不思議にも大食せられた。



先生は頑健な身體の持主であつた丈け大食は有名であつたが、酒も甘味くはないがとの前提の下に、君なんかに敗けるものかとがぶ呑みされたことも珍らしくなかつた、然し晩年には一口もやられなかつた。

克く食事の御馳走を受けたが、私の酒好きを御承知の先生は、何時も爛徳利を2、3本側らに置いて氣忙しく、どうだ々々々……之には折角の御馳走も實は不渺閉口々々

逸　　話

草　間　偉　博士

毎日晝食後東大土木科の教授助教授連圖書室に集り、英和工學字典の原語及び譯語に付き討究するを例とした時のこと。或日中島先生は其席上で徐ろに口を開き、

“今日は意外の失敗をした……”

廣井先生

“何の失敗か”

中島先生

“メートル”(量水器)の講義中うつかり、横濱あたりの支那人町では「チャンコ

ロ」はけちだから、よく水道の水をぱちぱち静かに出して「メートル」を誤魔化し居ると言つて仕舞つた。……よく見たら學生の中に支那人の留学生が居た、……本當にいやになつて仕舞つた”

廣井先生

“君より其支那人の方が餘計いやになつたらう”(一同興笑)

博士技術者の本分を論す

西　大　條　覺　君

博士が東京市技師長の職を辭された時であつた、剛直にして所信に邁進し毫も情實的請託に左右せられなかつた博士には、當時の東京市は其性分に合はない空氣が漂つて居つたかも知れぬ、かうした氣質が祟つて一部名譽職の反感を買ひ豫算審議の時技師長の報酬を削除しようと提議した議員があつた、そんな経緯で博士がやめたと聞いた東京市水道在職の某々兩工學士が憤慨の餘り博士を訪問して、名譽職の横暴は實に言語同斷黙止するに忍びませぬ、我々も先生と行動を俱にしたいと眞情を披瀝して博士の同意を需めた、此時博士は徐ろに口を開かれ自分は今回辭職したに就ては不満がないでもない、併し技術は神聖である、之に從事する技術者は私情に驅られて事を誤まつてはならぬ、自分はやめるに就ても後任者迄も推薦してある、君等がやめる理由は少しもないではないか、自分がやめる爲めに君等がやめると云ふ事は反つて吾が名を恥かしむるものである、と懇々諭された。そして技術者殊に市に職を奉ずる技術者は、名譽職等の勢力に倚ることは技術の神聖を冒瀆するものである、宜しく己の腕を磨いて己の腕を信頼せよ、と附加へられた。

博士の潔癖

博士は衛生工學者丈に邸宅の衛生的施設が仲々よく備はり便所などは換桶式を採用せられて居つた、東京市の水道擴張調査時代には度々水源地方に出張せられたが、博士の潔癖を最も閉口せしめたものは田舎旅館の便所であつた、それで何時も旅舎を出てから途中で隨從者一行を「一服やれ」と休憩せしめ附近の山林中に這入つて用便せられるが常であつた、或る日の事多摩川の支流平井川流域の大久野から多摩川本流域日影和田に越える天神峠の絶頂、眺望のよい處に一行が差しかつた、多分此邊が博士の御氣に召すだらうと思つて居る矢先に、諸君「此處で一寸休憩し

よう」と云はれた其處で私は機敏に同伴した測量夫に命じて附近の山林中にある雑草を伐り拂はせ博士の安産所を作り上げた、博士は悠々青天井の下で用便を終り、「サア行かう」と一同を從へて行を續けられた、其時代の技術者は工夫、測量夫等に對しては、可なりの權力を持つて居つて、技手位になれば監督様々で尊敬せられたものであつた、其當時主任技師以下一同が敬事する博士のことなれば、測量夫の眼からは神様以上に見えなに違ひない、其後に起つた事件が面白い、數日後測量夫が其處を通りがかりにフト好奇心に驅られて前日自身が作つた博士の安産所を覗いた、多分偉い博士のことだから、どんな遣し物をなされたかと思つたらしい、見れば金色燐爛たる左り振りと思ひきや、一匹の大きな蝮がどくろを巻いて目を光らして居つた、まさか博士の便が蝮に化けたとも思はなかつたらうが、兎に角之を捕へて町に持つて行つて幾何かの金に換へることが出來、安産所を作つた測量夫に思はざる遺利を得せしめたのであつた。

博士部下の餘技を悦ぶ

東京市水道の擴張調査中測量調査の各班事務所は博士の意向で大概寺院の座敷を借り受け、班員は皆其處に宿泊して居つた、一班は多摩川畔草花村の慈勝寺に置き今内の内務技師山内喜之助氏が班長で、他の班は其上流吉野村即清寺に置き班長は是も今内の内務技師牧野雅樂之丞氏であつた、博士は各班を巡歴して作業振りを見廻られ汚い寺に泊られて部下と苦樂と共にせられた、博士の宿舎に當つた班では大喜びである、毎日乾燥無味の片田舎で作業に勵み何等の楽しみもないが此時ばかりは作業を引上げて來て見れば夕食の膳には田舎に不相應の珍味が盛られ、而も地酒まで添へられるのが例であつた。皆博士の御馳走である、血氣の一回は嬉々として牛飲馬食する、博士は此状景を眺められてニコニコして居られた、次第に「メートル」の揚るに從つて美聲自慢の者が唄ひ出すと、博士は「御前は技手をやめて浪花節語りになつた方が成功するよ」と皮肉を云はれた、博士は元來歌舞音曲は餘り好みぬやうだつたから或は部下を戒むる意味が皮肉の内に多少含んであつたかも知れぬ。談偶々山内氏が田舎相撲の大關を投げ仆した事に及んで御機嫌直つて手を拍つて喜ばれた、筋は斯うである、片田舎の事でよく田草相撲があつた、山内氏は小柄であるが相撲は仲々強い、併し氏に此餘技あるを誰も知らなかつた、一夕相撲見物に行き全盛の大關某山の結びの相撲が極まつて觀衆に飛入りを挑んだ、好きな道

なり、たゞり兼ねて飛び入りして大關と引組んで見事投げ飛ばしたと云ふことであつた。

其後博士が青梅驛に下車せられ吉野村に向はるゝ途中であつた、道路は田舎道に似合はず坦々たる直路である、牧野氏は驛に博士を出迎へ徒步で博士の車の後に従ひ、行々作業の成績を説明するのであつた、車夫は坦路にかかり走り初めた、牧野氏長脚を伸ばして之に従ふ、車夫速力を増せば牧野氏「ピッヂ」を早めて之を追ふ、牧野氏靴底に砂を蹴立てゝ走る様を見て、里人馬の如しと云ふ、博士之を聞いて車上に嗤笑せられた、博士は斯くの如き無邪氣の行為を悦ばれた、其後知人に會はる毎に山内の相撲、牧野の馬走事件はよく話題に上つたものである。

博士の閉口

秋川水源探査の時である、蓋し東京市擴張水道調査の中、大久野貯水池案は補助水源として多摩川の支流秋川より導水する計畫であつた、博士の一行は山路に馴れたる駄馬に乗つて秋川の上流に進み入つた、そして水源の奥、檜原村の或る十數戸許りある貧乏部落に著いた、其處には思ひ懸けなくも村の分教場があり住込みの教員只一人で小使兼任までやつて居る學校だつた；其處を一時借りて携帶の晝食を開く事になつた、何しろ熊や猿の訪るゝ山間僻村の分教場に大學教授の博士を迎へた事なれば前代未聞誠に光榮の至りと教員君恭しく筆硯を持して博士に記念の揮毫を求めた、博士此時ばかりは閉口して返答に躊躇した、博士の書を能くせざるを知つて居る我々は、博士は慣れぬ山路に非常に疲勞せられて居るからとか何とか云つて甘く擊退したので博士もホットした事があつた。

博士一行荷馬車に乗じて水源地探査

東京市擴張水道將來線として成木貯水池案があつた、其補助水源として荒川の支流成木川より導水する計畫の調査中に成木川流域を踏破し水源の奥を究め之より妻坂峠越えに秩父大宮に出る行程を定められた、時恰も明治43年秋關東地方大水害の直後であつた、前夜成木川の沿岸飯能町に旅泊し翌早朝より人力車にて峠の下まで行き、それから峠を徒步越えて大宮に出る難路十里の行程である、然るに出水後の復舊未だ成らず、道路は破損して凹凸甚だしく人力車にては顛覆の虞がある、只辛うじて工事材料運搬の荷馬車が通り得るのみとの情報があつた、蓋し荷馬車は重

心が低く如何に傾斜しても顛覆せざる故だ、十里の難路而も峠越えでは徒歩で之を突破する勇氣もなく博士に薦めて荷馬車行の議が一決した、そこで荷馬車一輛を傭ひ上げ前晚より艤装に取りかゝつたが生憎雨空で其設備に頗る頭を悩ました、兎に角車臺の周圍に柱を樹て「アンペラ」の屋根までは出來上かつたが急拵への悲しさ周囲のかこひ材料がない、止むなく菰蓆を以て圍つた、翌早朝博士以下一行 6, 7 人曉霧の中を出發、其態頗る珍で沿道の里人の目を驚かした、惡路上車の動搖甚だしく一同荷馬車の上に左傾右轉した、行々災害工事中の危険なる假橋にかかる毎に隨伴した工夫が先頭に立ちて「千金の荷物を運ぶのだ、細心の注意をせい」と馬子を勵ますのも可笑しい、途中時々驟雨に會ふので菰蓆の篷を下して進んだ、篷の中に蠢動する動物あるを見て、里人謂集して其何なるかを怪しんだらしい、其中の一人が豚ならんと呼ぶものがあつた、博士菰蓆圍ひの中に微笑して一同に豚の泣聲をせよと命じた一行口を揃へてブーブーをやり出し後に堪り兼ねて一度にドット咲笑したので里人驚いて四散した滑稽もあつた、斯くて峠の麓に達し此處で荷馬車を棄て徒步となつた、羊腸崎嶇たる山路、殊に災害直後のことなれば實に危險至極である、博士肥體を提げ一同と共に黙々として進まれた、峠を越えた頃より各々疲勞を覺え下り途なれば轉石に躊躇行更に難であつた、博士はと密に見れば猶黙々として進まるゝが疲勞の色が見えて一同恐縮した、山腹にかかる頃より日が暮れ、大宮町の燈火點綴して足下に展開したので一同之に元氣を得、勇を鼓して行を急いだが、行けども行けども山麓に達しない、困憊して通りすがりの里人に大宮迄の里程を問へば一里と答ふ、更に里餘を過ぎて亦問へば猶一里と答ふ、日暮れて途遠しとは全く此時の感であつた、今まで黙々たる博士は此時荒川の鼻届り鮎の話をして聞かせた、我々若い者の疲勞を紓るために、博士が此説話をなされるのだと思ふと誠に恐縮の外無かつた、而して其説話の中にも人生の行路を鮎の潮流に譬へて後進を激励するあたり博士の風格を示すものがあつた、御蔭で勞を忘れて宿に著いたのは正に初更過ぐる頃であつた。

博士水衛所に假泊して中毒

玉川上水路熊川水衛所に東京水道擴張調査測量の一班を置いた、博士巡歴して此陋舍に一泊せられたことがある、夕刻庭前に出て庭掃除の使丁を相手に雑談せられて居る間に、一蜂飛來博士の禿頭の頂邊を一刺し去つた、部下の者が之を知つて驅

付け見たものゝ何等施す術もない、蜂に刺されたのには海栗がよいと水番人が有合せの海栗を博士の頭になすり付けた、それで一旦事が治まつたが風呂が沸いたので博士を風呂場に案内した、間もなく身體中が痺く氣持が悪いと云つて風呂場から上つて來られた、見れば博士の顔は赤色の斑點で處々腫れ上つて居る、此處が痺いと搔かるれば忽ち赤色の斑點となり腫れ上る、身體中一面赤い斑點で満された、何となく寒氣がすると云はれたので一同驚いて床を伸べ博士を寝かせ早速醫師に使を走らせようとしたが博士は「大した事はない」と言はれどうしても承知せられない、博士の強情を知る一同は何のすべもなく博士の枕頭に侍して看護して居つた、其中に斑點も次第に薄らぎ腫れも引いて博士はスマ、スマと睡られたので一同安堵して寝に就いたのは深更であつた。原因は博士は汽車中で壽司の辨當を食せられ魚類の中毒であつた事が後で分明つた、其當時は蜂に刺された爲めと計り思つて居つたのである、其夜半水道専用電話で、私の宅から女兒出産を報じて來たので翌朝此旨を博士に申上げると「もう已はすつかり恢復した、初產は大事だ心配だらう直ぐ歸れ」と云はれ一番列車で歸京した其兒は當年十七歳、憶へば十七年の昔である。

博士の食道樂

博士は食道樂であつた、曾て大患後一切酒類を止められてから殊にそうであつた、洋食は何處が美味しい、天麩羅は何處がよい、と苟も名のある所なれば些々やかな横丁の果て迄も知つて居られた、博士は後進部下を伴れてよく美食を漁つて居られたものである、又毎年、年末か正月には必ず水道關係の部下を大勢招んで御馳走して下さつた、博士晩年には殊に支那料理が御好きになつた様だ、神田の中華第一樓、日比谷の陶々亭、小石川の偕樂園等博士の御招待に預り初めて知つた者も多かつた、或る時博士に「先生三越の隣の繩のれん〇花を御存じですか」と伺つたら「知つてゐるが行つた事はない併し御前はあの向の大増へ行つたことがあるか」と反問された事があつた、荒玉水道調査中博士は部下を連れて浦和在、大田塙(ダイタクボ)の百姓屋まで鰻を食ひに遠征せられたこともある、此頃美味い所を見付けたぞと、數寄屋橋傍の藤屋の洋食を御馳走になつたのは博士の薨去前約半月、「ア、之が最後であつた。

博士と後藤新平子爵

後藤新平子、東京市長時代の事である、博士は東京水道史の資料として古い寫眞類を探して居られた、其中に風姿颯々漆黒の長顎鬚ある人物の寫眞を出されて「君は此人を知つてゐるか」と問はれた、存じませんと其裏を見れば、

「中島銳治先生 明治二十三年 於伯林 後藤新平」

と記してあつた、博士は微笑して「此時は己の方が先生だつた技術者は駄目だなあ」と述懐された、之は面白いと、時の助役前田多聞氏が此寫眞を持って行かれた筈である。

私は博士に師事して大學を出て直ちに部下として博士の指導監督を受け、次で博士の助手として各地水道の計畫に參與し、其間 20 有餘年、追憶するに謹嚴其物の如き博士には逸話として特筆すべきものは少ない、東京水道擴張調査時代には博士と接する機會が多く多摩川流域 200 有餘方哩支流の奥まで博士に隨從して足跡到らざる處なく山間僻陬屢々起居を共にした。此間に於ける逸話とも云ふ可きものを記述して見れば謹嚴の中にも温情に富み一言一行後進子弟の訓陶指導のみで轉々博士の人格を忍ばずには居られない。

思出の儘

中桐春太郎君

大正 5, 6 年の頃だつたと想ふ、工科大學内教授助教授集りの一室で、僕が富士登山をなし、風雨の爲め 8 合目から引返した話をなせしに、側らに居られた博士徐ろに「余も曾て登山せしことあり、8 合目以上を胸突 8 丁と稱し峻険を極む、之を登攀し盡し絶頂に達したる時の爽快言ふ可からず、人生も亦然り、男子須らく之を味はざる可からず」と大に激励せられたことがあつた。

大正 6 年僕が秋田巣山専門學校講師を拜命し將に赴任せんとするや、暇乞の爲め工科大學の土木科教授室を訪問せしことあり、偶々食事時とて晝食の御馳走を享けしも、何故か食進まず半ばにして止む、博士側より之を熟視し教授室の書棚を眺めつゝ「澤山食はなくては駄目だよ」と蓋し人を教ふるには、多くの参考書を讀破せねばならぬことの偶語であつた。

岳父銳治がこと

氏家信君

岳父の名を初めて知つたのは明治 32 年であります、私の未だ中學に入つたか入らぬ頃と覚えております、其年は大學の教授や、學者達が 100 人近くも博士に推薦

せられた時で、我故郷仙臺出身の學者は 3 名まで博士になつたのであります、之が仙臺人で學位を得た最初の學者で、我々は小供心にも郷黨の誇りとしたものであります、況して郷黨の評判は大したものであつたと覺えております、其 3 人の學者と云ふのが、文學博士の大槻文彦、獸醫學博士の須藤義衛門、工學博士の中島銳治の 3 氏であつたのであります、大槻先生は私どもの中學校の校長であつたし、尙ほ祖父などが懇意にしておつたので、宅で 1, 2 度御目に掛つたりして知つてをつたのであります、且つ言海の著者としても其名は夙に承知して居りましたが、須藤博士と中島博士とは初め新聞紙上で其名を知つたのであります。水道の教授であることも其時初めて聞いた様な次第であります。

斯くして其名は記憶して居りましたが、未だ其風貌に接したことがなかつたのであります、其後須藤博士の噂は、兄が明治 33 年の夏に上京して早稻田の東京専門學校に入學した時、偶然にも農科大學の書記の花村氏方へ寄寓したので須藤博士とも知る様になつたので歸省の折りなどに聞いて居つたのであります、中島博士の方は少しも聞く機会がなくして多年を経過したのであります。

明治 42, 3 年の頃と記憶しておりますが、私は大學を出て東京府巢鳴病院に勤務しておつた頃であります、仙臺學士會が丸ノ内某所に開かれたので出席致しました、其時中央の卓に片肘を突いて、一方の手で鼻糞をほじくりながら肥満した大柄な人が頻りに談話しておられました。然かも其談話が揶揄的で殊に是も肥満紅顔の菅原傳氏を向ふに廻して頻りに揶揄して居ります、菅原氏は眞面目に辯解してをるのを不思議に隅の方から見ておつたのでありますが、此人が中島博士と云ふことを初て其時に知つたのであります。

鼻糞で思出した話が、兄が早稻田に居つた頃花見寺にて同郷會があつたので兄が出席し、歸省した折りに其光景の話がありました、其時須藤博士や中島博士が来て居られたので、中島博士つて云ふ人は肥つた偉そうな人で話しながら鼻糞をほじつて居る人であるなど、云ふことを聞いたことがあつたのであります、岳父を初て見たのは仙台學士會の時で、其後もそうした會の時に 1, 2 度見受けたことがあつたのであります。



岳父は御承知の如く他に娛樂がなく仕事をして居るのが、一番の樂しみであつた様であります、それで家に居ると早寝早起であります、8 時か 9 時には床に入つて

居りました、早い時は7時頃のこともあります。私は宵張りの朝寝坊で遊びに行くと10時迄も11時までも喋つてをりますが一晩した岳父は起て来て「まだ居たのか」なんて云ふ位ありました、時には『何時だ、夜が明けたのか』なんて云ふこともあります。

旅行が好きで、之は一方専門の仕事からも旅行が好きであつたのであります。が、私は朝寝坊であるので、岳父は獨り早く起きて散歩に出かけ、私が起る頃には歸つて來るのであります、夫れから私を案内して方々見せて呉れるのでありました。

夏はよく輕井澤に暑を避けてをりましたが、朝早く起きて月見草の咲きみちた野路を散歩するのが常であります。誰か遊びに行くと能く方々案内して呉れました。私が初軽井澤に参りました時は1日に碓氷峠より小瀬の温泉まで行き、歸りは山路を1里も歩いて輕井澤へ歸りました。其後私の家族が参りました時は輕井澤に著いた次の日、沓掛の「グリーンホテル」に行き食事してかへりました、自分も旅行が好きであります。人にも能く案内して呉れました。

冬は熱海が好きで、毎年正月は熱海に行きました。熱海に行つても、誰か行くと必ず梅園や、水道淨水場や、魚觀崎の方まで案内して呉れました。

私が知つてからの旅行は支那に行つたのが長い旅行であります。上海から楊子江を遡つて、漢口まで行つたと記憶しております、支那の内地は初めてなので喜んで行きました。餘り手紙を書かない岳父が方々から繪葉書を呉れました、餘程面白かつたと思はれました、歸りには支那の小鳥を一羽持ち歸つて、暫く大事に飼つておりました。

○

旅行が好きで能く出かけましたが、岳父は「セツカチ」な方で大抵は私より早く停車場に行つてをりました、前の晩から朝にかけて幾度も電話で間に合ふかと云つて來るのです。私の朝寝坊が氣になるのです、世話をすべき若い私の方が世話になる始末で、停車場を出てからも、倅や自動車の世話も自分で岳父はして呉れました。少しでもグズグズしてをると急ぎ立てられて行くのです。夫れは私ばかりでなく、誰と一緒に行つても、皆岳父は自分で金を出して呉れました、一文も遣はせずに旅行をさすのです。大正13年夏に信州の松原湖に遊びに行つた時は森や私共の家族や私共の友人まで行つたので一行10人近くであつたのが、旅費をみな岳父が出して、後で『そんな筈でなかつたが、みな出させられた』と笑つてゐました。

然し私が知つてからの旅行は倅や自動車を多く利用して、登山や長途の歩行は用心してやりませんでした、然し出来る丈け時間を利用して多く見せてやらふとして呉れました、房州廻りに行つた時は北條より鳴川にて一泊し、天津より勝浦にてかへりましたが、清澄には遂に登らずに参りました。

旅行には出来るだけ家族の誰かを連れ出す様にしてゐました、而して宿に著いて同行者の好む物を食はせろと云つた主義で、私などよく夕飯に酒を御馳走になるのでした。宿に著いて夕飯すると「プラプラ」町を散歩し、其土地の名産などをヒヤカしてよく買つたものです。途中などで田舎のお爺などを、つかまえては能く色々な話をして笑つてゐました。其話も時々揶揄的になるのですが、田舎の人に通じないので獨りで笑つてゐました。

途中で色々物を買ふことも好きで、或夏輕井澤に行く時、汽車が大宮と上尾との間の畑中に止りました時、其處の畑に居た百姓を呼んで玉蜀黍や茄子などを買ひ込んだことを覚えております。輕井澤に居つても、散歩に出かけると能く果物などを買つて歸ります。而して誰か他の者が買に行つたのよりも安く買つて來ては自慢して喜んでゐました、「オークション」(競賣)に行つてはよく色々の品物を買ひましたが、西洋人が多くゐるので、親切に色々教へてやつたりしました。

○

讀書は殆ど専門以外のものは新聞位であります。晩年と申して、大正11年頃から能く漢籍を讀んでゐられました。旅行する時鞆に老子や論語を入れて行かれました。輕井澤へも老子など持つて行かれたのを見ました。

専門以外の書を讀むと云ふことは殆ど見ませんので、新聞はよく讀んでをられましたが、漢籍を讀むと云ふことは若い時藩校の養賢堂で學問をした爲めに其方に比較的興味を持つてゐたものと思はれます。夫れに面白いのは入浴すると、すぐ風呂のなかで、詩を吟じてをりました。其詩も大體極つたもので、私のよく聞き覚えてるのは唐詩選にある盧撰が「南樓望」の詩であります。去國三巴遠、登樓萬里春、傷心江上客、不是故鄉人、其他能く詩を吟じてゐました。

英文も小説などは讀まなかつたと思はれます、英文の新聞や雑誌は能く読みました、「ジャパン、アドヴァータイザー」など常に讀んでゐたやうであります。

英語は上手だつたでせう。輕井澤の萬平「ホテル」や鎌倉の海濱院にゐました時能く西洋人と話し、私には解りませんが、冗談など云つて笑つてゐました程です。

「ノート」などをつける時も日本文字より英語の方が便利らしく能く英語でチヨイチヨイ記したものがあります。

読書の序に文字のことになりますが、日本字よりも英語の方は達者に書いたやうであります、日本字は手紙の他殆ど書かなかつた様です、然し力のある堅い字であります。

○

文字を書くことを好まなかつたが、繪も書かなかつたのです。繪を稽古してをつたのは晩年の2, 3年であります、夫れは旅行して方々に行くと宿屋で書畫帳を出されるので大分困つてゐられたやうです。そんなことが動機になつて、蘭などを書くことを稽古してをつたのです、手本は多分齋藤松洲氏の書かれたものと思はれます、松洲氏には娘が稽古に行つてゐた關係であります。

軽井澤では能く蘭の繪を描いてをつたやうです、風呂敷に染めた蘭の繪も軽井澤にて大正13年の夏に描いたものです、誰方も繪を描いたことを不審に思はれた様です、蘭の繪は軽井澤にて描いてをる傍に私の妻と子供とが居つたので其内の1枚を呉れたのであります、夫れに就て拙いが私の歌を御覽に入れます。

軽井澤高原の家に、暑を避けていませんる父の、つれづれのすさびに書ける墨繪の、蘭の繪をしも、われ死なば形見とも見よ、名を書いてやらむといひて、高らかに笑ひましつゝ、いとけなき吾子に取らせし、一ひらの此蘭の繪はよ、み戯れまことなりて、みすさびは形見となりて、見る毎にみ顔どうかぶ、いましたまふ如。

蘭の繪を描き終りて高らかに、

笑へる父の顔の見えれも

たはむれにいひし言葉のいま正に、

形見となれり父が蘭の繪

蘭の他に墓だの色々なものをチヨイ、チヨイ書いた様ですが、動機が動機だけに、それ程熱心に稽古もしなかつたのであります。

○

芝居とか、音楽とかには一向趣味を持ちませんでした。偶々芝居などに誘つてもあまり好まなかつたのです。何うしても芝居に行かなければならん様な時は行きましたが、私どもが一緒に行く時などは早く芝居の筋書を話さんと面白味を感じなか

つた様です。芝居も長くなると居眠りをする方でした。然し雲右衛門の浪花節は好きで、能く子供等を連れて行つたそうです。

雲右衛門の浪花節に次で呂昇の義太夫が好きで、有樂座の名人會には、よく子供等を連れて行つたそうです。

寄席は若い頃は好きであつたが、汚いので行かなくなりました、それに林町に引き移りましてから遠くなつたので猶ほ行くことがなくなりました、講談や落語の様な聞いてをつても解り易いものは好きであつたのです。

○

遊びとして碁は打ちませんでしたが、或は打つたかも知れませんが、私どもは見たこともなかつたのです。将棋は少しやりました。元來が敗け嫌ひなので、私どもを敗かしちや喜んでゐました、一夏私の處が俱樂部の様に近所の方々が3, 4人集まつて毎晩将棋を指したことがあります、大正11年頃と思つてをります、其時夜分よく遊びに見えて将棋を指しましたが、金子君は将棋が強いので仲々金子君とは指さなかつたが、或夜金子君と1, 2度指して勝つたので笑つて其まゝ指さなかつことがあります。

其他の遊びと云ふ遊びは何もやらなかつたやうです。遊びはないが自轉車には若い時上手に乗つたと云ふことです。

○

岳父は小鳥が好きで金糸鳥、紅雀、文鳥などを一時飼つたことがあります、庭の隅に立派な鳥小屋を造つて飼つてをりましたが、或る夏蛇にとられたり其他のことで落ちたので、後は全く止めました、支那に行つた歸りには何んと云ふ名か雲雀に似た鳥を一羽大事に持ち歸つて暫く飼つてをりました。

小鳥の名をよく知つてをり、其啼き聲も亦よく知つてをりました、軽井澤などであの鳥は何んだと云つて教へて呉れました、そして啼き真似をしてをつたりしました。

犬も嫌ひではなかつたでせうが、若い時から猫は好きであつたと云ふことです、然し私が知つてからは飼はなかつたやうです。

草花や樹木も好きで、屋敷のうちに澤山植ゑてをりましたダリヤ、牡丹菊などは裏庭に植木屋に作らせて樂んでをりました。

○

食物の嗜好から云ひますと、勧めより歸り家で家族と共に味噌汁で暖かな御飯を食ふのが一番樂しかつた様です、味噌汁は好きで、仙台の芋の子汁の話などよくしてをりました。

日本料理もよく食べましたが、多くは洋食を好みました、外出などすると能く途中で洋食を食べました天ぷら、鰻、壽し、何んでも好きであつたのです。支那料理もよく食べた様です一緒に食事などしてると、亞米利加の「ビーフテーキ」の大きい話など、よく聞かされました、それに子供の時分の納豆や何かの甘かつた話などよくしてをりました、それに家族と一緒に洋食や支那料理などを食ふ時は能く世話をされて、御馳走などを皿に取つて呉れました、大正 14 年 1 月末に私の家で親戚が集つて、支那料理を食つたことがあります、其時は非常に愉快であつた様で子供等に皿を出させ、よく取り分けてやつたりしてをりました、側に居た私も皿を出すと「君は自分で取れ」と笑つてゐられたことがあります。

毎年暮になると、よく鴨や雉子などを貰ふことがあります、すると夕方歸つて鳥の料理にかかる、上手でもあつたが好きでもあつたので「これまで俺が料理した、後はみんなでやれ」とよく云つてをりました。

○

洋服の縞柄や仕立の格好などやかましい方で、これは西洋に長くをつた爲めでありませうが私共など、違つて其邊は吟味したものであります。

和服も同様で良い品、多くは大島を好みキチンとした服装を好みました、襦袢から上衣までキチンと揃はぬと氣に入らぬ風でした。

晩年は着てをつて樂だから洋服よりも和服を好みました、散歩などに、よく和服で出かけました、衣服のみでなく、凡て持つ物は上等なものでキチンとしたものを好みました、ダラシがないと云ふことは何事にでも嫌いだつたのであります。

○

來客があつて、話が長くなると、よく指の尖で机をトントン叩きました。話に飽きたと机を叩くのです、然し客を嫌ふのではなく、相應に人と應待をいたしますが唯だ長くなつて話がなくなるとやるのです。思ひ出すまゝに断片的に記しましたので何も、まとまつてはおりませんです。

~~~~~

## 附 錄

## 中島博士記念事業顛末

大正 14 年 2 月 17 日中島工學博士薨去せらる。當時通夜に參集せる有志の間に、博士生前の功績を記念する何等かの事業を企畫すべしとの議起り、其實行には追て日を期し、普ねく有志の相談會を開催すべきことゝなせり。翌月 16 日有志 17 名は帝國鐵道協會に集合して第 1 回の相談會を開き種々論議の末、博士が生前我國の水道史として一貫したる文獻なきを遺憾とせられ之が編纂の意圖あり、親ら其資料を蒐集せられたる事實ありしこと、並に遺族に於ても之が完成を切望せられつゝあるの事情等に鑑み、且つ終始斯業のために盡瘁貢獻せられたる故博士の記念事業としては本邦水道史の編纂より剝切なるものはなかるべしとの意見に一致し、とりあへず委員 7 名を擧げ其實行方法を攻究することゝなれり。是に於て委員等は數次會合を催し凝議の結果、

1. 水道史の名稱を「中島工學博士記念日本水道史」とすること。
2. 本水道史には本邦に於ける上下水道一切を網羅すること。
3. 本史は四、六、二倍版として約 600 頁、圖面は別冊として約 150 枚を添付すること。
4. 事業資金は一般有志より募集すること。

以上 4 項を議決し更に本事業の完璧を期するが爲めに、先輩諸賢の意見を徵し参考に資すると共に發起人の範囲を定むる爲め 5 名の委員を擧げ専ら其衝に當らしむることゝせり。斯くて委員等は古市男爵を始めとし日下部、廣井、俵、吉村、中山、須藤、近藤等の各博士を歴訪して本事業の趣意を述べ贊助を仰ぎたるに、何れも快諾せられたるを以て發起人の豫選を行ひ古市男爵外 23 名の連名を以て書状を發送し其承諾を求めたるに幸ひ 481 名の贊同を得たり。茲に於て發起人中より 60 名の實行委員を推薦し、大正 14 年 7 月 3 日第 1 回實行委員總會を帝國鐵道協會に開催せり、席上島重治君を座長に推し、茂庭委員より本會創立以來の経過報告ありて、直ちに議事に入り實行委員規程案を附議し後記の通り可決せり、仍て該規程に従ひ正副委員長の互選に移り

委員長に 古市男爵

副委員長には 吉村、中山の兩博士

を満場一致を以て推戴し承諾を得たり、次で委員長より下記の通り常務委員 16 名の指名あり、尙別項所載の資金募集文案並豫算案等を附議し何れも原案を可決し爰に全く本事業著手の準備行為は整ふに至れり。

本會常務委員(五十音順)

|        |        |        |       |
|--------|--------|--------|-------|
| 小川織三君  | 小野基樹君  | 岡田卯之助君 | 大堀佐内君 |
| 金井彦三郎君 | 河口協介君  | 草間偉君   | 齋藤久孝君 |
| 島重治君   | 那須章彌君  | 西大條覺君  | 伴宣君   |
| 堀江勝巳君  | 茂庭忠次郎君 | 米元晋一君  | 和田忠治君 |

第1回實行委員總會に先ち大正 14 年 5 月 3 日本會事務所を神田區田代町 6 番地に設置し(後大正 15 年 4 月之を土木學會事務所に移す)三瓶泰造外數名を本會職員に囑託して諸般の事務に從事せしめ同年 7 月 10 日より事業資金の募集に着手し本事業の趣意書(後記)を配付したるに賛同して資金を釀出せられたる有志 941 名其金額 22,427 圓に達したり(賛同者芳名は別項記載の通りなり)。因に記す中島博士の遺族よりは當初資金の内へ金 2,000 圓を提供せられたるを以て本事業初期の經費支辨に充つることを得たり。

常務委員等は毎週金曜を以て集會日とし夫々其定めたる分擔に従ひ資料の蒐集に努めたるも、往年の大震火災に罹り内務省其他に於ける公私文書類の大半は鳥有に歸したる爲め新に之を求めざるべからざるに至り其範圍の如きも遠く臺灣、朝鮮、南滿洲及び支那等に亘るもの渺からざりしを以て資料の蒐集意の如く成らず實に豫想外の日子を費したり、然れども大正 15 年に入るに及び資料蒐集は略完了したるを以て同年 3 月常務委員中より更に下記 8 名の編輯委員を擧げ以て事業の促進を期したり。

編輯委員(五十音順)

|       |        |       |        |
|-------|--------|-------|--------|
| 小野基樹君 | 金井彦三郎君 | 河口協介君 | 草間偉君   |
| 那須章彌君 | 西大條覺君  | 伴宣君   | 茂庭忠次郎君 |

編輯委員は何れも本職を有し劇務の傍ら孜々編輯に從事し資料の取捨撰擇に努め其不備なるものに就ては更に各關係公衙に照會して其缺を補ふ等一切の手段方法を盡し昭和 2 年 6 月に入り漸く本史編輯の業了はることを得 印刷の業も此の間に進行して 8 月上旬成り直に配本に着手する事となせり。

是より先本事業漸く結了の期近けるを以て實行委員規程第 7 條に依る在京委員總會を 6 月 24 日を以て東京ステーションホテルに開催し、中山副委員長議長席に着き茂庭委員より事業經過を報告し、那須委員より會計狀態並に爾後の收支豫算を報告し何れも之を承認したり。

次て次記議案を附議し夫れ夫れ審議の上可決したり。

- 1.) 水道史の記念出版部數を 1,300 部として別表(略)の標準により配本すること。
- 2.) 學生技術家其他一般より分譲を希望するものある可きを考慮して此際工政會出版部をして 500 部を増刷せしめ、其責任を以て發賣せしむること。
- 3.) 本年 9 月の交を期し中島博士墓前に本事業終了の奉告式典を舉ぐること。
- 4.) 紙型、凸版及殘資料を草間大學教授の手により東京帝國大學内に保管すること。
- 5.) 決算及殘務整理一切を擧げて委員長、副委員長及常務委員に一任すること。

尙 2,3 の希望條項の決議ありて之れを委員長の手許にて處理することとし總會を了え、記念寫真(次葉)を撮して晚餐を共にして散會せり。(其後の處理に就ては尙進行しつゝあれば 9 月舉行さる可き墓前報告祭に於いて爲さるべし。)

前陳の如く資材の蒐集に意外の日子を費したる爲め計らずも出版期日の遷延を來し賛同諸賢の期待に背くこと永かりしと雖、其他に至りては事順調に進行し茲に本史の刊行を實現し以て我國文化に若干を寄與することを得るに至りしは全く同慶に堪へざる所にして、之元より賛同各位の協力援助に依ること勿論なるも、又以て故博士遺徳の然らしむる所に因らずんばあらざる也。

尙本事業に從事したる職員次の如し。

|          |         |         |
|----------|---------|---------|
| 主事 三瓶泰造  | 囑託 山下辰也 | 囑託 大宮利郎 |
| 囑託 北村嘉太郎 | 助手 山川陸三 | 助手 平塚恭橋 |
| 以上       |         |         |

(後記ノ 1 )

### 趣 意 書

拜啓時下愈御清康之殷奉慶賀候

陳者 東京帝國大學名譽教授土木學會長工學博士中島銳治君 去 2 月 17 日薨去せられ候處博士は御承知の通我邦水道界に於ける先覺者として將又權威者として久しう後進を薰陶せらるゝと共に東京市を始め各地の上下水道計畫に參與せられ、其大半は實に博士の指導に依りたるものにして博士が社會に貢獻せられたる功績寔に多大なりと被存候、薨去の今日何か記念事業を營み度不肖等寄り々協議致居候處偶々博士生前の記録により各地水道の要領を編纂せられんとする希望ありしを發見致し候。就ては其遺志を繼承し、日本水道史を編纂するを以て博士に對する絶好の記念事業と信じ候本業は自然又後昆を利益するの公益事業とも相成る可きに付弘く資金を募り事業の遂行を企圖致し候間何卒御贊同の上、左記要項に依り御出資仰ぎ度此段御依頼申上候 敬具

大正 14 年 7 月 日

中島博士記念事業會  
發起人總代

公長三  
市村山秀  
古吉中  
爵男  
長員委  
同副員委

## 要項

1. 水道史編纂、配本並に寄附金の處分に就ては實行委員に御一任相顧ふ事。
  2. 御送金は大正 14 年 9 月 30 日迄の事。
  3. 御送金先は東京市神田區田代町 6 中島博士記念事業會内茂庭忠次郎宛(振替口座東京 72,423 錄)
  4. 御送金は成る可く振替口座を御利用下され度事。
  5. 御送金に對しては一ヶ領此書を差出し申べき事。

## 附 記

日本水道史内容は大體次の目次(目次省略)に據り記述致し四、六、倍版の本文約600頁、四、六四倍版の附圖150枚の2冊(實費10圓位)を刊行の見込に候。

(後記、2)

## 中烏博士記念事業會實行委員規程

# 第1條 小島博士記念事業會=左ノ實行委員ヲ置ケ

委員長 1名 副委員長 2名 委員若干名

第2條 委員長及副委員長ハ實行委員總會ニ於テ之ヲ互選ス

### 第3條 委員長へ記念事業ヲ綜理ス

副委員長ハ委員長ヲ輔佐シ委員長事故アルトキハ之ヲ代理ス

#### 第4條 委員ハ左ノ事項ヲ分掌ス

1. 編纂資料ノ蒐集及選定 = 關スル事項
  2. 編纂方法ノ決定 = 關スル事項
  - 3 資金ノ募集 = 關スル事項
  4. 豊算決算及會計報告 = 關スル事項
  5. 企品出納保管 = 關スル事項
  6. 製本様式及裝幀 = 關スル事項
  7. 出版配本 = 關スル事項
  8. 事業ノ經過記錄及事務ノ整理 = 關スル事項
  9. 其他編纂及庶政 = 關スル事項

第五條 實行委員、委員會、黨務幹事會指名。

第 6 條 實行委員、委員會の附屬有下者、  
當務の時々集合シ會議ヲ協議當理ス

第六條 實行委員は附屬ノ職員若干名ヲ置き事務ニ從事セシム

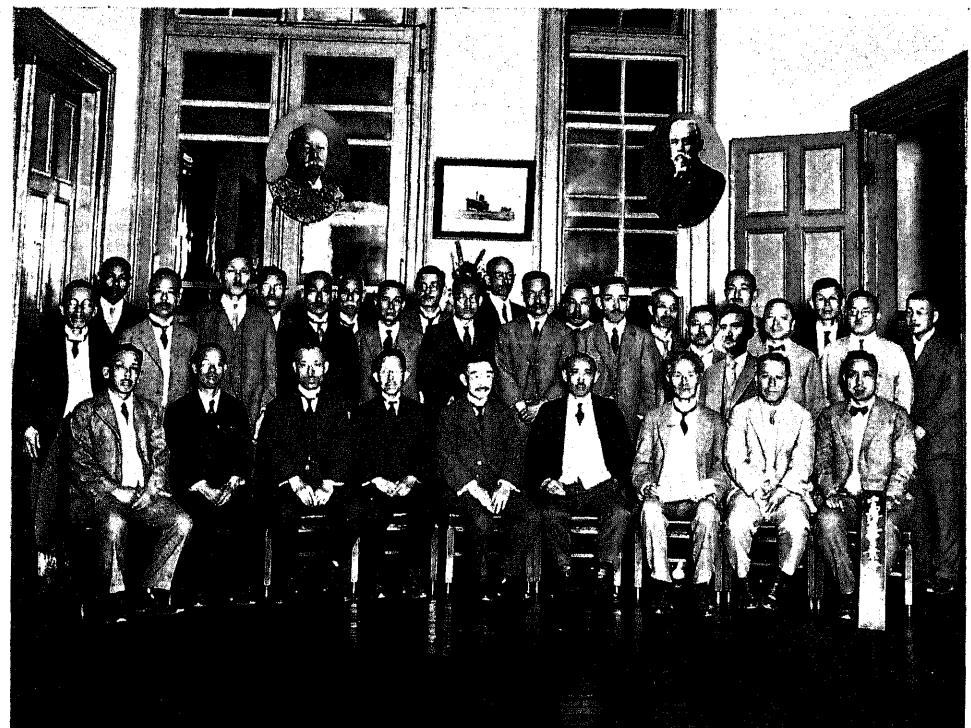
附 雜

第7條 左ノ事項ハ在京委員總會ノ議決ヲ經テ之ヲ定ム

1. 資金募集方法
  2. 配本方法
  3. 豊算、決算、及其經理方法
  4. 其他重要ナル事項

三

在京實行委員總會(第二回)記念(昭和2年6月24日)



後列右端ヨリ

前列右端ヨリ

|      |         |       |        |      |       |
|------|---------|-------|--------|------|-------|
| 實行委員 | 中桐春太郎君  | 常務委員  | 大堀佐内君  | 編輯委員 | 那須章彌君 |
| 實行委員 | 武田侃     | 式君    |        |      |       |
| 同    | 丹治經     | 三君    |        |      |       |
| 編輯委員 | 小野基樹君   | 編輯委員  | 伴      | 宣君   |       |
| 同    | 河口協介君   |       |        |      |       |
| 實行委員 | 阿部勢君    | 實行委員  | 中村幸之助君 |      |       |
| 編輯委員 | 金井彦三郎君  | 編輯委員  | 茂庭忠次郎君 |      |       |
| 同    | 草間偉君    | 副委員長  | 中山秀三郎君 |      |       |
| 實行委員 | 金子源一郎君  |       |        |      |       |
| 同    | 野口廣衛君   |       |        |      |       |
| 同    | 衣斐清香君   |       |        |      |       |
| 同    | 原全路君    |       |        |      |       |
| 編輯委員 | 西大條覺君   | 實行委員  | 那波光雄君  |      |       |
| 實行委員 | 井上二郎君   | 常務委員  | 島重治君   |      |       |
| 同    | 池田圓男君   | 島     |        |      |       |
| 同    | 井上秀二君   | 重     |        |      |       |
| 同    | 樺島正義君   | 治君    |        |      |       |
| 同    | 牧野雅樂之丞君 |       |        |      |       |
| 常務委員 | 小川織三君   | 常務委員  |        |      |       |
| 主事   | 三浦泰造君   | 和田忠治君 |        |      |       |
| 實行委員 | 尾崎利中君   |       |        |      |       |

(後記ノ3)

## 中島博士記念事業豫算

| 收 入        | 支 出         |
|------------|-------------|
| 金 20,000 圓 | 事 務 所 費     |
| 一般寄附金      | 金 3,000 圓   |
|            | 人 件 費       |
|            | 金 3,000 圓   |
|            | 印 刷 及 製 本 費 |
|            | 金 12,500 圓  |
|            | 豫 備 費       |
|            | 金 1,500 圓   |
| 計 20,000 圓 | 計 20,000 圓  |
| 總 收 入      | 總 支 出       |

## 中島博士記念事業資金寄附芳名(五十音順)

◎は實行委員 ○は發起人

## あ の 部

| (円)       | (円)      | (円)      | (円)         |
|-----------|----------|----------|-------------|
| 20 阿川重郎   | 10 阿部一郎  | 10 阿部謙夫  | 20 阿部勢      |
| 10 阿部露満   | 20 阿部美樹志 | 10 安藤杏一  | 20 安久津成雅    |
| 20 安部強    | 10 安部邦衛  | 20 安部源三郎 | 10 安達義男     |
| 20 安東功    | 10 安西榮太郎 | 10 安西景一郎 | 10 アガロ鐵工場   |
| 10 青木治助   | 5 青木保    | 20 青木元五郎 | 10 青木盛之     |
| 20 青戸信賢   | 10 青崎秀雄  | 10 青野隆次  | 10 青山成脩     |
| 10 青山士    | 20 淺野總一郎 | 50 株式會社  | 10 浅野セメント會社 |
| 10 浅見洋    | 20 浅見忠治  | 10 浅岡維四郎 | 20 有光菟茂喜    |
| 100 新井榮吉  | 20 荒井泰治  | 20 荒池忠吉  | 15 荒木文四郎    |
| 10 荒川孫右衛門 | 10 荒巻熊五郎 | 10 足立正人  | 10 雨宮弘一     |
| 10 麻生七郎   | 10 赤尾省三  | 10 芥川均一  | 10 畑田長保     |

## い の 部

|             |         |          |          |
|-------------|---------|----------|----------|
| 50 井上秀二     | 30 井上二郎 | 25 井上範   | 20 井上親雄  |
| 10 井上伊次     | 5 井上國助  | 20 井上廣居  | 15 井口庵象  |
| 20 伊地智三郎右衛門 | 20 伊藤誠吉 | 20 伊藤覩   | 10 伊藤仁太郎 |
| 10 伊藤順三     | 10 伊藤實  | 10 伊藤德太郎 | 10 伊藤祐一  |
| 10 伊藤通敬     | 5 伊藤常夫  | 3 伊木常誠   | 10 伊川重良  |
| 20 伊澤平左衛門   | 10 飯島一郎 | 10 飯島馨之助 | 10 飯高新   |
| 12 飯村保三     | 30 池田圓男 | 25 池田顯三郎 | 20 池田篤三郎 |
| 10 池谷庫吉     | 10 池田勝藏 | 20 池邊稻生  | 20 石井顕一郎 |
| 20 石井一夫     | 20 石井淳雄 | 10 石井泰助  | 10 石井恒夫  |

|                 |                  |                         |          |
|-----------------|------------------|-------------------------|----------|
| 15 石川眞三         | 15 石川鼎           | 10 石川貞利                 | 10 石川治平  |
| 5 石川源二          | 30 石尾積           | 15 石下朝重                 | 10 石田熊治郎 |
| 10 石田清          | 15 石黒弘毅          | 12 石崎貞二郎                | 5 石橋絢彦   |
| 高松市長<br>50 石原留吉 | 横須賀市長<br>20 石渡坦豊 | 10 市江良雄                 | 20 市川作太郎 |
| 5 市來尚治          | 20 市瀬恭次郎         | 10 今井彦三郎                | 12 今井哲   |
| 20 今泉茂松         | 10 今村謙輔          | 10 今村貫三                 | 5 今村眞護喜  |
| 5 今村文吉          | 20 今中權六          | 10 岩井宇一郎                | 10 岩井芳通  |
| 20 岩田成實         | 20 岩田靄市          | 20 岩崎富久                 | 20 岩崎彌太郎 |
| 10 岩崎瑩吉         | 15 岩片三恵吉         | 10 岩隈儀一郎                | 10 岩住良治  |
| 10 磯山米藏         | 10 磯海國吉          | 10 乾慶藏                  | 10 生駒勇   |
| 10 稲延利兵衛        | 10 稲垣甚           | 20 稲葉愿                  |          |
| う の 部           |                  |                         |          |
| 10 宇田健二郎        | 20 宇佐美勝夫         | 20 植木平之允                | 20 植村倉藏  |
| 15 上田研介         | 10 上空峯五郎         | 3 上野節夫                  | 20 牛島航   |
| 10 内田祥三         | 5 内田莊一           | 10 内山廣三                 | 10 内山新之助 |
| 10 内丸最一郎        | 10 梅津清中          | 10 梅田興市                 | 20 梅野實   |
| 10 海野照治         | 10 海野好文          | 100 氏家信                 | 10 氏家時   |
| 15 鵜飼賢一         | 15 白井定民          |                         |          |
| え の 部           |                  |                         |          |
| 10 江澤甚一         | 100 菊原製作所        | 10 江崎義人                 | 20 海老塚肅  |
| 15 海老島定吉        | 20 衣斐清香          | 10 鹽谷五郎                 | 10 遠藤寅二  |
| お の 部           |                  |                         |          |
| 100 小川織三        | 20 小川梅三郎         | 15 小川敬次郎                | 10 小川昌光  |
| 10 小川東吾         | 10 小川清吉          | 15 小川誠耳                 | 10 小田川全之 |
| 10 小貫義之介        | 20 小野榮作          | 50 小野基樹                 | 10 小野房若  |
| 10 小野義治         | 15 小澤進           | 15 小原光信                 | 10 小原興   |
| 5 小山泰交          | 5 小山三郎           | 20 小見喜平                 | 10 小見清江  |
| 10 小山清孝         | 5 小笠原嘉兵衛         | 20 尾崎利中                 | 10 尾崎行雄  |
| 10 尾形福平         | 10 尾島貞治          | 10 尾内庄吉郎                | 40 大井清一  |
| 20 大井治男         | 10 大川傳吉          | 20 大藏公望                 | 50 大倉栄馬  |
| 10 大串榮太郎        | 10 大島太郎          | 江戸川上水町組合管理會<br>300 大島享藏 | 20 大口章次  |
| 10 太田圓三         | 12 太田竹次郎         | 5 太田靜馬                  | 10 太田黒宣三 |
| 10 大竹邦平         | 10 大根文彦          | 10 大根龍治                 | 10 大根源八  |
| 15 大塚藤十郎        | 10 大寺廣           | 10 大野廣吉                 | 10 大野健明  |
| 10 大野繁雄         | 10 大鹽政治郎         | 10 大町信                  | 10 大西進   |

|           |           |          |              |
|-----------|-----------|----------|--------------|
| 5 大河内甲一   | 10 大村四郎   | 20°大藤高彦  | 20°大堀佐内      |
| 5 大森治一郎   | 10°大須賀巖   | 20°奥澤耕造  | 10 奥田宗一      |
| 10°奥山龜藏   | 10 沖一誠    | 20°岡胤信   | 15°岡百世       |
| 10 岡崎正伸   | 20°岡崎平三郎  | 54°岡田卯之助 | 20°岡田竹五郎     |
| 20°岡村利重   | 10 岡本堅治   | 10 岡部三郎  | 12 岡部喜三郎     |
| 15 萩原基治   | 50°篠島桂太郎  | 10 折原佐十郎 | 10 落合忠雄      |
| かの部       |           |          |              |
| 10 加賀山學   | 20°加藤興之吉  | 10 加藤直次  | 20 加藤通綏      |
| 20°加藤傳七   | 10 加藤徳太郎  | 10°加茂正雄  | 10°加茂能二      |
| 10 加護谷祐次郎 | 100 鹿児島市  | 50°鹿島精一  | 20°鹿又武三郎     |
| 100 鹿又武三郎 | 20°勝又愛次郎  | 20°勝俣英吉郎 | 10 勝呂正吾      |
| 50°金井彥三郎  | 21°金子魁一   | 20°金子寛   | 30°金子源一郎     |
| 10 金古久次   | 20°金森鐵太郎  | 10 金森誠之  | 10°金澤孝助      |
| 10 鎌ヶ江忠吾  | 20°川合爲吉   | 20°川上新太郎 | 10°川上國三郎     |
| 30°川上浩二郎  | 20°川口虎雄   | 5°川越篤    | 10 川本喜代治     |
| 32°川崎參一郎  | 12 川崎兼信   | 30°河口協介  | 10°河窪五月      |
| 10°川副清治   | 20°河野愛香   | 3 河野誠    | 10°河原常吉      |
| 10 片野文吉   | 10 片野源一   | 5°片桐兼次郎  | 20°片山貞松      |
| 10 片田務    | 15°掛札季藏   | 10 篠井斌治  | 20°景山質       |
| 5°桂辨三     | 5 桂川輝長    | 10 香坂兼夫  | 10°柿澤信義      |
| 54°龜井重麿   | 10 龜田素    | 20°菅良二   | 10 菅野喜市      |
| 10 神原信一郎  | 12 上崎修一   | 50°上村盛治  | 100°磯島正義     |
| 10 蒲孚     | 10 蒲生正徳   | 10 納谷藤次郎 | 20°榧木寛之      |
| 20°門野重九郎  | 25°葛西萬司   | 20°笠井愛次郎 | 300 釜石礦山株式會社 |
| きの部       |           |          |              |
| 20°木津正治   | 20°木村二郎   | 20 木村匡   | 20°木村剛       |
| 5 木村恵吉郎   | 20°木代嘉樹   | 12 菊地忠藏  | 15°菊地英彦      |
| 20°橋川司亮   | 20°橋川米治   | 20 君島八郎  | 20°北澤忠男      |
| 10 紀平兼三郎  |           |          |              |
| くの部       |           |          |              |
| 10 久保武比古  | 15 久保茂    | 10 久保謙   | 300 久保田鐵工所   |
| 20°窟谷逸次郎  | 10 久門雄二   | 10 草刈均   | 50°草間偉       |
| 20°日下部辨二郎 | 15°黒河内四郎  | 20°黒澤準   | 15 黒須七郎      |
| 11 黒宮富四郎  | 20°熊谷直道   | 10 熊野久作  | 50 熊本市       |
| 10°國澤新兵衛  | 200 栗本鐵工所 | 50 吳市    | 10 来島良亮      |

|          |           |           |           |
|----------|-----------|-----------|-----------|
| 10 楠田謙三  | 20 櫛引孝一   | 20°藏重哲三   | 100°倉塚良夫  |
| と の 部    |           |           |           |
| 10 小島敬三郎 | 10°小島米助   | 10 小菅勝太郎  | 20 小西正二   |
| 20°小西隆   | 10 小松徳三郎  | 20 小松七郎   | 20°小溝茂橋   |
| 10 小幡平吉  | 12 児玉保    | 10 國分浩    | 20°後藤運平   |
| 20°後藤佐彦  | 5 後藤新     | 20°後藤新平   | 10 後藤仲藏   |
| 20°後藤季總  | 10°近新三郎   | 5 近藤光之    | 30°近藤俊治郎  |
| 20°近藤仙太郎 | 15 工政會    |           |           |
| き の 部    |           |           |           |
| 19 佐々木政吉 | 20°佐々木寅三郎 | 10 佐々木恒太郎 | 20 佐々木哲二  |
| 10°佐々木基  | 10 佐藤岩治   | 10 佐藤幸水   | 100°佐藤幸三郎 |
| 15 佐藤長太郎 | 25°佐藤徳太郎  | 10 佐藤志耶   | 16 佐藤東次郎  |
| 10 佐藤利恭  | 10 佐藤正興   | 21°佐藤昇    | 10 笹野正人   |
| 10 笹森光輝  | 50°佐野藤次郎  | 15°佐野秀之助  | 10°佐野利器   |
| 10 佐伯利吉  | 10 齋藤伊吉   | 20°齋藤英夫   | 20°齋藤研一   |
| 10 齋藤泰   | 15°齋藤庄三   | 20°齋藤七五郎  | 10°齋藤四郎   |
| 10 齋藤靜脩  | 50°齋藤久孝   | 50°齋藤實    | 30°坂本助太郎  |
| 20°坂本鉄之助 | 25°坂本丹治   | 3°坂本一平    | 20°坂出鳴海   |
| 20 坂口安彦  | 10 阪谷芳朗   | 10 坂田昌亮   | 15 坂牛義任   |
| 10 酒井鐵二郎 | 10 酒井佑次   | 10 櫻井嘉吉   | 10 櫻井辰造   |
| 10 櫻田壽   | 10 西海留五郎  | 20°作間餘三郎  | 20°眞田秀吉   |
| 25°澤井準一  | 10 鮫島茂    | 10°三宮幸得   | 10°三瓶泰造   |
| し の 部    |           |           |           |
| 20°清水一徳  | 10 清水金吉   | 20 清水熙    | 10 清水賢雄   |
| 10 清水幸次郎 | 20 清水槌太郎  | 10°清水新吉   | 20°清水増太郎  |
| 10 清水米吉  | 50°島重治    | 20°島崎孝彦   | 10 篠原國憲   |
| 10 篠崎安次郎 | 5°志賀潔     | 10 志村虎雄   | 10 芝崎孝太郎  |
| 10 濱谷體藏  | 10 濱谷信太   | 10°濱江武    | 20°柴田耕造   |
| 20°柴山爲治  | 10°生野園六   | 5 庄野卷治    | 15°新聞壽之助  |
| 15 新海榮一  | 10°斯波忠三郎  | 30°白石元治郎  | 12 城野新三郎  |
| 20°鹽釜町長  | 10 下浦眞清   | 200 十文字俊夫 |           |
| す の 部    |           |           |           |
| 15 杉廣三郎  | 30 杉江嘉左衛門 | 30°杉浦宗三郎  | 20°杉浦文市   |
| 20°杉崎峰吉  | 10°杉谷幸蔵   | 20 杉原榮三郎  | 10 杉山榮    |
| 10 杉山延吉  | 10 杉木宗二郎  | 20°鈴木格吉   | 10 鈴木辰雄   |

|          |                 |             |          |
|----------|-----------------|-------------|----------|
| 20°鈴木富太郎 | 10 鈴木佳一郎        | 10 鈴木清次郎    | 10 鈴木 彰  |
| 10 鈴木昌太郎 | 10°鈴木重英         | 30°鈴木坂鐵     | 10 鈴木善八  |
| 20°鈴木久夫  | 15 鈴木秀彦         | 25°菅原恒覽     | 20°菅原通敬  |
| 10°菅原 傳  | 10 菅原正志         | 20 須賀藤五郎    | 20°須藤義衛門 |
| 20 須山英次郎 | 300 関田川精鐵所      | 10 諏訪頼道     |          |
| せの部      |                 |             |          |
| 20°關 一   | 100 大阪市長<br>關 一 | 50°關 肇      | 20°關 信雄  |
| 10 關口秀一  | 10 關塙作太郎        | 20°關谷新造     | 30°仙石貢   |
| そ の 部    |                 |             |          |
| 20°曾我長二郎 | 20°曾山親民         | 5 曾稱達藏      | 10 曾根田又雄 |
| たの部      |                 |             |          |
| 20°多賀奈良吉 | 40°田島壹號         | 20 田島勝太郎    | 10 田島真吉  |
| 10°田中寅男  | 30°田中三郎         | 20°田中 豊     | 10 田中豊輔  |
| 20 田中長吉  | 15 田中正夫         | 10 田中鑑      | 10 田中博男  |
| 20°田阪千助  | 200 田阪千助        | 30°田村啓三     | 10 田村貞吉  |
| 25°田村丕顯  | 20°田邊朔郎         | 20°田邊良忠     | 10 田部彥八郎 |
| 20°田口俊一  | 10°田寺元治         | 12 田淵壽郎     | 20 高石庫治  |
| 12 高木信次郎 | 10°高城琳藏         | 15 高橋仁作     | 10 高橋 良  |
| 10 高橋久壽男 | 10 高橋正安         | 10 高橋順平     | 20°高橋虎太  |
| 10 高橋經德  | 20 高橋圓蔵介        | 20°高橋義比     | 10°高橋義比  |
| 30°高橋嘉一郎 | 15 高橋甚也         | 30 高梨耕幣     | 20 高谷武助  |
| 10 高田善藏  | 10 高田 景         | 10 高坂淺吉     | 10 高良末綱  |
| 15°高山武次郎 | 20°竹内季一         | 20°竹内理一     | 20°竹中二郎  |
| 10 竹羽秀吉  | 15 竹侯一郎         | 5 武居軍次郎     | 10 武居高四郎 |
| 30°武市彰一  | 20°武田侃式         | 20 武田富吉     | 3 谷口廣三   |
| 10 谷口清三郎 | 20°谷井銅三郎        | 30 玉川水道株式會社 | 10 玉國光太郎 |
| 10 玉木寅彦  | 20°玉蟲一郎一        | 20°俵 國一     | 20°丹治經三  |
| ちの部      |                 |             |          |
| 20°千葉利智  | 10 千葉 進         | 10 千葉悟樓     | 10 千原喜三郎 |
| 20°中鉢美明  | 10 中條精一郎        | 150 チヨイント商會 | 10°調所武光  |
| 10°辻塙保三  |                 |             |          |
| つ の 部    |                 |             |          |
| 10 津留繁雄  | 12 月成鼎輔         | 10 堤 格三     | 10 次田茂龜  |
| 10 坪田嘉平治 | 20°土田鐵雄         | 20°土谷金次     | 50 植田工作所 |

|                   |                                      |                 |                    |
|-------------------|--------------------------------------|-----------------|--------------------|
| 10 筒井丑太郎          | 20°鶴見一之                              | 10 塚本靖          | 10 築井萬壽治           |
| て の 部             |                                      |                 |                    |
| 10 手塙 善           | 10 寺田悌                               | 10 寺田健三         | 10 寺島琢治            |
| と の 部             |                                      |                 |                    |
| 20°戸板文記           | 10 戸谷亥名藏                             | 20°土井良太郎        | 10 土井林吉            |
| 15°徳田文作           | 15 徳永保喜                              | 10 徳永泰人         | 20°豊島 愿            |
| 20°豊島二郎           | 12 豊田源一郎                             | 10 富田龍一郎        | 10 富永正義            |
| 10 富澤・潔           | 25°友成仲                               | 15°遠矢龜吉         | 20°遠山椿吉            |
| 50 東洋陶器株式會社       | 10 時松至                               | 15°殿谷良作         | 20°飛山昇治            |
| な の 部             |                                      |                 |                    |
| 50°那須章彌           | 20°那波光雄                              | 20°奈良茂樹         | 20°内藤直             |
| 10 内藤多仲           | 20°中川 皇                              | 10 中川實          | 20°中川吉造            |
| 10°中川幸太郎          | 2,000 中島清夫                           | 30 中島周平         | 24 中島家             |
| 20 中島洋吉           | 10 中島麟太郎                             | 30°中村是公         | 1,000 東京市長<br>中村是公 |
| 50°中村幸之助          | 20°中村孫一                              | 15 中村秀太郎        | 20°中村俊清            |
| 50°中村俊清           | 10 中村謙介                              | 10 中村謙一         | 10 中村直諒            |
| 10°中村徳重郎          | 5 中村達太郎                              | 50°中山秀三郎        | 10 中山今朝治           |
| 10°中山熊雄           | 10 中原藤一郎                             | 10 中原 武         | 20°中原貞三郎           |
| 20°中隈伊勢吉          | 300 チヨウチケント合社<br>レキボロ父子会社代表<br>中西鉄太郎 | 10 中西謙平         | 15 中田修             |
| 10°中倉信之           | 100 中野同子                             | 10 中谷繁治         | 10 中家嘉一郎           |
| 10°中塙一郎           | 25°中桐春太郎                             | 10 仲山金治         | 5 仲村幾夫             |
| 50°仲田聰治郎          | 10 長澤達                               | 10 長野拓          | 20 長野宇平治           |
| 10°長尾悌次           | 3 長尾正元                               | 20°永井專三         | 10 永井純一            |
| 10°永原四郎           | 10 永田豊作                              | 10°永田兵三郎        | 25°永山彌次郎           |
| 10°永矢三郎           | 300 永瀬庄吉                             | 50°直木倫太郎        | 20°南部常次郎           |
| 5°生江孝之            |                                      |                 |                    |
| に の 部             |                                      |                 |                    |
| 15 二木重吉           | 10°二宮哲三                              | 20°丹羽勤彦         | 32°丹羽重光            |
| 5 西義一             | 20°西池氏文                              | 20°西尾常彦         | 15°西尾辰吉            |
| 100°西大條覺          | 10 西岡利八                              | 50°西田精          | 50°西出辰次郎           |
| 5°西松唯一            | 10°西村輝一                              | 10 西山芳三         | 20°錦織幹             |
| 100 錦織幹           | 20 新潟市                               | 100 日本資本會<br>泉社 | 50 日本株式會社          |
| 50 日本水道木管<br>株式會社 | 10 日本カーラー<br>会社                      |                 |                    |
| ぬ の 部             |                                      |                 |                    |
| 20°沼田尚徳           | 20°沼田征矢雄                             |                 |                    |

|          |           |           |          |
|----------|-----------|-----------|----------|
| 10 前田兼雄  | 5 前田松韻    | 10 前原重晴   | 10 前原良太郎 |
| 10°前田興市  | 20°牧彦七    | 50°牧野雅樂之丞 | 30 町田重猛  |
| 10°正木虎藏  | 10 松井照藏   | 5 松井惣太郎   | 10 松浦角太郎 |
| 10°松尾愛亮  | 10 松尾義一   | 12 松尾久太郎  | 50 松尾工場  |
| 20°松尾富功祿 | 10 松川敏胤   | 2 松田健作    | 15 松田貞治郎 |
| 15 松田虎喜代 | 10 松田文次   | 10 松村章    | 10 松本敬次郎 |
| 10 松本良一  | 10 丸山市太郎  | 20°丸山示    | 10 丸山照六  |
| 10 丸山齡治  |           |           |          |
| み の 部    |           |           |          |
| 200°御厨規三 | 10 三浦義太郎  | 15 三浦慶次   | 10 三木榮八  |
| 20°三田善太郎 | 10 三池貞一郎  | 10 三根奇能夫  | 20°三宅二郎  |
| 10 三好貞七  | 10 三輪時三郎  | 10 三輪良均   | 10 水口通久  |
| 20°水野廣之進 | 10 水野五郎   | 10°水野練太郎  | 10 水谷一鏘  |
| 10 水山祐徳  | 10 宮内義則   | 10 宮尾揆一   | 10 宮城廉治  |
| 20°宮島三郎  | 30°宮長平作   | 20°宮本武之輔  | 20°宮本益太郎 |
| 10 溝江昇   | 10 御園桂三郎  | 10°名井九介   |          |
| む の 部    |           |           |          |
| 20°迎謹太郎  | 20°武笠清太郎  | 10 武藤於菟   | 10 武藤守明  |
| 10 牟田寅治  | 2 宗像仁輔    | 10 宗俊祐    | 10 村幸長   |
| 12 村越三四郎 | 10 村瀬吉雄   | 10 村野林一   | 10 村山末男  |
| 20°村山達三  | 10°村本初太郎  |           |          |
| も の 部    |           |           |          |
| 10°茂木藏之助 | 100°茂庭忠次郎 | 20°本島正輔   | 10 本橋軍次郎 |
| 10 本村屯   | 20°物部長穂   | 100 森忠藏   | 10 森 賢   |
| 5 森井健介   | 12 森川重雄   | 20°森垣龜一郎  | 10 森澤磐五郎 |
| 12 森下文作  | 10 森田利吉   | 20°守永平助   | 10 守屋應次郎 |
| や の 部    |           |           |          |
| 10 八木謙治  | 10 八木辨吉   | 50 八重澤工場  | 20°矢内信謙  |
| 30 矢野恒太  | 20°矢野道也   | 20 八島明    | 10 八田興一  |
| 20 安永五三二 | 10°安田靖一   | 10 山内伊平   | 20°山内喜之助 |
| 10 山内治平  | 5 山川義太郎   | 15°山形鐘太郎  | 10°山形要助  |
| 10 山岸安二  | 10 山下辰也   | 5 山極二郎    | 10 山口孝吉  |
| 5 山口敏藏   | 20°山口昇    | 20°山口準之助  | 15°山口龍之助 |
| 10 山倉嘉一郎 | 5 山崎武二    | 20°山崎匡輔   | 10 山崎賢郎  |
| 10 山崎林太郎 | 20 山路魁太郎  | 20°山下勝慶   | 30°山下利兵  |

|           |               |          |           |
|-----------|---------------|----------|-----------|
| か の 部     |               |          |           |
| 10 根岸耕司   | 10 根本茂夫       |          |           |
| の の 部     |               |          |           |
| 20°能見光男   | 10 野上重亨       | 20°野口寅之助 | 100°野口廣衛  |
| 佐賀市長      |               |          |           |
| 20°野口能毅   | 15 野澤房敬       | 10 野崎藤次郎 | 20°野々山幸吉  |
|           |               |          |           |
| は の 部     |               |          |           |
| 20°芳賀惣治郎  | 10 萩原俊一       | 15°萩野 越  | 20°島山好伸   |
|           |               |          | 荒玉道村組合管理者 |
| 20°八田嘉明   | 15°服部廣太郎      | 10°服部鹿次郎 | 300°服部良太郎 |
| 20°濱田東稻   | 15 濱田直義       | 10 原恭造   |           |
| 10°原靜男    | 50°原全路        | 10 原清明   | 10 原芳男    |
| 15°原田貞介   | 10 花井卯一       | 10 長谷川貞三 | 10 長谷川勝伍  |
| 10 長谷川幸之助 | 15 長谷川文吉      | 10 橋本一萬  | 10 橋本敬之   |
| 50°伴宜     | 10 半野經一郎      | 10 半野武雄  | 10 春木節郎   |
| ひ の 部     |               |          |           |
| 20°東森藏    | 10 楠口達三       | 10°久永勇吉  | 15 比田孝一   |
| 10 斎田健治   | 10 榎山千里       | 20 平井晴二郎 | 10 平尾昇    |
| 5 平川保一    | 10 平野義重       | 5°平山清次   | 5°平山復二郎   |
| 10 平林武    | 30°廣井勇        | 10 廣瀬一郎  | 10 兵藤直吉   |
| ふ の 部     |               |          |           |
| 10 深尾代治   | 30°福岡市長       | 10 福田勝彌  | 15 福田十太郎  |
| 10 福田次吉   | 10°福田稔        | 10 福田勇助  | 50 福島市    |
| 150°福島甲子三 | 10 福島喜代士郎     | 20°福原錢太郎 | 5 伏島信九郎   |
| ○伏見彦衛     | 5 藤井彌太郎       | 10 藤田弘直  | 30°藤田周藏   |
| 100°藤田信次郎 | 10°藤澤幾之輔      | 10 藤崎三郎助 | 20°藤崎三郎助  |
| 20°藤根常吉   | 12°藤松省三       | 5 藤村謙    | 10°藤宮唯一   |
| 20°藤原喜太郎  | 20°二日市貞一      | 15°二見鏡三郎 | 10°船越岡次郎  |
| 15°舟橋了助   | 100°古市公威      | 20°古川阪次郎 | 10 古川福太郎  |
| 10 吉屋一旭   | 50 富士電機製造株式會社 |          |           |
| ほ の 部     |               |          |           |
| 10 星野四郎   | 20°細野芳彦       | 10°保原元二  | 10 堀新吾    |
| 10 堀威夫    | 10 堀内貞造       | 50°堀江勝巳  | 15 堀見末子   |
| 10°本多敏樹   |               |          |           |
| ま の 部     |               |          |           |
| 20°眞島健三郎  | 10°眞島寅三郎      | 10°眞野文二  | 20°前川貫一   |

|              |                                |            |                               |
|--------------|--------------------------------|------------|-------------------------------|
| 10 山田 武治     | 10 山田 周一                       | 3 山田 一     | 10° 山田 博愛                     |
| 10 山田 隆二     | 10 山田 良實                       | 10 山田 陽清   | 20° 山中 邁一                     |
| 50° 山根 植藏    | 10 山本 勝                        | 10 山本 峻    | 5 山本 新次郎                      |
| 5 山本 信要      | 20° 山本 敏                       | 10° 山村 英太郎 | 5 山領 貞二                       |
| <b>よ の 部</b> |                                |            |                               |
| 10° 横尾 弘貞    | 15° 横山 信                       | 20° 横山 徳太郎 | 20° <small>門司市長</small> 吉川 孝一 |
| 10 吉川 孝治     | 10 吉田 勘右衛門                     | 20 吉田 耕一   | 10 吉田 幸吉                      |
| 20° 吉田 登     | 10 吉田 光夫                       | 10° 吉武 正八  | 5 吉富 義助                       |
| 20° 吉町 太郎一   | 10 吉村 恵吉                       | 20° 吉村 長策  | 100° 米元 晋一                    |
| <b>わ の 部</b> |                                |            |                               |
| 10 鶴尾 肇龍     | 10 和田 大五郎                      | 10 和田 重辰   | 100° 和田 忠治                    |
| 20° 和田 龍吉    | 10° 渡邊 嘉一                      | 20° 渡邊 又次郎 | 10 渡邊 節                       |
| 30 渡邊 嘉夫     | 100° <small>小樽市長</small> 渡邊 守治 |            |                               |

寄附金總額及人員數 合計 金 22,427 圓 (人員 941 名)

以 上